特別
チ 6
3890
333

人名
惣索引

（尺牘所在）　（小伝）　頁

ア

晁親王　維三二　4
安積艮斎　儒一七、四一　5
安島帶刀　維七四、七八　7
安部井磐根　明八一　8
安藤素軒　儒一二　11
会澤正志斎　維六八、六九、七四、七七　1
青木昆陽　医一一　1
青木周蔵　維三〇　2
青木範重　維七七　12
青山延于　維七〇　2
青山延光　維七〇、七八　2
赤尾可官　国九三　2
赤松滄洲　儒二二　3
赤松蘭室　儒四六　3
赤松高洲　儒六〇　3
赤松則良　維五二　3
明石大助　維四七　3
縣六石　維六六、六八　13
秋月韋軒　儒二一、六五、六六　4
秋月種樹　維三三、二四三、二五六、三二五、四八一　3
芥川竜之介　明三八二　4
朝川善庵　儒二一、一九三、三五三　5
朝川同斎　儒三五二　5
淺田宗伯　国一一、儒二一七、医九三　6
淺野長勲　維四八二　(6)
蘆原東山　儒二九二　6
足代弘訓　国七一　7
足立長雋　医二、二三　7
足立正聲　維四一五　8
東東洋　国一五　10
跡見花蹊　女四一　8
跡見李子　女四二　9
饗庭篁村　明二〇、二二二　9
天野九郎右衛門　維三九四　12
雨森芳洲　儒二六　9
鮎澤伊太夫　維三五二　9
新井白石　儒二五一、二七一、三〇一〇、三七一　10
新井白蛾　儒四五一　10
新井石禪　僧七　(11)
荒木田久老　国一〇一　11
荒木田久守　国一三二、一九四　11
有島武郎　明三八一　(12)

イ

五十嵐敬之　維四六一、五九一　14
井田讓　維一八九　17
井上馨　維四一、一四一　24
井上勝　維一八六　24

井上毅 維五5 三〇2 八三 24
井上文雄 国一10 二四2-6 25
井上四明 儒一〇5 一五6 25
井上金峨 儒一〇1 25
井上頼圀 国六7 26
井上通泰 国二5 26
猪飼敬所 儒八2 14
猪隈夏樹 国一四5 26
伊丹重賢 維三二8 18
伊地知貞馨 維一二7 18
伊地知正治 維八〇3 19
伊藤圭介 医四5 19
伊藤仁斎 儒三一7 20
伊藤東涯 儒三1 二七7 俳一〇6 20
伊藤蘭嵎 儒一四 20
伊藤東所 儒二1 六〇1 21
伊藤東涯 儒七2 21
伊藤坦庵 儒三〇4 21
伊藤博文 維二1 四九 五四4 22

伊藤益道 儒六2 23
伊東玄朴 医三5.6 7 31
伊東巳代治 維一八7 25
伊東祐命 国一七5 25
伊能友鴎 維六二 26
伊能忠敬 雑七 (26)
伊能穎則 国四7 23
伊原青々園 明三三8 26
池内陶所 儒三〇6 (31) 14
池尻茂四郎 維一18 14
池田慶徳 維四2 15
池田謙斎 医九2 15
池田禎蔵 俳一〇11 15
池原香穑 国一七3 16
石井潭香 儒八3 16
石川依平 国七7 16
石川竹厓 儒四5 17
石川丈山 儒三〇8 (27)
石河正養 国一四3 (27)
石川清之助 (中岡慎太郎ヲ見ヨ) 17

石島筑波 儒三九1 六八4 23
石塚竜麿 国三七1-7 17
市川寛斎 儒二5 17
市川米菴 儒二6 俳九4 18
市川団十郎(いちかわだんじゅうろう) 国一18 18
市島春城 明二3 23
一茶 俳四4 19
稲垣白巌 儒三3 (31)
稲田重蔵 維三五7 27
犬養毅 明一二 27
飯盛挺造 医九5 (27)
今村虎成 国九1 (27)
岩垣龍渓 儒五4 28
岩倉具視 維八2 二七4 28
岩倉久子 女二1 29
岩倉具定 維三1 29
岩崎鴎雨 儒四3 29
岩崎弥太郎 明九 29
岩下方平 維二八5 30

岩瀬華沼 30
岩瀬忠震 国一9 維五七3 30
巌谷修 儒六1.2 30

ウ

宇佐美灣水 儒六六6 33
宇田川玄隨 医一1 34
宇田川玄真 医一12.13 34
宇田川榕庵 医一14 六 34
宇野明霞 儒一2 35
鳥亭焉馬 明五5 35
鵜飼吉左衛門 維七一7 33
上杉鷹山 儒五二1.2 33
浮田一蕙 維四三3 37
生方鼎斎 儒三九6 俳四9 35

エ

江木鰐水 儒四三3 四九1 33
江木千之 明六3 34
江澤講修 国一三5 34
江藤新平 維五一2 34
江馬蘭斎 儒四五6 35
江馬細香 儒六〇8 35
江馬天江 39
江村北海 儒三3.四5 33
永機(其角堂) 俳二4 37
榎本武揚 維一七5 三四2 五〇2 五二1 38

オ

織仁親王 維三1 60
小川萍流 国九2 190
小笠原長行(図書頭) 維三四3 42
小栗上野介 維三四1 46
小澤武雄 明三三4 45
小澤蘆庵 国一2四1 45
小野勝義 国九6 47
小野蘭山 儒八3 医一3 47
小野寺十内 軸一一2 47
小林歌城 国一〇2 48
小原鉄心 維三一1 二四1 三五3.4.5 二八8.9 二九1 四五4 48
緒方洪庵 医四3.4 43
尾崎紅葉 明三六3 45
大石良雄 軸一一1 48
大内青巒 僧六5 48
大江廣海 国二1 49

大江丸 俳二1 60
大木喬任 維三1.三4.二六4 49
大久保忠真（加賀守） 維三七1.2 49
大久保要 維六九2 50
大久保一翁 維七4 50
大久保利通 維三2.九2.五四3 50
大窪詩佛 儒三5 50
大隈重信 維三4 51
大郷学橋 儒五5 51
大浦兼武 明二5 51
大久保湖州 明二5 57
大倉喜八郎 維二4.5 51
大塩平八郎 儒二七4.五三5.維四1 52
大島維道 儒一07 52
大洲鉄然 維四6 52
大谷光尊 僧六1 53
大谷光演 僧六2 53
大槻磐水 医9.三1 54
大槻磐里 医一10 54
大槻磐渓 儒六1.医七 54
大槻俊斎 医二11 55
大槻如電 医四7 55
大西祝 明二8 55
大鳥圭介 維一七6.三四4 55
大沼枕山 儒三1.8 55
大野梁村 儒四03 56
大場一真斎 維 56
大橋訥菴 維一九1 56
大橋玄六 維六六4 56
大原重徳 維三3-5 57
大原谷舟 俳九5.6 57
大畑春園 回七1 57
大堀正輔 回三2 57
大村益次郎 維三6 58
大森快庵 儒四5 58
大山巌 維四4 58
大山綱良 維八04.軸二02 59
大樂源太郎 維四七5 59
大和田建樹 国二4 59
太田錦城 儒二八4 53
太田全斎 儒一06 53
太田垣蓮月 女五.六1 53
岡千仞 儒二六.28.六二34 41
岡田鴨里 儒七7 41
岡田新川 41
岡松甕谷 儒六五4 42
岡本花亭 儒五01-4 42
岡本哲藏 儒五05 42
岡本保孝 俳九9 42
岡本柳之助 明七2 42
荻生徂徠 儒七6.軸一三.三011.三七23 57
荻生櫻水 儒三九5 43
奥保鞏 維三八6 44
奥田義人 明六2 44
奥野小山 儒七8.五四6 44
落合雙石 儒七6 46
落合直文 国二05 46
乙二 俳四5 47

カ

周子妃（東伏見宮） 女二2 196
加藤枝直 国八2 66
加藤千蔭 国二十五4.二四8 67
加藤千浪 国04 67
加藤弘之 明三1 67
加藤高明 明一4 67
加納諸平 国八3.二七10 68
賀茂真淵 国一1.二1 70
賀茂季鷹 国二23.俳九8 70
香川景樹 国九1 62
香川景恒 国03 62
香川景嗣 軸五 74
香川敬三 維四八5 63
荷田春満 軸三 64
鹿島磨 雑九2 63
楫取素彦 維一06 63
狩野亨吉 明六6 (68)
狩谷棭斎 儒三三.三七10.11 73
海江田信義 維四9.一三3.二六2 62
海保漁村 儒四6 61
春日潛庵 儒六三4.維三五1 63
葛三 俳四8 63
勝安芳 維一七1.五三2.4.五五5 65
勝野雲山 軸六六4 64
勝間田稔 維四三4 64
桂太郎 維三01.明一1.二3 66
桂川甫周 医一9 65
桂川甫賢 医一8 65
桂山彩巖 儒三八1 66
金子教孝 儒一3.維七五4 73
金子堅太郎 維八8 72
金子馬治 明二4 (74)
樺島石梁 儒一三4 69
貝原益軒 儒三05.三三1 69
亀井昭陽 儒一五2 69
亀谷省軒 儒九 74
岸岱 俳五4 69
川上操六 維三八4 70
川崎重恭 国一九3 71
川瀬教德 維七二2.七5 72
川田甕江 儒六5.六五5 71
川路利良 維二6.一八3 72
川路聖謨 維一三1 72
川村雨谷 俳六3 64
川村竹坡 儒六5 64
河合寸翁 維四一1.六一 73
河田景與 維四一4 62
河田迪斎 儒七4 71
河田貫堂 儒四6 71
河竹黙阿彌 雑六 73

キ

木戸孝允 維二3 七1 79
木下逸雲 俳五5 九7 79
木下幸文 国二三3 82
木下犀潭 儒四4 79
木下長嘯子 軸二 79
木下順庵 儒三03 80
木村芥舟 維一三3 80
木村巽斎 儒四五4 80
木村正辞 国四456 80
喜多村筠居 雑九4 78
祇園南海 儒三五2 75
菊池教中 維一九2 六六1 76
菊池五山 儒一七6 二4 76
菊池袖子 国二5 76
菊池南洲 儒二3 76
菊池大麓 明一二3 77
岸本大隅 雑九3 77
北慎言 雑九1 77
北垣國道 維四一6 77
北畠治房 明二三3 77
北村季吟 国二二1 二九 三〇 軸一 78
北村篤所 儒二7 78
其一 俳八7 82
衣笠豪谷 儒六五1 82
清川八郎 維一六 82
清原雄風 国二三5 81
狂歌堂真顔 国一12 俳三5 81
玉潤 僧三3 81
桐野利秋 維四〇3 82

ク

久坂玄瑞 維七4 84
久保天隨 儒五一4 86
久保木竹窓 儒四一4 86
久米幹文 国二〇3 87
九條道孝 維五4 84
九條武子 女七 八 85
草場佩川 儒七5 84
日下部九皐 維一10 84
日柳燕石 維三3 191
國木田獨歩 明三四3 85
國友善庵 維三五5 六四8 七八4 85
熊谷直好 国九4 86
熊坂磐石 儒四七4 86
熊澤蕃山 儒四〇9 軸八2 86
雲井龍雄 維四四2 87
倉富勇三郎 明三1 87
倉成龍渚 儒三八2 88
栗田土満 国八4 88
栗原信充 88
栗本鋤雲 維一三2 88
來原良藏 維四七1 88
呉 又兵衛 儒六四4 89
黒岩蕙菴 維六三7 89
黒河春村 国一一3 89
黒田清隆 維二一4 一五3 五〇1 90
黒田清綱 国一四6 90
鐵 復堂 儒五四7 89

コ

小池道子 女六3 94
小石元瑞 儒六四2 医四1 五 41
小出粲 国六3 94
小杉天外 明二三6 (97)
小關三英 医二8 三3 97
小中村清矩 国二〇1 99
小林松亭 医一〇3 100
小堀遠州 軸二六 二七 100
小松帶力 維二三2 100
小南五郎 維五九2 103
小宮山楓軒 維七四7 七九5 (95)
小山霞外 維六六3 101
小山春山 儒二1 101
小川春町 俳三4 101
戀川春町 俳五1 102
近衛家熙 維五2 六四6 96
近衛忠熙 維一八2 明二三1 96
近衛篤麿 儒四六5 96
近藤芳介 国八6 102
近藤芳樹 国八5 102
近藤篤山 儒四六5 102
児島強助 維六五3 102
児玉源太郎 明二4 102

ケ

契沖 軸二 92
月性 維七3 92
月照 維一5 92
元明 雑八5 93

サ

佐久間象山 維六1. 維五七1. 五八 108
佐々十竹 儒一1. 109
佐々友房 維四〇6 109
佐々政一 明二三6 109
佐々木高行 維四六3 110
佐々木中澤医二6. 109
佐々木信綱 国三〇6. (110)
佐々木文山 儒四1. 113
佐藤一斎 儒八6.7 一九2. 110
佐藤方定 国二2 111
佐藤六石 儒四九2 111
佐野竹之介 維三五6. 七二4. 111
西園寺公望 維八1. (104)
西郷隆盛 維二1. 五四2. 104
西郷従道 維三5. 105
嵯峨實愛 維四六5 107
税所敦子 女六2 105
斎藤竹堂 儒一七3.4. 105
斎藤監物 維七〇3. 105
斎藤拙堂 儒三8. 三五1. 三三2. 軸九1. 三八4. 三七13. 106
斎藤鑾江 儒五三4 106
斎藤實 明一6. 106
酒井抱一 俳七. 九2. (106)
坂井虎山 儒三〇5. 107
坂谷朗廬 儒四八3. 107
榊原月堂 儒四二2. 108
榊原鍵吉 維五三5 107
櫻眞金 維六7. 三五3. 110
櫻東雄 維一3. 111
櫻國輔(原国輔ヲ見ヨ) 111
佐木竹堂 儒四二2. 111
澤近嶺 国七6. 111
澤宣嘉 維三二2. 104
澤田東江 儒四三3. 105
三條實萬 維五3. 107
三條實美 維八1. 二七6. 五一1. 105
三條西季知 維八5. 六四3. 105
三遊亭圓朝 明五 9-10. 105
山東京傳 雑五. 113
山東京山 雑九7. 112
菜翁(巣北ヲ見ヨ) 112

シ

士朗 国四8. 俳一4. 115
志筑忠次郎 医一4 116
塩谷宕陰 儒六3 115
塩谷貞敏 雑八3 110
重野成斎 儒五2. 116
宍戸璣 維四三5 五〇3. 115
品川彌二郎 維三4. 四6. 116
篠崎小竹 儒一五7. 五三1. 117
篠崎竹陰 儒五四1. 117
篠原國幹 軸二〇1. 117
柴秋村 儒六1. 四2. 118
柴四朗 明七4. 118
柴野栗山 儒三三6. 118
柴原順治 維五六 118
島義勇 維二三5 122
島田蕃根 儒二2. 119
島田重禮 儒四八4 119
島田三郎 明五2. 三三2. 119
島地默雷 僧五1. 119
島村抱月 明二一7. 122
清水濱臣 国七2. 一五6. 120
清水讃光 国五7. 120
清水光房 120
清水清太郎 維八〇3 120
下田歌子 女三2. 六4. (120)
杉田玄白 医一6 121
杉田玄端 医四6 121
杉本蘭疇 医三8. 121
杉山千太郎 維六八6. 121
鱸松塘 儒四八5. 125
鈴木重顕 国一七4. 125
鈴木力 明八2. 125
末松謙澄 維五〇5. 125

ス

周布政之助 維四三1. 119
末廣重恭 明七1. 123
菅茶山 儒三三5. 三六3. 維八6. (122)
菅政友 国五2. 123
菅井梅關 儒二九1. 124
菅沼斐雄 国二2. 二三4. 雑八7. 124
杉孫七郎 国四7. 維一〇4. 124

セ

是眞 俳八6. 123
成瓶 僧四1. 127
関源内 儒二1. 128
関義臣 明二6. 128
関根正直 明二三7. 128
関藤々陰 儒八4 129
雪生 俳四11. 129

雪中庵 俳一6 129
千家尊福 国六4 129
川柳（第五世） 俳三3 129

ソ

曽我祐準 維三八2 130
宗演 僧六4 130
宗珀 僧三2 130
巣兆 俳一2 四3 131
蒼虬 俳一5 131
副島種臣 維三3 軸一九 131

タ

熾仁親王 維三二2 132
威仁親王 維三三3 132
多田海庵 維一14 132
田代清秋 133

田中河内介 維四二1 133
田中不二麿 維一五4 129 133
田中光顕 維四7 133
田中頼庸 国六5.6 134
田邊蓮舟 儒五3 134
田能村竹田 俳五1 134
太宰春臺 儒三三1 二七2 俳一〇7 134
伊達千廣 国一二4 133
伊達宗城 維三三6 三二1 四八6 143
大含 僧三4 143
鷹司政熙 維五5 135
高崎五六 維一二2 135
高崎正風 国四4 維九5 135
高島秋帆 維五七2 136
高島鞆之助 維八4 三八1 136
高杉晋作 維七2 軸一八 136
高田早苗 明一五5 二二1 137
高野長英 医三2 137
高橋泥舟 維七3 五七4 明五1-3 137

高橋太華 明八3 138
高橋廣道 国二45 138
高橋多一郎 維六四4 七〇6.7 七二 138
高橋是清 俳四6 138
高久隆古 138
高森碎巖 俳八5 138
高山彦九郎 明三三 139
寶田通文 国七7 139
瀧鶴臺 儒四八3 139
瀧澤馬琴 雑一四 140
澤庵 僧一 雑八1 140
武田耕雲斎 維七九1-3 140
武田彦右衛門 維七三6 141
竹村茂雄 国二七 8.9 141
立原翠軒 維七八8 俳九1 141
立原杏所 維六九4 七七6 俳四1 141
立原朴二郎 維七三8 142
橘曙覽 国二八 142
橘守部 国七3 142

橘上世子 国一八5 142
橘道守 国五5 143
谷干城 維三〇3 三八3 143
谷垣守 国一八1 144
谷鉄臣 維六四7 144
谷文晁 俳八2 一〇9 144
谷萬六 儒六七3 143
玉木文之進 維三九1 144

チ

茅根伊予介 維七〇4 七五2 146
趙陶斎 儒三〇14 146
長三洲 儒六6 146
直入 俳八3 147
陣幕通高 明五4 147

ツ

津坂拙脩 儒四七1 144
津田梅南 儒六七5 144
調所笑左衛門 維八一 144
塚田大峯 儒二3 148
塚原渋柿園 明三7 148
綱島梁川 明一四2 二一6 148
椿椿山 俳六2 九3 149
坪井信道 医三4 149
坪内逍遥 明五1 二2 二四1-三一 149
鶴峯戊申 国一九5 150

テ

寺内正毅 維三〇4 150
寺門静軒 儒九 151
寺崎廣業 俳六6 151
寺島宗則 維四3 二二1 三二7 152

寺島秋介 維一〇5 152
寺田左右馬 維六三6 152
天章 維四七3 152
天璋院敬子 維五二3 151

ト

戸川逢仙 維一三4 153
戸田逢軒 維七七4 153
戸塚亮斎 医三10 154
桃秋 俳二3 154
東條琴臺 儒六4 四〇1 154
藤堂高文 儒六〇4 154
徳川光圀 軸一〇 155
徳川斉昭 維七三 七四1 七六1-4 155
〃 夫人 維七四2 155
徳川慶喜 維三六 155
徳川慶勝 軸一四 156

徳大寺実則 維三六 156
徳富蘇峯 維八二 明三一、四〇—四三 156
徳富芦花 明三五1.2 156
徳富 愛 明三五3 157
獨圓 僧四3 158
富樫廣陰 回一三4 153
富井政章 明一三3 157
富岡鉄斎 俳六4 157
伴林光平 維一15、六七 158
豊田天功 維六四5、六八7、七四6、七八6.7 157
鳥尾小彌太 維四10、一〇3、五三3 158
泊斗豊作 維七五7 158

十

那波道圓 儒三〇2 159
那波魯堂 儒三6 159

那波晨之助 儒六四1 159
奈良原繁 維四一三5 160
内藤恥叟 維六九7、明六5 160
仲田顯忠 回一三3 160
仲村楊斎 儒六三1 160
中井贊庵 儒六八5 161
中井竹山 儒一四 161
中井履軒 儒一五1 161
中井蕉園 儒四4 161
中井弘 維四7、四〇5 162
中江藤樹 軸八1 162
中岡慎太郎 維六三2、六四1 162
中澤雪城 儒四4 163
中島信行 維五〇4 163
中島椋隠 儒三三8 163
中島錫胤 維三三2 163
中島作太郎 維四11 164
中根雪江 維四五2 164
中西深斎 軸二五 164

中林竹洞 俳五3 164
中御門経之 維三七1 164
中村佛庵 雑九6 165
中村栗園 儒六3 165
中村確堂 165
中村莊助 維三六5 165
中村敬宇 儒五4 166
中村孝麿 維五7 166
中山忠能 維五6、六四2 166
永井玄蕃頭 維五三1 166
永坂石埭 儒四九3 167
永島華隠 儒八1 167
永田忠原 167
永田德本 軸二三 167
長岡監物 維九1 168
長久保赤水 儒一4 168
長澤伴雄 回八6 168
長野豊山 儒三八3 168
長與專斎 医九1 169

梨本祐之 回五3 169
夏目成美 俳四7 170
夏目漱石 明三六1 170
成瀬十助 維四七7 170
成島道筑 儒三〇13 171
成島龍洲 儒四一1 170
成島衡山 儒四三3 170
成島柳北 明六1 171
南山宮眠 回一4 171
南條文雄 僧五2 172
南部彦助 維三一3 171
南摩綱紀 儒六一6 172

二

二宮錦水 儒四〇2 173
西川吉輔 維四五5 173

西庄源三 儒二一6 173
西田直養 回三三6 173
西山拙斎 儒三七7.8 174
新島襄 明一四1 174

又

貫名海屋 儒二7、三三7、俳一〇10 175

木

根岸友山 維六五1.2 176

ノ

乃木希典 明二1、軸二一 177
野口英世 医一〇1.2 177
野口寧斎 儒五一1 177

野田笛浦 儒一七5 178
野津鎮雄 維八〇2 178
野中兼山 儒六三2 178
野村篁園 儒一五5 178
野村望東尼 維一16 179
野村靖 維四5、一四2、四三2 179
野呂介石 俳五2 179

八

羽倉簡堂 儒二8、維六6 180
羽田野敬雄 回一七2、軸六七 180
長谷川菅緒 回八3 181
長谷川泰 医九4 181
長谷川三葉子 明三四1、三九 181
馬場穀里 医一5 181
梅堂 俳一7 182

萩原正平 国七6 182
麥浪 俳二2 190
橋爪助三郎 儒五四3 182
橋本香坡 儒五四4 維四五6 182
橋本實梁 維二七3 182
橋本左内 維一7 183
蓮田市五郎 維七05 183
秦滄浪 儒一二4 183
八田知紀 国一二1.2 184
服部南郭 儒二八2 三06 三三2 三七5 四五2 184
服部仲英 儒六三3 184
服部惟良 儒六三4 184
花房勝之進 維三六5 185
濱尾新 明一三2 185
濱口雄幸 明一4 185
林鳳岡 儒三5 186
林榴岡 儒四3 186
林鳳谷 186
林述斎 儒一九1 186
林檉宇 儒三四3 187
林子平 儒二七3 187
林孚一 維四一3 187
原國輔 維一九3 187
原敬 明一0 188
原啓輔 維四02 188
原道太 維一17 188
原任藏 維七五1 188
原田成德 維七五3 189
原田兵介 維七七1 189
伴信友 国四3 三一 三二 189
伴蒿蹊 国一3 三2 189
坂正臣 国二04 二3 190
磐珪永琢 軸二八 190
廣瀬武夫 軸二二 196
廣津柳浪 明二二4 197
百里 儒二一3 196

ヒ

日根對山 俳八1 191
永室長翁 国五1 192
尾藤二州 儒一03 一三1 192
尾藤水竹 儒一三2 192
檀山坦斎 俳一一 192
東久世通禧 維八3 三七2 193
人見樾斎 儒四六4 193
土方久元 維一四8 一五6 193
平田篤胤 国一五8 193
平田鉄胤 国八1 一五9 194
平野國臣 維一13 194
平野玄中 儒三三3 194
平野五岳 維一三5 195
平山省斎 維一三5 195
廣瀬淡窓 儒三六5 195
廣瀬旭莊 儒五三6 195
廣瀬青村 儒九3.6 196
廣瀬林外 儒九4 196

フ

芙容原資 儒四五5 197
福岡孝悌 維四六4 198
福澤諭吉 医二12 198
福島安正 維三八5 198
福田俠平 維六01 199
福地櫻痴 明一五3 199
福原越後 維四七4 199
福本日南 明七3 199
藤井竹外 儒一三6 五四5 200
藤井藍田 維四二2 200
藤井九成 維四二4 200
藤井懶斎 儒六八1 200
藤井鳥尚 国一五5 200
藤岡作太郎 明二三5 201
藤川三溪 維四六2 201
藤澤東畝 儒四四2 五三3 201
藤澤南岳 儒二3 202
藤田幽谷 維六八1 七五8 七九4 202
藤田東湖 維六八2-5 七四3 七六5 202
藤田小四郎 維七二5 202
藤田傳三郎 維二一2 203
藤野海南 儒六五3 203
藤原惺窩 儒三01 203
藤本鉄石 維六3 204
藤森天山 儒二八3 維六4 軸二六2 204

ホ

穂井田忠友 国九2 206
穂積陳重 明三2 206
保田光則 国一一6 206
帆足萬里 儒三四1 206
帆足杏雨 儒二07 207
暮柳 俳一8 207
細井廣澤 儒三七4 俳一0.1 207
細井平洲 儒五二3 207
細井九皐 俳一03 208
細合半斎 儒八1 209
本因坊丈和 俳二2 209
本阿彌長根 俳二4 209
本田親雄 維九3 208
本間遊清 国七45 二四1 208
穆山 僧四4 209

マ

間崎哲馬 維五九3 210
間島冬道 国三1.2 210
真木保臣 維一11.12 210
摩島松南 俳一0.8 210
萬里小路博房 維二七5 211
卷菱湖 俳四10 211
蒔田暢斎 儒六七1 217
正岡子規 明三2.三六2.軸三0 211
増島蘭園 儒一0.8.六0.7 (211)
股野琢 儒四九4 211
町田久成 維二4 212
松浦竹四郎 儒三7 212
松浦詮 維四八3 212
松岡恕庵 医六2 213
松方正義 維一5.一五8 213
松崎観海 儒三2 213
松崎慊堂 儒七1.一五3.三四2.三七9 213
松田直兄 国一三1 214
松田重助 維四七2 214
松平定信 軸一三 214
松平冠山 儒六0.2 214
松平慶永 維四五1 215
松林伯圓 明五6 215
松本愚山 儒六0.3 215
前田陸山 維三九2.四三3 215
前田正名 明六4 215
前田夏陰 国六1 216
前野良澤 医一2 216
前原一誠 維七5.六0.2 216
丸山作樂 軸二七 217

ミ

三岡八郎（由利公正ヲ見ヨ） 218
三浦梅園 儒三九4 218
三島中洲 儒六一5 218
三島自寛 俳九10 218
三原秀伯 医二9 218
三宅石庵 儒四六1.2.六八1 218
三宅春樓 儒六八3 219
三輪執斎 儒三0.7 220
三輪信善 維三五4 219
三輪田元綱 維四六6 219
三井八郎右衛門 維二1 219
壬生基修 維八4 (219)
箕作秋坪 医四2 221
箕作阮甫 儒八1 220
箕浦專八 維六三3 220
水野忠邦 維三七3 221
皆川淇園 儒三三4.四七3 221
南川維遷 儒六三5 221
湊長安 医二7 222
宮田迂斎 儒三九3 222
宮原節庵 儒九1.2 222
宮部鼎藏 維四0.1 222

ム

陸奥宗光 維一四6.一五1 224
向山黄村 維三四5 224
村岡（近衛家老女） 維一4 224
村岡良弼 儒五1 224
村井椿壽 医八 224
村上佛山 儒六2.六三1.2 225
村雲尼公 女一 225
村瀬藤城 儒二04 225
村田春門 国三1 225
村田春野 226
村田了阿 226
村田清風 維一02 226
村田新八 維八0.1 226
村山半牧 維六5 226
村山覚馬 維六三4.5 227
室鳩巣 儒三0.12 227

モ

物集高世 国八2 228
毛利元德 維一0.1 228
本居宣長 国一五1.二五1.軸四 228
本居春庭 国二五2 229
本居大平 国四2.一五23.二六 229
本居豊穎 国八4.二0.2 229
元田永孚 明三 230
森有禮 維三2.一五2 230
森鴎外 明三六4 230
森篤次郎 明六 230
森槐南 儒五一2 (230)
森川竹窓 儒四二1 231
門田樸斎 儒四三1.四八1 231

ヤ

屋代弘賢 国一6.9.8.一六 231
矢野玄道 国一四2.一五7 232
矢野文雄 明一五4 232
安井息軒 軸九2 232
安岡良亮 維五九4 232
安田躬弦 233
安田善次郎 維二3 233
柳原前光 維四八1 233
梁川星巖 儒二八5.維一1.六2.軸六1 234
梁田蛻巖 儒三2.三七6.雑八2 234
大和國之介 維二0.4 234
山岡鉄舟 維一七2 234
山鹿素行 儒五五 235
山川健次郎 明二4 235
山縣周南 儒四2 235
山縣有朋 維四2.一2.三0.1.明二2 236
山口菅山 儒四六6 236
山口剛斎 儒二3 236
山田常典 国五6 236
山田清安 国九5 236
山田亦介 維三九5 237
山田宇右衛門 維三九3 237
山田顕義 維一四3.一五7 237
山田方谷 儒一六4 237
山田美妙斎 明三四2 237
山地蕉窓 儒一三5 237

山中信天翁 雑六四8 238
山梨稲川 儒六八 六九 238
山内谷堂 維三三1 238
山村才助 医二1 239
山村道庵 軸二九 244
山本権兵衛 雑三0 23 239

ユ

湯浅常山 儒一0 2 三九2 240
由利公正 維二四2 二五1,2 二六1 二八6,7 二九2,3,4 240
結城蕾堂 儒五一3 240

ヨ

与謝野寛 明三七1 (241)
与謝野晶子 明三七2 (241)
横井小楠 維三八1,4 241
横川省三 明四 242
横山由清 国一三 242
若林強斎 儒四七2 251
鷲尾隆聚 維四五3 251
綿引次郎右衛門 維七七2 251
渡忠秋 国四1 251
渡邊華山 俳一0 45 252
渡邊小華 俳六5 252
渡邊國武 維八5 252
渡邊千秋 維三0 5 252
渡邊鼎 医一0 4 253
渡邊守助 医一0 5 253

吉井友實 維四4 九4 242
吉雄俊蔵 医二 4,5 242
吉田令世 国二1 維二九1 243
吉田東洋 維六三1 243
吉田松陰 維一9 243
吉益東洞 軸二四 243
芳川顯正 維四5 一五9 244
芳野金陵 儒九8 244

ラ

賴春水 儒五八1 五七12 五八1 245
賴梅颸 儒五八2 245
賴春風 儒二八1 245
賴山陽 儒五六 2,3 俳一0 12 五八3 五九 245
賴杏坪 儒五七 3,4 246
賴采眞 儒六0 6 六四3 246
賴聿庵 儒二01 五七5 246
賴支峰 儒五七6 246
賴醇 維一8 軸一六3 246

賴達堂 儒六五2 247
賴立斎 儒二02 247
賴誠軒 儒四三2 247
禮々 僧四5 248

リ

立綱 国三3 五4 248
龍公美 儒三4 雑八4 248
龍眠 雑九5 249

レ

蓮二 俳一1 249

ロ

蘆元 俳一3 250

ワ

若槻禮次郎 明一7 (250)

ア

會沢安 82才
（天明二―文久三・一・一四 1782―1863）

恒蔵、伯民、号を正志又愬斎、水戸の儒臣、藤田幽谷の高弟。文化初年より公子斉昭を輔導ること十七年、幽谷の歿後彰考館總裁たること数年。斉昭の藩主たるに及び民政に與り藩務を管し、屢々学制意見を建議す。弘化元年斉昭幕譴を獲て致仕の後、禁錮に処せられしことあり。のち赦されて斉昭の外国の議に参ずるに尚り之を助く。安政五年斉昭再び譴を蒙るに及び慶篤を輔けて周旋甚だ力め、のち時務策を著はして慶喜に呈せり。

青木昆陽 72才
（元禄十二年―明和六・一〇・一三 1698―1769）

敬書、厚甫、江戸の商家に生れ幕府の儒官たり。はじめ京都に出で、伊藤東涯に学び専ら経済の学を講ず。元文四年幕命を以て典籍の事を管し、又屢々旨を奉じ諸州に遍歴し旧記の徴証とすべきものを索め、著述考証してこれを上進す。ついで評定所儒吏より轉じて書物奉行となる。曾て百穀の外甘藷を以て民生に有益なるものとし、遠く種子を薩州より需めて各地に配布し、また蕃薯考一巻を著はし弘く世に知らしむ。また蘭学に精通、博く洋書を譯せり。

山中信天翁 雑六四8
山梨稲川 儒六八、六九
238 238
吉井友實 雑四十九4
吉雄俊蔵 医二45
242 242
頼達堂 儒六五2
頼立斎 儒二02
247 247

青木周蔵 71才
（弘化元・六・五 — 大正三・二・六）
1844 — 1914

明治時代の外交官。長州の人。夙に洋学を修め医術を学ぶ。幕府征長の師を起すに及び長軍に従って浜田に向ひ医務に携はる。明治六年外務省に仕官。独・墺・和・丁の各国公使に歴任。帰朝後条約改正御用掛、外務次官。廿二年外務大臣に任ぜらる。廿六年大津露皇太子遭難により引責辞職。独英に公使として条約改正に尽力。廿三年再び外相。のち廿九年西園寺内閣の推輓により特命全権大使として米国に駐劄。帰朝後枢密顧問官に任ぜられ子爵を授けらる。

青山延于 68才
（宝永五 — 天保一〇・九・六）
1716 — 1843

量介。号雲龍又独斉。水戸の儒者。藤田幽谷等と相前後して出で大日本志神祇志を撰し、のち藩史編輯に與る。烈公の弘道館を起すや小姓頭兼總裁となる。皇朝史畧の著あり。

青山延光 64才
（文化一〇 — 明治三・九月）
1807 — 1870

量太郎。延于の長子。彰考館の編輯に補せられ、のち總裁となる。弘道館成るに及んで父と並んで教授たり。父の歿後、会沢・藤田（東湖）と共に藩の教化につとむ。明治二年朝廷に徴されて大学中博士となる。

赤尾可官（ヨシタカ） 89才
（明和元 — 嘉永五・二月）
1764 — 1852

左京。號柏園。京都の歌人。瀧口の官人で林丘寺宮の家司。香川景樹に学ぶ。田舎問答の著あり。

赤松滄洲 81才
（宝暦六 — 文和元）
1721 — 1801

鴻。良平。赤穂藩の儒者。赤穂の医員大川氏に養はれ、ために上京して医を学びしも喜ばず、儒学を宇野明霞に受く。廿七才にして藩儒員となり、のち家老に至る。宝暦十年以後致仕、京に出て学を講ず。周易象徴、論語省解ほどの著あり。

赤松蘭室 55才
（寛保三 — 寛政九・三・六）
1743 — 1797

勲。滄洲の長子。幼にして詩文を能くし、上京して岡伯潜・藪子厚等と文事を競ふ。父の致仕後、赤穂藩文学となる。安永年中、侯に請ひて学館を設け博文館といふ。人材輩出。赤城風雅集、赤城文敬志の著あり。

赤松高洲

翼。春庵の子。越智文平といふ。播磨の儒者。尾藤二州に就いて学ぶ。のち門弟に教授。

赤松則良 60才
（天保一二 — 大正九・九・二三）
1841 — 1920

海軍中将。横須賀鎮守府司令長官たり。男爵を授けられ、予備役に入りて後貴族院議員となる。

秋月種樹（タネ） 72才
（天保四・一〇月 — 明治三七・一〇・一七）
1833 — 1904

日向の人。幕末徴されて昌平黌学問所奉行となり、文久三年将軍家茂の侍讀となり若年寄に列す。維新後朝廷に仕官。八年以後元老院議官たり。同院廃止後錦鴨問廻候。廿七年貴族院議員に勅選。明治初年十五銀行創設に盡瘁せしことあり。男爵。

秋月胤永 77才
（文政七―明治三三・一・五 1824―1900）

幸軒。会津藩士。天保十三年江戸に遊学。弘化三年昌平黌に入り、業成りて帰国。文久三年藩主松平容保に従って上京。爾後公武の間に斡旋。戊辰之役会津城に籠城して奮戦。終身禁錮に処せらるるも、五年特赦。のち熊本の高校教授たり。経史に通じ、詩文書を能くす。

晃親王

山階宮。御先々代。

芥川竜之介 36才
（明治二五・三・一―昭和二・七・二四）

安積艮斎 71才
（寛政二―慶応元・二・七 1790―1860）

信（重信）。佐倉。奥州二本松の人。十七才にして江戸に出で佐藤一斎の僕となり、のち林祭酒の門に遊ぶ。廿四才以後駿河台に学舎見山楼を開く。四十六にして丹羽侯の文学となり、五十三にして二本松に下り藩学教授となる。のち再び江戸に抵役。嘉永三年六十才にして昌平黌教授に任じ、師一斎と共に育英に当る。艮斎文略、艮斎閑話、加藤清正伝など著書多し。

朝川善庵 59才
（寛政三―嘉永二・二・七 1791―1849）

鼎。江戸の人。片山兼山の子。朝川氏をつぐ。幼にして京・摂・九州に遊歴。のち帷を下して教授。平戸侯の招きに応じて赴き、重臣の待遇を受く。

朝川同斎 44才
（文化一―安政四・一〇・二三 1804―1857）

震。晋四郎。善庵の養子。はじめ加賀の人。十五才にして江戸に出で市川米庵の学僕となり書を能くし、廿五才にして善庵の養子となる。嘉永二年善庵の病歿後業を継ぎ、藩主平戸侯（伯爵松浦詮）の侍講たり。藤田東湖、日下部伊三次等と親交あり。嘉永末時事に啓発し北地開拓を建議せしことあり。尚書古今文管窺、眠雲札記等の著あり。

浅田宗伯 81才
（文化二―明治二十七・一・八）
1804 1884

惟常、号栗園、信州筑摩郡の儒医の家に生れ、若年にして上京、漢法医を中西・吉益の諸家に、儒道を鵜飼敬所・頼山陽に受く、天保10年以後江戸に開業、剃髪して宗伯と更め、名医の聞えあり、文久元年幕府に召され、つゐで侍医にあげられ法眼に叙せらる、維新後依然漢法を固守し、十二年朝廷に召され尚薬となり、のち終身年金を賜はる。

浅野長勲（ながコト） 96才
（天保三―昭和十・一・一）
1842 1937

蘆原東山 81才
（天保九―安永五・九・二）
1796 1876

幸七郎、仙台の儒者、世代にして京師に遊び、三宅尚斎・室鳩巣に学ぶ、享保六年藩の儒員に抜擢され江戸に行く、二十年国学建設に関して藩の有司と争ひ、罪を被り、宝暦三年に至る十八年間幽せらる、刑律の書、無刑錄十八巻を著す。

安島帯刀（アジマ） 48才
（文化三―嘉永六・八・三七）
1786 1853

彌次郎、信立、水戸の勤王家、藩主斉昭を扶けて国事に尚り、斉昭の幽せらるゝに及んで左遷、嘉永二年四月赦されしも、六年また斉昭の謹慎に関し訊問さる、八月廿七日、斉昭の子慶喜が西城に入るの世評を喜ぶの旨同僚に書送したるは職掌柄慎重を欠くの和為たること、併びに薩藩の士と通じ朝廷に遊説し公武の不和を醸すの罪を以て切腹を命ぜらる。

足代弘訓 73才
（天明五―安政四・一・三）
1785 1857

椎大夫、号寛居、外宮の祠官にして国学者、荒木田久老、本居春庭、大平に学び、上京しては芝山持豊に歌道を学ぶ、四十才にして江戸に出で朝川善庵・狩谷棭斎・北静廬・屋代弘賢・塙保己一等と交る、浮薄ふるな説を排撃、また経済の学を好み、天保飢饉には人々と議し窮民を救ふ、長・短歌、文章に長じ著書数多き中に国史人名部類は仁孝天皇の叡覧に入り、御硯を賜はる、大塩後素・斉藤拙堂等と親しく、門弟に佐々木弘綱あり。

足立長雋（ミチシ） 61才
（安永五―天保七・二・二九）
1776 1836

幕府旗下の士、浅野の医井上氏の子、薩藩の医員足立栖庵に就き漢医方を学び、その聞となる、のち篠山侯の侍医、また吉田長叔に従ひ蘭学を修め、天保二年医方研究数巻を撰す、蘭方産科医の先駆者。

足立正聲 67才
（天保二・九月―昭和四・一・二九）
1841 1907

鳥取の勤王家。十七才の時同藩佐幕党の為捕へられて投獄せられし。同志十八名と共に脱獄して長州に走り大村益次郎の塾に入る。明治元年京都弾正台判事となり、益次郎の暗殺するや、薩藩の轟某を下手人として四條河原に斬り、ために免官下獄。出獄後謫陵頭とふる。世れ年十二月、維新の勲功により男爵を授けらる。号を老狸と稱し奇人として知らる。

安部井磐根 85才
（天保二―大正五・二・九）
1832 1916

幕末の奥州二本松藩士。維新に際し藩主丹羽氏の帰順し旧領に封ぜらるゝに至る迄、斡旋する所多し。五年以後若松縣福島縣の縣政に関與、廿三年衆議院議員に選ばれ改進党に属す。全院委員長、副議長ふどを務めしことあり。条約問題に関し政府と衝突、卅五年以後出でず。

跡見花蹊 87才
（天保十一―大正五・一・一〇）
1840 1926

摂津の人。幼にして画を石垣東山及び槇野楚山に、漢学を後藤松陰に学び、また宮原節庵、圓山応立の門に入りしことあり。夙に女子教育に志し安政六年には大坂に、慶應三年には京都に私塾を開き、明治三年東上し、八年、女学校を神田猿楽町に創めた。廿年、現在の跡見女学校を創め、大正八年八才に至って隠退する迄、女子教育界に功績甚大。独身を貫き、また書画を能くす。

跡見李子
（明治元・一〇月）
1868 ―

男爵萬里小路通房の二女。跡見花蹊の養女となり、大正八年以後跡見女学校長をつぐ。

饗庭篁村 68才
（安政二―大正十・六・二〇）
1855 1922

與三郎。東京の人。明治初年新聞界に入り、訊刺、世話物、滑稽、時代物等に独特の筆致を以て初め櫻痴居士等と讀賣新聞に文名を馳せ、明治廿二年東京朝日新聞社に入り勤續三十年、大正八年客員となる。江戸文学の造詣深く、早大講師たりし事あり、また劇通として竹の屋主人の号にて軽妙ふる筆をふるふ。

雨森芳洲 88才
（寛文八―宝暦五・一・六）
1668 1755

後良、伯陽、東五郎。對馬侯の儒員（或は要人か）。伊勢の人。十七八にして江戸に赴き木下順庵に学び、その推薦により対州の文学となる。韓語に通じ朝鮮使節の来聘を斡旋す。その待遇に関し新井白石と議合はず。また荻生徂徠と親交ありしことあり。橘窓集、一一茶話、朝鮮器說ふどの著あり。

鮎沢伊太夫 45才
（文政七―明治元・一〇・一）
1824 1868

國維、廉夫。水戸の勤王家。高橋多一郎の弟にして弘道館舍長たり。戊辰の役奥羽征伐より帰り幕兵水戸を攻むるや、留守隊を督励して奮戰し、敵弾に斃る。

東東洋 75才
（明和二―天保一〇・一二・二三）
1765 1839

画家。俊太郎、儀藏。奥州の人。上京して画を狩野梅笑に学びその養子となり、のち大雅・応挙・月渓に学び、また長崎の方西園に就き、帰りて京都に住し、狩野の嗣を辞して一家をなす。法眼に叙せらるるに及び、仙台の画員となる。兼ねて書を能くす。

新井白石 69才
（明暦三―享保一〇・五・一九）
1657 1725

君美、勘解由。木下順庵に学び、汎く史籍を渉猟、識見卓絶、理財・制度・厂史・典故に通ず。元禄初年、徳川家宣の甲府邸に在る時、講筵に侍し、その將軍職に就くや、これを輔けて、内外の政務を刷新す。家継の代にも同様、栄進して従五位下筑後守に叙せらる。吉宗の立つに及びて致仕。学者としての業績も多大にして、藩翰譜、折焚柴の記、讀史讀論、古史通、西洋紀聞などをはじめ著書多し。

新井白蛾 78才
（元禄一―寛政一〇・五・一二）
1715 1792

祐登、謙吉。加賀藩の儒者。中年後は好みて和歌を詠じ傍ら本邦の典故を修む。

新井石禪
―昭

荒木田久老 59才
（延享三―文化元・八・一二）
1746 1804

伊勢外宮の祠官、のちに内宮権弥宜。縣居門の國学者にして五十槻園と号す。性豪邁超越、律令祝詞などに精しく最も万葉集に明かなり。本居宣長と異説同工の聞えありといふ。萬葉考槻落葉、日本紀歌解などの著あり。久老の長子にして國学者。倭姫命世紀古史傳、萬葉集同字部類、雅言集覽、その他の著あり。

荒木田久守 71才
（寛延一―寛政五）
1748 1793

為実、号琵琶。水戸藩の國学者。朴翁の長子にして為章の兄。父の後を承け伏見宮に仕へて右兵衛尉に任ぜらる。本邦の典故に通じ、貞享三年、弟為章（年山）と共に義公に事へて彰考館史局に参与し、義公の禮儀類典を撰するや擢でられて總裁となる。稿成りて光圀之を奉献、太上皇より題号を賜ふ。全五百十四卷

安藤素軒 64才
（永禄三―寛保二）
1559 1717

天野九郎右衛門　幕末長州の人

青木甚左衛門　範重　水戸の人

縣　元吉　?60　明治十三・十二

信濃　弓六石　勤王家　宇都宮藩の老臣　大橋訥庵に学びて尊攘の説を主張
藩に仕て家老たり　安政大獄以後　山陵修営に轉ず　元治元年　水戸田丸　藤田の徒
挙兵の時　幹旋の嫌疑を以て　幕命により　国に禁錮　慶応に未赦されて　再び藩政に
参與　維新後　司法省に出仕　辞して後　郷里に学塾を開く

有島武郎　46才
（明治十二・四・一　歿十二・六・　）

明石大助

イ 井

猪飼敬所 85才
（寛政十年―弘化二 1791―1845）

彦博、安次郎、京師の人にして考証学者。岩垣龍渓に学ぶ。京・摂・伊勢に轉住し、教化、月旦に功あり。公卿・士人、多くその門に就く。
操觚正名の著あり。

五十嵐文吉 77才
（文化二―明治一〇・一〇・八 1805―1881）

敬之。高知藩士にして勤王家。少より文武を修め、時勢に通ず。
文久二年六月、藩主山内豊範に随ひ上京、他藩応接役の職をつとめ、各藩の間に国事を処理す。尊攘の説を唱へて元治元年罪を得、これより謫晦、吏職に復し、同志の善後処理につくすといふ。

池内陶所

奉時、士辰、京師の人。山陽門下の儒者。

池尻茂四郎 25才
（天保十一―元治元・七 1840―1864）

伯懋。久留米藩士にして勤王家。十五才にして藩校素讀師、萬延元年廿一才にして藩命により江戸遊学、安井息軒の門に入りて、時勢を察し病に托して年途帰郷。文久二年京摂間の動静探索に従事、薩・長・土三藩

池田慶徳 41才
（天保八―明治一〇・八・三 1837―1877）

戮力の密勅を受く。爾後赤間関外艦打掃ひに加はるなど奔走。
元治元年七月、長藩の壮士、京都に事を起すに及び（蛤御門の変）、眞木和泉守等と共に鷹司邸にありしが、最後に会藩の兵の襲ふ所となり、奮戦の揚句、天王山の本営に至り、同志十七人と共に屠腹して死す。時に廿五才。
徳川斉昭の第五子として江戸藩邸に生れ、年十四にして養命により鳥取藩主の後を襲ぎ、池田氏をつぐ。治績頗る擧る。文久慶応の際、公武の間に周旋、天皇これを嘉せらる。戊辰の役、朝命を奉じ東山道の先鋒として功あり。二年藩知事に任じ、従二位権中納言に進む。廢藩後、京・東に移り、華族会館創立に盡力し、その副会長たり。十年西南役起るや、鳥取に至り旧臣を誡諭し、募兵をすゝむ。帰途、急病、京都の客舎に薨ず。池田仲博侯爵の祖父

池田謙斎 78才
（天保十二―大正七・五）

越後長岡の人。初め緒方洪庵に学び、幕医池田秀眞の養子（本姓入沢）となり、のち養命を以て長崎に医術を専攻し、更にドイツに留学。帰朝後陸軍々医、東大医学部教授、侍医局長等に歴任、廿一年医学博士、廿二年男爵となる。廿五年宮中顧問官に任ず。特に外科手術に長ず。

池田禎藏 66才
（文化一〇―明治一一・九・二六）
1813　1878

絅、子敬、但馬の農家に生れ幼時村僧たり、弱冠京都に奔り、相馬九方に従学し、朱学を専攻して春日潜庵、吉村秋陽、山田方谷等と学友たり、天保十一年以後京都にて教授、弘化四年郷里に清流人書院を起し自英に任ず、一郷を化し但馬聖人と稱せらるゝに至る、

池原香穑
―明治一七・七・一〇

名大所日南、はじめ長崎の眼科医、漢籍を仁科白谷に、国典を上田及淵に受け、つひに宮内省文学御用掛となる、

石井潭香 65才
（文化二―明治三・五・六）
1806　1870

徽言、士勵、江戸の書家、はじめ市河米菴に学び、のち崎陽に遊び清人江芸閣に学ぶ、松前藩に仕へ藩侯の傅たり、明治二年徴命を蒙り太政官の大録となる、

石川依平 69才
（寛政三―安政六・九・四）
1791　1859

爲藏、惣太夫、号柳園又檀が本、遠江の国学者、六才にして歌を詠み奇童のほまれあり掛川侯の城に召さる、九才、冷泉殿へ入門、十七才より古学に入り栗田土満翁の門人となり、また伴信友、近藤芳樹加納諸平の諸子と屢〻文書を往復して研究、門人三百余人、姓氏録同祖部類、萬葉集三山歌考、柳園集などの著あり、

石川竹厓 51才
（寛政五―天保四・九）
1793　1843

貞一郎、之褧、村瀬栲亭に学び津藩の儒たり、論語説約、廣益名物六帖などの著あり、

石河正養 71才
（文政一―明治二〇・二・一七）
1781　1851

金左衛門、號多頭の舍、審斎、石見の人、大国隆正に学びし国学者、産土神、大阪私釈などの著あり、のち東京に住む、

石島筑波 51才
（宝永元―宝暦一〇・八・一七）
1704　1754

正猗、仲綠、号穎川、三河の人、代〻浜松侯に仕へ父の後を襲ひしも中途にして辞し、京、摂、名古屋に遊び筑波山下に隠居、のちまた江戸に出て服部南郭に学ぶ、儒者として殊に詩才を以て名あり、茗荷園文集、白石孝女伝などの著あり、

石塚竜麿
文政六・五月

安右衛門、遠州の人にして宣長門の國学者、古言清濁考、かなづかひ奥の山道、鈴屋大人都日記などの著あり、

井田讓 52才
（天保九・九月―明治廿二・廿六）
1838　1889

旧大垣藩士、明治五年上海総領事を振出しに十四年以後オーストリア、スペイン、ポルトガルの公使に歴任、陸軍中將、元老院議官を経、廿三年十一月男爵を授けらる、

伊丹重賢 71才
（天保元・一〇―明治三三・七）
1830 1900

世に粟田青蓮院宮に仕ふ。安政戊午の変に連坐して蟄謹を蒙り、明治後大阪府知事、元老院議官等に任ず。廿九年功を以て男爵を授けらる。

市川寛斎 72才
（寛延二―文政三）
1749 1820

小左衛門。上野の人。少にして江戸に出で林鳳潭の門に入る。のち昌平黌の学員長に補せられ、居ること五年、病を以て辞し去る。寛政三年富山侯に招かれ、その黌舎の教授たること廿余年。上毛志、日本詩記、寛斎摘草などの著あり。兼ねて書を能くす。

市川米菴 80才
（安永七―安政四・七・一八）
1778 1857

寛斎の長子。江戸の書家。特に楷書隷書に巧みにして、曾て加州侯に客事せしことあり。米家書譜、米菴墨談などの著あり。

七代目市川團十郎 70才
（寛政二―安政六・三・二三）
1790 1859

壽海老人、白猿と稱す。江戸の歌舞伎名優。

伊地知貞馨
―明治二〇・一〇・二五

壯之丞、号恒庵。維新の際堀小太郎と変名して国事に奔走、鹿児島藩少参事となり、のち修史館に出仕。国学の造詣深し。

伊地知正治
―明治一九・五・二三

明治元年二月東山道先鋒總督参謀となり、東北平定に功あり。十年修史館總裁、十二年一〇月宮内省御用掛となる。十七年七月、勲功によって伯爵を授けられ、十九年宮中顧問官となる。

一茶 65才
（宝暦二―文政一〇・一一・一五）
1763 1827

小林彌太郎。号俳諧寺。信濃の俳人。はじめ素丸に、のち隨斎成美に従って俳諧を学ぶ。江戸に遊ぶこと十年余、下谷阪本に住す。文化十一年帰国す。句集におらが春あり。

伊藤圭介 99才
（享和二―明治三四・一二・一一）
1803 1901

号錦窠。博物学者。はじめ父（名古屋の医西山玄道）に従って儒学及医学を講習し、傍ら水谷助六に植物学を学ぶ。その後京都及び江戸に学ぶ。更にシーボルトに就く。のち名古屋に帰り蘭法医開業。天保八年の出作に当り救荒食物便覧を著はし、また種痘法を施す。嘉永年間海防論行はるゝや遠西硝石考を譯し、また三百目加農砲を鋳て藩に献ず。明治三年以後朝廷に召され、東京理科大学員外教授、学士会院会員となり、理学博士・男爵を授けらる。植物学上の功績は世界的にして、ケイスケの学名を冠する植物名尠からず。

伊藤仁斎 79才
（寛永七―宝永三・一二 1627 1705）

源佐、維楨、号 古義堂、棠隠、櫻陰、 泉州の貢家に生れ、のち京都に住す。 汎く性理の学に渉り、心学原論・大極論・性善論ふどを著はし、また当時の儒学のきらう宋学により孔孟の旨に乖くを慨し、論孟古義、中庸発揮ふどを著述して、孔孟の古義を闡明す。京都堀河に塾を開き内下数千人、江戸時代中期以後の古学勃興の機運を儒学界に於て代表せる学者。

伊藤東涯 67才
（寛文一〇―元文元・七月 1670 1736）

源蔵、仁斎の長子、堀河東涯に住するを以て通号とす。経術に精しく、よく家学を紹述し、先代の遺書を校訂して出版す。紀伊侯の礼聘あれども就かず超然卓立す。

伊藤蘭嵎 86才
（元禄八―宝永七・三・二八 1695 1718）

才蔵、仁斎の第五子、東涯の異母弟、博学能文、父兄に類し、主に家学にあり、経典解義をつとめ、文教の扶植に尽し、紀州侯に仕へて君前に書を講ず。また画を能くす。著書に書反正、周易本旨ふどあり。東涯と共に首尾蔵と稱せらる。

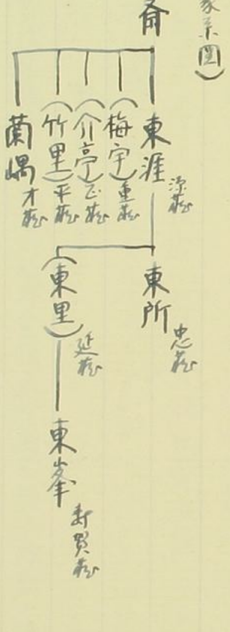
伊藤東所 75才
（宝暦二年―文化元・七・二九 1730 1804）

忠蔵、東涯の子、京都に住し、先代の遺著の校訂につとめ、堀河学を維持擴張す。古義釣翼、中庸発揮釣ふどの著あり。

伊藤東峯 47才
（寛政十一―弘化二・八 1799 1845）

寿賀蔵、東里（東涯第五、東所養子）の子、父の業をつぎ京師の儒者たり。

（伊藤家系図）



伊藤坦庵 86才
（元和九―宝永五・二・一〇 1623 1708）

宗恕、元務、京師の人、はじめ医を業とし江村専斎・曲直瀬玄理に学び、また儒を那和活而に受く。寛文中業を改めて儒とふり、専ら程朱の学を唱ふ。越前松平光通侯の儒官たり。老後、伊藤仁斎と親交あり。坦庵遺稿、老人雑話ふどの著あり。

伊藤博文 69才
（天保十三・九・二―明治四二・一〇・二六）
1841 1909

俊輔 号春畝 また滄浪閣主人。長州の人。十六才藩命を以て毛利家保管地の警衛卒となり、萩原良蔵に識られ松塾に学ぶ。つゞで萩原に従ひ長崎に洋式兵法を学び、東上して木戸孝允に従ひ国事に奔走。文久中、井上・山尾等と藩の内命により密に渡欧、ロンドンに留学一年。馬関外艦砲撃の報をきき、井上と共に急遽帰朝、講和の衝に当る。明治元年参与、三年十月米国に差遣、四年九月岩倉大使の副使として欧米に赴く。六年九月帰朝、参議兼工部卿に任ず。七年地方官会議の長。十一年大久保の遭難後内務卿。十五年憲法制度調査のため渡欧。十六年八月帰朝、制度取調局長兼宮内卿。翌年伯爵。十八年内閣制最初の総理大臣。廿年四月枢密院議長となり、憲法起草に任ず。廿五年八月再び首相。日清役後侯爵大勲位。廿一年一月三たび首相。廿二年政友会總裁。廿三年九月四たび組閣。廿八年十月韓国統監。廿九年九月公爵。四十二年十月枢密院議長たる時、満州巡遊の途に上り、ハルビンにて一韓人の狙撃をうけて絶命。国葬を以て遇せらる。

歌人。はじめ郷戸久敬の門下。また前田夏陰に従ひ、つゞで加藤千浪に就き、井上文雄などの歌人と交り、一家を成して名あり。つひに宮内省に召され御歌所勤務の首班となる。柳の一葉の著あり。

伊藤益道 68才
（宝永六―寛永五）
1709 1776

善蔵 号華岡。伊勢の人。細井廣澤に学ぶ。

伊能友鴎 59才
（文化四―明治八・四・三〇）
1807 1875

永寛。宇和島の勤王家。安政中外艦の下田に入るや藩主宗城の命により往いて実況をみる。つゞで安政大獄に坐して下獄せしことあり。藩主致仕に至り追放に処せらる。文久二年以後再び藩政に参与。本姓中井氏ふりしを、藩主の命により伊能（伊達家の能臣）と改む。少時、宇和島に匿れし高野長英を庇護せしことありと、いふ。

伊能忠敬 77才
（延享二―文政四・九・四）
1745 1821

三郎右衛門。勘解由。号東海。下總佐原の人。学を好み理財の道に長じ、村吏となりて治績をあぐ。星暦の学にたし。江戸に出で高橋東岡に師事、専心泰西の暦法及測量術を研究す。寛政十二年幕命により沿海諸国の測量に従事、文化末迄凡十八年間全国を跋渉、推歩測量により沿海路程図を完成し、晩年宇内輿地図を大成す。その他有用の地図数種を作り、本邦測量製図家の祖として功績多大。

伊能穎則 73才
（文化二―明治一〇・七・一一）
1805 1877

三左衛門。国学者。下總佐原の人。小山田與清・井上文雄に学び、のち平田門に古学を修む。嘉永年間家業の呉服屋を廃して江戸に出で、本所深川にて古学・和歌を教ふ。明治元年神祇官に出仕、二年八月大学大助教に進み、のち帰郷、香取神宮に奉仕す。著に神道新論・百人一首新釈などあり。門下より小中村（清矩）・木村（正辞）・横山（由清）等出づ。

井上馨 81才
（天保六―大正四・九・四）
1835 1915

聞多。長州の人。藩公の侍臣として国事に奔走。文久中伊藤・井上勝等と藩の内命により渡英、一年にして帰る。幕府の征長軍を大村益次郎と協力して破り、維新の際参与にあげらる。四年大蔵大輔、六年辞して元老院議官。十一年参議兼工務卿。十三年外務卿。十七年伯爵。朝鮮事変に全権大使として京城に赴く。十八年伊藤内閣の外相。欧化主義を振翼して国論沸騰を招き、廿年辞す。廿年農商務大臣。廿五年伊藤内閣の内相。伊藤の療病中首相臨時代理を命ぜらる。のち宮内大臣に歴任。廿一年致仕。元老の待遇を賜ひ、廿九年侯爵に陞る。

井上毅（コワシ） 52才
（弘化元―明治二八・三・一三）
1844 1895

熊本の人。明治の功臣。明治初年司法省に奉職。卿江藤新平に従って渡欧す。のち諸官を歴て法制局長官に任じ法律の起草及び審査に功多し。臨時帝国議会事務局総裁より枢密顧問官、文部大臣にすゝむ。廿七年八月病を以て辞職。廿八年子爵を授けらる。教育勅語をはじめ勅令・憲章の草按はその手稿にかゝるもの多し。

井上勝（カツ） 68才
（天保一―明治四三・八・二）
1843 1910

山口藩人。維新前伊藤・井上等と共に藩を脱してロンドンに航し、鉱山学を研究。帰朝後国事に奔走。明治三年造幣頭兼鉱山頭。四年鉄道頭を兼ねて京浜間鉄道敷設を司る。十八年鉄道局長官。廿年子爵。廿三年以後貴族院議員。廿九年大阪に汽車製造会社を設置し社長たり。四十三年鉄道院顧問として欧米鉄道視察に出発。ロンドンに客死。

井上文雄 76才
（寛政八―明治四・二・八）
1796 1871

元眞。号柳堂。また敦堂。田安家侍医にして歌人。はじめ岸本由豆流に従って和歌を学び、のち一柳千古を呼とし頗る国典に通じ、また漢文に長ず。景樹以後の名人と稱せらる。維新の際の諷詠により罪を得ることもあり。著に大和物語新註、古今集序考、橘英集、歌堂随筆ほどあり。

井上四明 90才
（享保五―文政二・一・二）
1730 1819

潛。仲龍。号佩弦園。越後の人。江戸に出て井上蘭台に学び講説を業とし文章を能くす。蘭台の嗣子となり（本姓戸口氏）継ぎて岡山侯の儒官たり。享和二年世子の侍讀となり、文化十一年致仕。論語・孝経・鈔解、大東食貨志ほどの著あり。

井上金峨 53才
（享保七―天明四・六・二八）
1732 ― 1784

文平。江戸の人。井上蘭台に従って物氏の学を究め、のち折衷学を唱道す。中年大場景則に天文を学びしことあり。晩年に及んで駒込に塾を開いて儒学教授。のち東叡山記室たり。辨徴録、讀学則、周易彙義ほどの著あり。門下に篠本竹堂・菊池南陽・亀田鵬斎等

井上頼圀 76才
（天保一〜大正三・七・四）
1839 1914

平田門下の国学者。明治十年御系図取調掛となり、終生を御系譜編纂に捧ぐ。神習舎と号し、著に羅摩舟、鞈軒雑記（矢野玄道共著）などあり。

井上通泰
（慶応三・十二・二〜）

猪熊夏樹 78才
（天保六〜大正元・八・二）
1835 1912

國学者。讃州大川郡白鳥神社神官の子。明治十八年以後京都帥範及び同才一高女に教諭たり。廿九年一月宮中御講に召され、七十二才の老躯を以て御前に古事記を講じ、爾後年々進講の栄を蒙り、また賀陽宮・久邇宮に伺候して進講す。四十五年七月明治天皇不豫をきき、恐懼措かず、宅中に奇壇を築き、七十八才の高齢に不拘、毎日五回の水垢離をとり、遂に肺炎を發し八月二日逝く。

稲垣白巌 83才
（元禄八〜寛政六・十一）
1695 1777

長章、稱明。越前大野侯の世臣。大夫として政事に参じ致仕後教学をこと〻す。太宰春台に学びて経義文章をうけ、春台の歿後その弟子多く白巌に従ふ。

稲田重蔵
（文化十一〜万延元・三・三）
1814 1860

正辰。常陸那珂郡の慷慨家。郡奉行金子孫次郎に登用され、従って櫻田の挙に及ぶ。奮戰身に十餘創を蒙り戰死。年四十七

大養毅 78才
（嘉永二〜昭和七・五・一五）
1855 1932

飯盛挺造

今村虎成

丹次、高知の人、文化頃の人、曾て京師に徳大寺軌法輪を師として和歌を学ぶ、晩年土佐にて医を業とす、虎成和歌集の著あり、

岩垣龍渓 68才
（寛保元―文化五・二・三）
1741 1808

彦明、長門介、京師の儒者、博士清原家に学んで古学に通じ、大舎人権助に任ぜらる、著に論語集解標記・十八史略補正ほゞあり、

岩倉具視 59才
（文政八―明治一六・七・二〇）
1883

堀川前中納言康親の第三子にして岩倉具慶の養子、安政四年廿三才侍従となる、朝幕の不和を憂へ、文久三年和宮降嫁の事に斡旋、のちために黙せられ、薙髪して友山、また対岳と号し、西芳寺また岩倉村山荘に退隠、此間有志の従横に幽居を訪ひ国事を議する者多し、機熟するに及び起ちて天下一新の策を密奏、慶応三年明治天皇即位大赦の令により入京を赦され、将軍慶喜のために大政奉還の策を議す、慶喜の辞職に当り復職の朝命に接す、明治元年東征副総裁たり、江戸遷都の策を定む、維新創始の諸政に参し大小の事干與せざるなし、四年十月右大臣となり、特命全権大使として欧米視察に出発、六年九月帰朝、欧米の文明制度を採用、また非征韓の先鋒となりて廟議を決し、内治を整へて憲政施設の基を築く、十年一月大勲位に叙せらる、十八年憲法制定により太政大臣を贈られ国葬を以て遇せらる、

岩倉具定 60才
（嘉永四―明治四三・四・一）
1851 1910

具視の第二子、明治元年正月東山道鎮撫総督を命ぜられ、以後諸官を経て貴族院議員、学習院長、廿三年二月枢密顧問官、四十二年六月宮内大臣となる、

岩崎鵬雨 62才
（文化元―慶応元・五・七）
1804 1865

雅、元熙、近江坂本の儒者、十五にして山陽の門に入り、また画を浦上春琴に学ぶ、海屋・小竹・竹田・星巌等と交友あり、泰西事情にも留意し、晩年憂国の詩を賦す、鵬雨詩稿、同文稿、湖亭譜ほゞの著あり、

岩崎弥太郎 52才
（天保五・一月―明治一八・二・六）
1834 1885

土佐の人、三菱の初代、少にして安積艮斎（江戸）の門に学び、のち吉田東洋の知遇を得て後藤象次郎・坂本龍馬と相交通す、慶応二年以後藩に仕へ勧業及会計に任じ、のち九十九商会を起して運漕業を開き、諸藩財政を回旋、明治四年大阪に新たに汽船運漕業三菱商会を創む、佐賀の乱、台湾の役に政府を扶ケ、帝国郵便汽船会社を併合して郵便汽船三菱会社と称す、西南役の戰地回漕に従ひ三菱の名天下に轟き、巨富を致すに至る、

岩倉久子

岩倉具視の夫人、

岩下方平 サヒラ 74才
（文政10・三月―明治三三・八・五）
1827 1900

佐次右衛門、鹿児島藩士、藩にありて生麦事件の談判に與り、慶応二年渡佛、三年参與に任じ、明治元年外国事務掛に兼補、以後諸官を経て十一年五月元老院議官に任ず、十四年神官教導職会議々長、廿年五月子爵、廿三年貴族院議員、扇香閣祗候とする。

岩瀬華沼 74才
（元文二―文化七・十月）
1737 1810

行言、江戸の人、河口静斎に学び、のち肥前島原松平侯の儒員となる。書を能くし草書に工ふり。

岩瀬忠震 44才
（文政元―文久元・七・二）
1818 1861

修理、肥後守、号鷗所、三河の人、幕府に仕へ、阿部正弘の知遇を受け海防の政務に鞅掌、講武所、蕃書調所の創設、海軍傳習所を長崎に置くなどみな施設に與る、安政三年七月、川路聖謨等と開港貿易に関する調査に従事、屢〻ハリスと折衝、老中を助けて條約締結の運びに至る、五年七月外国奉行に任ず、将軍継嗣に関し井伊直弼に退けられ罪を得て禁錮、蟄居中に病死す、傍ら画を椿々山に学びて能くす、号迂堂、古梅園、蹋霞仙吏、金粟道人、書道の大家、旧近江水口藩士、年十六、京都に至り医を三角東園に学び、帰藩後傍ら藩儒中村栗園

に学ぶ、慶応四年徴され、修史局、内閣などに仕ふ、元老院議官を経て錦鶏間祗候たり、明治廿四年貴族院議員に勅選。

巖谷修 72才
（天保五・二月―明治三八・七・二）
1834 1905

石川丈山 90才
（天正十一―寛文二・五・二三）
1583 1672

重之、嘉右衛門、参州の人、十六才にして家康に仕へ、元和元年大坂の役には先鋒麾下に功をたてしも軍令を犯す廉により黜けられ、爾後京師に閑居、藤原惺窩の門に遊び、のち芸州に仕へしことあり、最も詩に長じ詩仙堂（廿三才）、六々山人と号す、著に詩仙詩、朝鮮筆語集、匹繚覆醤集などあり。

市島春城

伊原青々園
（明治三・四・二四―）

敏郎、

伊東玄朴 72才
（寛政十二―明治四・正・二）
1800 1871

蘭医、湖、沖斎、肥前の人、佐賀、長崎に出で蘭語、蘭医方を学び、シーボルトに就き、文政九年以後江戸にて開業、蘭書教授、十二年鍋島侯の医官となり、安政五年七月奥医師に進み法印に叙し、長春院の号を賜ふ、のち西洋医学所取締たり、医薬療正始の著あり。

ウ

伊東巳代治 78才
（文久三―昭九・二・九）
1863 1934

上杉鷹山 72才
（宝暦元―文政五・三・十三）
1751 1822

高鍋藩主 秋月種美の次男にして、上杉重定の養嗣子たり、米沢藩主をつぐ。在職十九年政務に興ること三十八年。学を好み儒を聘して講読をきく。城下に興譲館を建て俊秀の士を誨ふ。内政に深く留意し、自ら率先して物産隆興につとめ、大いに治績をあげ、天明五年致仕、閑居す。

鵜飼吉左衛門 62
（寛政一〇―安政六・八・二七）
1798 1859

廣邦、水戸の勤王家。京都の留守居たり。幕政の姑息を憤り、同志と謀り、密に藩主斉昭の命を奉じて人を介して帝に奏し、攘夷決行の勅を下さん事を請ふ。安政五年八月八日、密勅を賜ふ。廣邦乃ち子幸吉をして之を奉じて藩主に侍しむ。斉昭大に喜び、幕府に攘夷即行を迫る。幕府駭き、詔書を奉還せしめ、且つ京師の勤王家を捕ふ。この際に當り幸吉と共に江戸に檻致せられ、六年八月廿七日、小塚原に斬らる。

宇佐美灌水（シン） 67才
（宝永七―宝永五）
1710 1776

恵、子通。上総の人。十七にして江戸に来り物徂徠に就く。三年にしてその歿にあひしもなほ留まりその学に通ず。その間西遊して名山古寺に遺書を索む。板倉美仲と携へて一旦帰郷せしも、のち再び江戸に出で門を開きて教授。徂徠の学を弘布し、また経済に意を注ぐ。晩年出雲侯に仕へて政事に與る。辨道考、辨名考、絶句解考証などの著あり。

宇田川玄隨 43才
（宝暦五―寛政九・三・一八）
1755 1797

晋、明卿、号槐園、津山藩松平侯の侍医、桂川甫周の門に入り和蘭医書を耽読、年二十父玄叔に代り医員に列し、兼て治術を衆に施す、漢学にも亦精通、藩主康哉に近侍し、世子に進講す、著に内科選要あり、

宇田川玄真 66才
（明和八―天保五・二・一〇）
1769 1834

璠、号榛斎、伊勢の人、はじめ漢医術を考究、江戸に出で宮川玄隨の洋医究理の説に感動し、つひに入門、研鑽数年傍ら大槻玄澤・桂甫周等に親炙して業大いに進む、玄隨の歿後、その嗣となり津山藩医に挙げらる、のち致仕して江戸に開業、文化十年四月幕府の司天台譯員に補せられ、爾来十七年間蘭書飜訳に従ふ、将軍精勤を賞し謁を賜ひ式日登城を命ず、藩主松平侯また爵を進めて優待す、医範提綱、和蘭薬鏡、名物考などの著あり、

宇田川榕庵 49才
（寛政一〇―弘化三・六・二二）
1798 1847

榕、江戸の人、本姓江沢氏、大垣藩医官の子、幕府医官宇田川榛斎の養子となる、蘭学を馬場穀里に修め、文化九年幕命を以て蘭書飜譯に従ふ、天保三年養父の職をつぐ、晋多尼詩経、舎密開宗、植学啓源などの著あり、

鳥亭焉馬 71才
（寛延三―文政五・六・二）
1750 1822

江戸の戯作者、立川焉馬、また淡洲楼と号す、（五世田十郎の号を伸ばしたる）文化八年芝居年代記十二冊を著はす、狂歌をよくす、

宇野士新 48才
（元禄十一・五・二〇―延享三・ニ・一〇）
1698 1745

鼎、三平、号明霞、京師の儒者、家業（運漕）を肩しとせず、章句学をうけて講ぜしも、のち師承する所ふく弟士朗と切磋、はじめ徂徠の終身諸侯の聘に応ぜず、のちには事毎にこれを反撃して一家の説を樹つ、著に論語考、左伝考、姓氏解、明霞遺稿などあり、

生方鼎斎 58才
（寛政二―安政三・ニ・七）
1799 1856

寛、猛斎、上州沼田在の儒者、書画及び詩に長ず、安政三年二月七日、水戸の剣客金子武四郎と酒席に争ひ、その門人に刺さる、年五十八

海野幸典（ユキノリ） 60才
（寛政元―嘉永元・十一・十二）
1789 1848

滋野源兵衛といふ、幕府の士人にして国学者、若年より歌を好み前波黙軒（芦庵の門人）に入門、上代風作歌の傍ら文法を究め、また鈴屋翁の学風を慕ふ、のち遁世し游翁と改称、号を柳園といひ門弟多し、天言活用図、五十音口訣、柳園家集などの著あり、

梅田雲濱 45才
（文化十二―安政六・九・一四）
1815 1859

定明、源三郎、十濱藩士、江戸に往き藩儒山口菅山に学ぶ、のち大津に寓し、湖南塾を開いて教授、京都に移り尊攘の大義を唱へて東西に奔走、安政元年九月露艦の横浜に入るや郷民に推されて謀主となり掃攘のことを計る、つゞいて長門萩に入り有志と往来、更に青蓮院宮及び有志公卿に勧説して、水戸への勅書降下を斡旋す、安政五年九月大獄に坐して捕へられ、江戸に送られ小笠原侯邸に幽囚、翌年囚中に病歿、

浦上春琴 68才
（宝永八―弘化五・二）
1779 1848

備前の人、画家、はじめ父玉堂に従って江戸に出で、のち文化八年以後京都に住む、頼山陽と親交あり、別号睡庵、

雲照 83才
（文政一〇・二・一〇―明治四三・四・一三）
1827 1909

俗姓浜辺氏、出雲の人、仁和寺の沖三十三世、はじめ維新の廃仏毀釈に際しては東奔西走し、のち三十年頃神儒仏三道一貫の徳教主義を唱導して地方を巡化す、日露役には満韓地方巡錫、四十年には山陰・山陽・九州に、四十一年には東北・北海道を巡化す、卅三年暮以後仁和寺門跡たり、末法開蒙記、密宗安心義章、大日本国教論、教育の本義、などの著述あり、

梅辻春樵 82才
（寛永五―安政四・二・七）
1776 1857

希聲、無絃、琴氏と称す、京師の詩人、安政三四年の頃三条実萬の手を通じ詩を天覧に供し叡賞を蒙りしことあり、春樵詩草初編及び家稿十編の著あり、

澤田一薫 65才
（寛政七―安政六・二・二四）
1795 1859

可爲、豊臣内蔵允と称す、京師の人、土佐派の画人、幕末時勢を憂へ物狂に神風夷艦を覆すの図などをつくる、朝廷に時勢策一篇を上りしことあり、安政五年九月幕吏のために投獄され、翌年赦されしも病を得て没す、

エ エ

江木鰐水 72才
（天保一―明治二〇・一〇・八）
1810 1881

戩、繁太郎、安藝の人、本姓福原氏、水野侯の医員江木氏を嗣ぐ、長じて医術を喜ばず京阪に遊び、篠崎小竹・頼山陽に従ひ専ら儒学を修む、山陽の歿後江戸に至り古賀侗庵に入門、傍ら清水赤城に就き長沼流兵法を学ぶ、天保十年福山藩の儒員となる、嘉永年中米使の互市を請ふや幕府の元老となりし藩主阿部侯の顧問として攘夷を非とし、また譯書によって西洋兵法を講じ、遂に建白して兵制を革め、子弟を勧め洋学を学ばしむ、

江木千之

江澤講修（トキナガ）

上總の豪家。本間游清に學び和歌を能くす。

江藤新平 40才
（天保六―明治七・四・一三）
1835 1874

胤雄。南白（また白南）。文久二年脱藩。京都に入り志士の群に投じ國事を議す。罪により永蟄居。慶応三年赦され、明治元年藩命により上京。10月朝命を奉じ江戸に至り民事財政を処理。奥羽平定後権大参事として藩政改革。四年文部大輔。左院副議長、つゞで司法卿に進む。六年四月参議に任ず。征韓の議容れられず辞職。七年一月民選議院設立の上表を行はれず遂に佐賀に帰る。征韓党に擁せられて挙兵。敗衄後就縛。土佐より佐賀に護送の後、四月十三日斬罪梟首さる。年四十。

榎本武揚 73才
（天保一―明治四一・一〇・二六）
1836 1908

釜次郎。号梁川。幕府勘定役の子。幼時昌平黌に學び才名あり。嘉永六年長崎に遊学。蘭人に就き蒸汽機関学・航海学を学び、のち和蘭留学を命ぜられ留まること六年。丁巳戦争の実況を視察して慶応二年帰朝。軍艦乗組頭取より海軍奉行となる。同三年函館五稜郭に據り官兵に抗す。黒田清隆の勧めにより降を請ひ、囹圄に在ること数年。のち赦されて海軍中将となり、海軍卿・逓相・農商相・文相・外相に歴任。辞任後枢府に入る。

江馬蘭斎 92才
（享和二―天保九）
1747 1838

美濃の人。大垣藩医にして頼山陽と親交あり。（春齢、字元恭）天明年間江戸に出で前野良沢に学び蘭方医として名を成す。五液診法、泰西熱病集譯、水腫全書、ふどの著あり。

江馬細香 75才
（天明七―文久元・九）
1787 1861

蘭斎の女。閨秀画家にして詩書を能くす。頼山陽の求婚を拒みしことあり。のち山陽の大家たるに及びこれを愧ぢて終身嫁せずといふ。

江馬天江 77才
（文政八―明治三四・三・八）
1825 1901

聖欽。永卿。江州の人。はじめ父兄の命にて医を学ぶ。廿才江馬榴園（本姓下坂氏）の養子となり仁和寺に侍医たり。大坂に赴き緒方洪庵に洋書を学ぶ。梁川星巌に詩を学ぶ。詩人として顕はる。明治元年史官に任ぜられ、のち罷めて儒学教授をなす。綬、傳左衛門。京師の詩人。

江村北海 76才
（享保三―天明八・二・二）
1713 1788

著述蟲譜、北海詩抄、北海文抄、ふどの著あり。

永儀 82才
（文政六―明治三七・一・一〇）
1823 1904

俳人。其角堂。江戸の人。画を景川に、茶を宗運に、書を其角に学ぶ。著に みぶ草、画入八百題、俳諧独歩、ふどあり。

オヲ

小石元瑞 66才

（天明四―嘉永二・二）
1784　1849

龍、櫻園、蘭斎、京師の蘭法醫、少にして篠崎三島・皆川淇園に経書を学び、十六、父（元俊）に従ひ江戸に赴き、大槻玄澤に入門、旁ら杉田・宇田川諸家に往来して蘭医方を学ぶ、学成り西帰の後名望頗る高し、餘暇に詩文書を能くし、四方の名流と交遊（その義妹は山陽の妻となる）、弘化二年柳川侯の難病を治して更に名を挙ぐ、著に東西医説析義、博采録、梅毒秘説、藥性摘要、櫻園隨筆及詩文集などあり。

岡千仞 82才

（天保四―大正二・二・一八）
1833　1914

敬助、号鹿門、漢学者、仙台藩の世臣、若くして昌平黌に学び舍長となり、重野成斎、南摩羽峰等と親交あり、のち雙松岡塾を大阪に開き子弟に教授、戊辰の乱、奥羽諸藩に動向を知らしめんとし奔走、下獄、維新後修史局・東京府に仕へ、のち辞して著述・漫遊を事とす、尊攘紀事、観光紀遊などの著あり。

岡田鴨里 75才

（文化三―明治一三）
1806　1880

倫、淡路の人、頼山陽に学び徳島藩儒たり。

岡田新川 63才

（元文二―寛政十一・三・二四）
1737　1799

宜生、挺之、彦左衛門、尾州の儒者、業を松平君山に受け、赤松滄洲と名を斉くす、天明年中明倫堂成るや擢でられて教授となり、ついで継述館の總裁に轉ず、秉穂録、彼我合符、新川集、暢園詩文草など著多し。

岡松甕谷（オウコク） 76才
（文政三―明治二八・二・一八） 1820 1895

辰、君益、豊後高田の人、儒者、帆足鵬卿に学び、維新後大学少博士に補せらる、一時熊本にて教授せしも、また東上して昌平黌教授、更に大学教授たり、のち辞して修史書院を開いて門弟に教ふ、学士会員に列す、

岡本花亭 83才
（明和五―嘉永三・八・二七） 1768 1850

成、忠次郎、勘定奉行、近江守に任ず、詩を能くす、

岡本哲蔵

花亭の息、

岡本保足
―文政

書家、上賀茂の祠官、

岡本柳之助 61才
（嘉永五―明治四五・五・一四） 1852 1912

軍人、明治十年竹橋暴動事件の首謀者、終身就官を禁ぜられしも廿二年禁を解かる、朝鮮問題に関心を抱き、廿八年王妃殺害事件に連坐して下獄、四十四年清国革命起るや南清に渡り、翌年上海の客舎に歿す、

小笠原図書頭 70才
（文政五・五・十一―明治二四・二・二五） 1822 1891

長行（ながゆき）、明山、肥前唐津城主、長昌の長子、江戸に出で朝川善庵、江川英竜に学び、図書頭を歴て老中たり、幕末外交問題の折衝に尽瘁す、現子爵長生の父、

緒方洪庵 54才
（文化七―文久三・六・一〇） 1810 1863

章、公裁、備中足守藩士、十五才にして父に従ひ大坂の藩邸に至り、西洋医術を中天遊に学ぶ、天保二年廿二才、東遊して坪井信道の門に入り苦学、のち宇田川玄真に学び、また長崎の蘭人に学ぶこと三年、廿九才大坂に開業、患者・門弟多し、やがて藩の侍医となり、文久二年幕府に徴され侍医となる、病学通論、扶氏経験遺訓、虎狼痢治準の著あり、門下中に佐野常民、福沢諭吉等あり、

小川笙船 65才
（寛文一―文政三・二・二七） 1656 1820

勇、布淑、小澤蘆庵の高弟たりし歌人、

萩生徂徠 63才
（寛文八―享保十三・二・五） 1666 1728

物茂卿、物茂右衛門、蘐園、幕府医官の子、はじめ芝浦にて子弟に儒学教授、のち柳沢侯の儒官となり、侯の将軍綱吉に用ひらるゝや、これを輔けて屢〻将軍の諮問に応ず、先王の道を尊び、また経済に精通、蘐園随筆、政談、太平策、三辨論語徴、大学解、など著書多し、

荻生櫻水　鳳鳴（徂徠の甥にして養子たる金谷の子）の養子。悠右衛門、維則。江戸の人。

奥保鞏　元帥、陸軍大将

奥田義人 58才（萬延元―大正六・八・二） 1860 1917　因州の人。明治中期以後、農商務省に厂任、大正二年山本内閣の文相。法相となる。のち東京市長。男爵、法学博士を授けられ、宮中顧問官、貴族院議員たり。

奥野小山 59才（寛政二―寛政五・八・三） 1858 1800　（彌太郎）純、温夫。大坂の儒者。篠崎小竹に学ぶ。

尾崎紅葉 37才（慶応二・十二・六―明治三六・一〇・三〇）　江戸に生る。明治廿年大学国文科に入り二年にして中途退学。夙に創作に志し、十年三月山田美妙、石橋思案等と共に硯友社を起し、我楽多文庫と称する写本の文学雑誌を出す。廿二年色懺悔を発表、幸田露伴と並称さる。廿年より讀賣新聞に金色夜叉を連載、廿五年七月二六新聞の聘に応じ入社。傍ら俳句を能くし、根岸派に対抗して秋聲会を起す。

小澤武雄 83才（弘化元―大正五・一・二九） 1844 1926　はじめ小倉藩士。文久三年江戸詰となり、明治戊辰の役小倉藩の東北出兵に軍務官として画策。七年佐賀の乱を鎮定。西南役征討軍団の参謀として転戦、士官学校長となり、十二年陸軍中将。十九年参謀長、廿年男爵を授けらる。廿二年砲台建築法取調のため欧洲に差遣。帰朝後貴族院議員、錦鶏間祗候となる。また日本赤十字社創立者の一人にして副社長たり。

小澤蘆庵 79才（享保一〇―享和三・七・十二）　歌人。尾張の人。冬泉為村に学びしも故ありて破門。京都にて某公に仕へ、三十五にして致仕。国学を教授す。技巧を用ひざる「たゞこと歌」の主張をなし、歌道中興をなす。袖中和歌六帖、振分髪、萬首分類、蘆庵集等の著あり。

小栗上野介 忠順 はじめ豊後守と稱す。幕臣。安政六年目付となり外国奉行新見正興・村垣範正と共に米國に航し本條約を交換。帰朝後外国奉行となり、文久二年勘定奉行・陸・海軍奉行を兼ぬ。慶喜の大坂より敗帰するや南戦論を主張して免職。明治元年上州島崎に帰り練兵一隊を養って自ら守り官軍の將に戮せらる。 横須賀造船廠の開設者。

（天明五―明治元 1785―1868）

落合雙石 84才

廣敬助。日向飫肥藩の士にして、僧海州及び長崎の吉村正隆に学び、更に文化四年東遊、昌平黌に入る。文政中帰藩して侍讀となり、のち上士となる。大坂に赴き居ること十一年、慶応二年また帰国して教職に復す。著に鴻爪集、論語続、左伝続などあり。

（文久元―明治三六・一・一八 1861―1903）

落合直文 43才

仙台の人。十四才にして國学者落合直亮の養子となり、伊勢神宮教院に学び、明治十四年東京に出で内藤耻叟の門に入り漢学を学び、また二松学舎に学び、十五年創設の東京大学古典講習科に入る。のち一高・学院その他に国語・国文を教へ、傍ら新派和歌の基を築き、浅香社を開いて門弟に教ふ。日本大文典、ことばの泉など著書編著多し。

（寛政五―文政六・七・九 1793―1823）

乙二 69才

俳人。陸奥の人。巌間清雄と稱し白石亘町千住院の修験。父につぎ沖九岳の住職。俳諧を父、のちには白居に学ぶ。号松窓。

小野勝義

（享保四八―文化七・一・二六 1719―1810）

小野蘭山 82才

京師の人。小澤蘆庵門下の高弟。中年江戸に出で加藤千蔭と交遊し修学。のち京に帰りて説を唱ふ。職博。本草家。京師の人。十六才松岡恕庵に従って本草を学び、廿五才以後塾を開いて教授。寛政十一年七十一才幕府の召に応じて江戸に赴き本草を躋寿館に講じ、ついで医官となる。十二年春より文化三年夏まで甲信・駿・勢・紀の諸國に薬草採集。著に本草啓蒙、本草綱目辨誤、薬名考などあり。

（寛永二〇―享保二・二・四 1643―1703）

小野寺十内 61才

秀和。四十七士の一人。

小林歌城（ヲ） 85才
（安永七―文久二・二・八）
1778 1862

幕府旗下の士にして國学者。村田春海に学び語法を講究。詞八衢の重訂増補の一書を撰す。他に歌城集、桂園一枝遺評など の著あり。

小原是水 56才
（文化四―明治五・四・一五）
1817 1872

忠寛、仁兵衛、号鉄心。大垣藩の勤王家。幕末藩の内政に盡し維新後徴士の選に入り上京、参与となる。明治四年本保県权知事に任ぜられ未だ赴任せずして免ぜられ、大垣藩廳出仕となる。頗る経済に通じ、また斎藤拙堂に学んで詩文を能くし、秀ら画を作る。錬平訓語、大船撫要などの著あり。

大石良雄 45才
（万治二―元禄十五・二・四）
1659 1703

赤穂藩の家臣。四十七士の領袖。

大内青巒 74才
（弘化二・四月―大正七・二・二九）
1845 1918

仙台の人。号藹々露堂。はじめ藩にて大槻磐溪等に学び、維新後東京に出て仏教に志し、本願寺門跡明如光尊法主の左右に侍して学事を監督、爾来十余年間、学校創立その他社会事業に盡す。馬場辰猪、矢野文雄等と共に同衆の運動に従ひ、のち訓盲唖院（のちの東京盲唖学校）を設け院長となる。また印刷所秀英社を起し、印刷物、講演会などにより布教に努む。

大江廣海 66才
（明和六―天保五・六・三）
1769 1834

明治三年曹洞宗大学講師、大で三年東洋大学長。著に冠注唯識二十論述記、冠注倶舎論領録などあり。

通称、勘負。村田春海門下の國学者。越後に生れ、江戸、京都に住む。

大木喬任（タカタフ） 69才
（天保二―明治三十・六・二八）
1831 1899

民平。旧佐賀藩士。明治元年四月徴士として朝廷に召され参與職外國事務局判事となり、のち東京府知事を兼ね、民部卿、文部卿、教部卿を経て六年三月参議となる。十月司法卿を兼ね法典編纂に盡力。十年再び文部卿。十七年伯爵を授けらる。十八年元老院議長。廿一年枢密顧問官に任ぜられ、のち法相、文相、枢府議長たり。

大久保忠真（実）
―天保八・三

小田原藩主忠顕の子。文化年間京都所司代たり。文政元年八月老中に補し、天保五年閣老の首班となる。賢能を薦め倉俸を減ず。米價調節を図り、天保通宝を鋳造するなど、社会事業に功労頗る多し。

大久保要 62才
（寛政一〇―寛政九・一二・一三）
1798 1859

常陸土浦藩士。勤王家。号靖斎。西洋火術を研究し、会沢・藤田（東湖）等と交はり、間部閣老要撃に坐して禁錮せられ病歿。號子花宇津穂。懐刀記、土屋氏系譜などの著あり。

大久保一翁 72才
（文化四・一二・二九―明治二・一・七）
1817 1888

忠寛、三市郎、のち志摩守、また右近将監と稱す。はじめ德川氏に仕へて蕃書調所頭取より講武所奉行となる。その間海外事情を知るため勝麟太郎に就いて蘭書を讀む。家定の時京都町奉行、のち外国奉行、一時職を去りしも家茂上洛征長の際擧げられて顧問たり、慶喜の時、会計總裁若年寄、維新後朝に立ち東京府知事、元老院議官、廿年、子爵を授けらる。

大久保利通 49才
（天保元八―明治一一・五・一四）
1830 1878

一藏、号甲東。鹿児島藩士。文久二年藩主久光に從つて京江の間を往復、天下の名士と交り国事を談ず。慶応三年岩倉具視等と密に謀を廻らし薩長同盟、討幕の基礎を策す。三年十二月参與に任ず。明治二年特命全権副使となり欧米各国を視察、六年帰朝の日内務卿に兼任せらる。七年佐賀の乱を鎮定、つゞ台湾處置のため辨理大臣として清国に使す。十年西南の役車駕に扈して大阪に駐り、軍務を掌る。のち戰後の国力培養に志し、地方制度の發展に資す。十一年五月十四日参朝の途上、紀尾井坂にて島田某等六人の暴徒に襲はれて仆る。

大窪詩佛 71才
（明和四―天保八）
1767 1837

柳太郎、行、常陸の人。江戸に徙り詩を以て名高く、また草書を能くす。市河寛斎、柏木如亭、菊池五山と共に江戸の四詩家と稱せられ、狂逸奇行を以て鳴る。

大隈重信 85才
（天保九二―大正一一・一・一〇）
1838 1922

佐賀藩士。年少蘭学察の教授たること数年、長崎にてフルベキに英学を学ぶ。幕末副島等と脱藩上京、大政奉還を建言、藩吏に捕へられて謹慎。明治政府に擢んでられ外国官副知事、会計官御用掛として外国使臣と折衝、十年大藏卿、十四年下野、犬養・尾崎等と立憲改進党を組織して總理たり。つゞ早稲田大学の基を開き、廿年伯爵、廿一年黒田内閣の外相、条約改正に関して国民の反対に遭ひ、廿三年十月狙撃されて負傷、枢密顧問官に任ぜられ、廿九年松方内閣の外相、廿年首相として組閣、大正三年再び首相たり。大正五年八月挂冠、爾後早稲田に在りて専ら教育に盡力す。

大郷穆（ガウ） 52才
（天保元―明治一四・一・五）
1830 1881

土佐の人。南国五十年史の遺著あり。

穆、越前鯖江藩士。詩人。安政年間藩主山内容堂の老中に列するや爲に周旋し、嫌疑をうけて越前鯖江に徙さる。のち藩主老中を辞し学校を起すに及び藩学の教官に擧げらる。

大浦兼武 69才
（嘉永三・五―大正七・九・三〇）
1880 1918

旧鹿児島藩士。戊辰の役奥羽征討に從軍、維新後警察関係に従事、廿六年島根県を振出しに各県知事たり。廿一年警視總監、貴族院議員に勅選、廿六年逓相、廿九年辞し、武德会長に推さる。四十年男爵を授けられ、四十一年第二次桂内閣の農商相、のち立憲同志会の領袖として盡力、四十四年子爵、大正元年以後内相、農商相たること両度に止らず。

大倉喜八郎

大塩平八郎 46才
（寛政四―天保八・三・二八）
1792 1837

後素、号中斎。大坂の騎吏として文政・天保の間町奉行に従て警吏につとむ。辞してのち専ら諸生に教授す。天保八年米價騰貴、貧民の困窮を坐視するに忍びず、檄を飛ばして大坂に乱を起せしも成らずして逃走潜伏中、官吏に囲まれ、自刃す。

大島維直
（宝暦二―天保九閏四・二九）
1792 1838

忠蔵、贄川、越中の人。江戸に出で林氏に従ひ、昌平黌に学ぶ。のち加賀侯に召し還されて儒員たり。藩の教化、育英に功多し。

大洲鉄然
―明治三五

周防の勤王家たりし僧侶。夙に太田梁平・僧月性に就き漢学を修め尊攘の説を奉じ、文久・元治の間同志と国事に奔走し、兵隊を組織し、また民心鼓舞の為郡郷を巡回。慶応二年幕府征長軍の再発にあひ護国団を率ひて防戦す。明治二年覚法寺住職となり島地默雷と共に宗務に尽瘁、政府に進言する所多し。八年以後本派本願寺の重職に在りて、教育並に郷党公益に尽力す。

太田全斎

方、八郎。備後の人。天明八年以後福山藩儒員たり。文化年中側用人勝手掛年寄格となる。韓非子翼毳、漢呉音図ほどの著あり。印刷術に功労あり。太田錦城と親交あり。

太田錦城 61才
（明和二―文政八・四・二三）
1765 1825

寸佐、加賀の儒者（大聖寺）。はじめ皆川淇園に、のち山本北山に従ふ。皆意に満たず、古人に求めんとして刻苦す。のち吉田侯・加賀侯に仕ふ。

太田垣蓮月 85才
（寛政三―明治八・二・一〇）
1791 1875

閨秀歌人。
海士の刈藻、蓮月式部二女和歌集ほどの著あり。

大谷光尊 53才
（嘉永三・六・五―明治三五・一・八）
1850 1902

西本願寺第廿一世の法主。明治四年十月家督相続、六年本宗四派管長となる。年々巨萬の費を抛ち派内の教育に尽し、日清戦後直ちに台湾に開教使を出す。廿三年大日本仏教慈善財団を設立す。光瑞・光明・尊由等の父。

大谷光演
（明治八・二―）

東本願寺第廿三世の法主。彰如。大正十四年十月隠居。光暢の父。

大槻玄澤 71才
（寛保三―文化一〇・三・四）
1743　1813

茂質、号磐水、陸中の人、一関藩医（玄梁）の子、十三才、建部清庵を師とし医方を修め、又江戸に出で杉田玄白に師事、のち長崎に蘭学を学び、更に前野良澤に教を請うて奥旨を得、天明六年仙台侯の侍医に擢んでられ、文化八年幕命を受けて蘭書飜訳に従事す、築地に塾を設けて子弟を教ゆ、著に蘭学階梯、環海異聞、解体新書（重訂）などあり、

大槻玄幹 53才
（天明五―天保八・一二）
1785　1837

茂樹、号磐里、玄澤の長子、天明七年父に従って居を江戸に移し能く家学を修め、十八才長崎に遊び中野柳圃に就いて蘭学語格を学ぶ、文化九年幕命により洋書を訳解し、父と共に天文台に奉職、蘭学凡、西韵発微、西韵符、低懐新編などの著あり、

大槻清崇 78才
（享和元―明治一〇・六・一三）
1801　1878

平次、号磐溪、玄澤の子にして玄幹の弟、江戸に在り昌平黌に学ぶこと十年、のち東海、畿内、長崎に厂遊、三十二才藩の儒員となり江戸藩邸にありて侍講たり、弘化、嘉永の間西洋砲術を究む、文久二年仙台に移り養賢堂学頭となる、明治戊辰の初、奥羽合縦に仙台の盟主たる時、奔走し事敗れて下獄、のち赦され七十以後東京に住す、孟子約解、古経文視、近古史談、寧静閣詩文、などの著あり、

大槻俊斎 57才
（文化三―文久二・九）
1806　1862

肇、仲敬、仙台の人、少壮江戸に遊び足立長雋に師事、のち長崎にてシーボルトより親しく西洋医術を学び、江戸に帰りて開業、のち幕府の医官となり、西洋医学所の督学たり、種痘術に尽力す、銃創瑣言の著あり、

大槻如電

修二、磐溪の子にして文彦の兄、雑学者、日本洋学年表、その他の著あり、

大西祝 37才
（元治元八―明治三三・一・二）
1864　1900

岡山の人、哲学者、文科大学に哲学を専修し、廿四年東京専門学校講師また東京高師講師となる、傍ら六合雑誌を編輯し丁酉倫理会を起す、廿一年二月欧洲留学を命ぜられ、イエナ及びライプチヒに学ぶ、三十三年文学博士を授けられ、京都帝大講師を託されしも病のため起たず、遺稿に哲学史その他あり、

大鳥圭介 79才
（天保四・二・二五―明治四四・六・一五）
1833　1911

赤穂の人、維新前横浜に赴き佛人に就き陸兵の操法を学び、これにより幕府の歩兵を訓練す、のち榎本武揚と共に五稜郭に傍り、一旦投獄、赦されて後工部省に厂仕、十五年工部大学校長兼学習院長、廿二年清国特命全権公使、廿六年朝鮮公使を兼任、東学党乱後の折衝に尽力、廿七年十一月枢密顧問官、廿三年男爵を授けらる、

大野梁村 71才
（文化二―明治八 1805 1875）

五郎左衛門。肥前の人。古賀侗庵に学ぶ。のち蓮池藩儒たり。

大沼枕山 74才
（文政元―明治三十一・一〇・一） 1818 1891

厚。子寧。幕臣。少時より詩をよくし、菊池五山に学ぶ。梁川星巌、大窪詩佛、小野蘭山等と相交る。のち下谷吟社を設け門弟に教ふ。枕山詩鈔、江戸名勝詩、日本詠史百律ふどの著あり。

大場鳳軒（一眞斎） 69才
（享和三―明治四・一・一五） 1803 1871

水戸の勤王家。景淑、弥右衛門。斉昭に仕へ、安政五年藩論分裂に際して奉勅実行の議を固執して幽せらる。文久三年朝命によりて起ち、朝幕の間に奔走。元治元年以後禁裏守護に任じ、維新の際、鈴木重義と共に賊徒掃蕩の勅命を全うす。

大橋訥菴 47才
（文化二―文久元・七・一三） 1815 1861

順蔵。正順。勤王家。佐藤一斎の門に学ぶ。嘉永米国使節来朝後、闢邪小言四巻を著はす。爾後攘夷を強調し、文久二年乙月坂下門外の変の推幕たり。事前三日の乙月十二日、捕へられて下獄。のち七月七日獄を解かれ宇都宮藩邸に幽せられしが、十二日病歿。年四十七。

大橋玄六

大原重徳 79才
（享和二・一〇―明治十二・四・二）

中納言重尹の子。孝明天皇の朝に仕へ、皇威挽回を念とし、安政年間専ら公武の間に奔走。文久三年勅旨を奉じて島津久光に従ひ江戸に下り、屢〻閣老と会談、つひに勅答をもたらして帰る。翌年勅書改削に坐して罪を蒙る。慶応二年長防再征に当り書を朝廷に上り、再び罪に処せらる。維新に及び召されて参與となり、明治二年議定職に任じ、更に衆議院長官に進む。三年麝香間祗候となる。

大原春舟
（―安政四・二・二九）

画家。号鰕崑崙。画法を柴田義董に学ぶ。

大畑春國 58才
（文政元―明治八・一二・一七） 1818 1875

大國（野々口）隆正門下の國学者。

大久保湖洲

〈余所五郎。彦根の人にして明治の民間史家。家康と直弼、その他の著あり。

大塚正輔

（天保九・一〇・二）

近江彦根の人。京師に出て賀茂季鷹の門に入りて修し、また江戸に往いて千蔭翁に就いて詠歌及び書体を学ぶ。

大村益次郎 46才

（文政七・三・一〇 — 明治二・九・四）
1824 1869

周防国吉敷郡の人。初名村田蔵太。幼にして廣瀬淡窓に就き、つぐで浪華に行き緒方洪庵に洋書を学ぶ。藩主毛利氏に擢んでられて公学教授となり、命により普国兵書を抄譯す。幕末征長軍を破り、また戊辰の役に江戸府判事として会津征討に功を樹つ。兵部大輔に任ぜられフランス式軍制を採用せんとして保守派の反対に遭ひ、五十嵐某等のために暗殺せらる。

大森快庵 53才

（寛政九 — 嘉永二）
1797 1849

欽。七郎右衛門。甲斐の儒者。朝川善庵に学ぶ。

鹿児島藩士。西郷隆盛の従兄。文久三年藩命により江戸に遊学、砲術を習ぶ。慶応初年京都にて西郷大久保に従て国事に奔走。戊辰の役に功あり。明治二年渡欧、普佛戦争のぺりゼ国を視察、帰朝して陸軍に出仕。十年の役に少將として征討別働第一旅團司令官たり。十三年陸軍卿。十六年陸軍大臣兼海軍大臣。廿三年文部大臣。廿四年大將。廿五年再び陸軍大臣。日清役第二軍司令官として功あり。侯爵。大勲位に進ぶ。廿七年元帥府に列し、爾来参謀総長、貴院議員。日露役、満州軍總司令官。戦後功級公爵を授けらる。大正三年内大臣。薨後国葬とする。

大山巌 75才

（天保十三 — 大正五・十二・一〇）
1842 1916

大山綱良 52才

（文政九 — 明治一〇・九・三〇）
1826 1877

はじめ格之助と稱し島津氏の茶坊主。撃剣に長じ、戊辰の役には奥州征討の参謀たり。のち軍功により鹿児島藩参事を経て縣令となる。西南の役に隆盛を佐け、官金十五万円を擅用して軍資に供し、罪を問はれて斬罪に處せらる。

大和田建樹 48才

（安政四 — 明治三・一二・一）
1857 1904

宇和島の人。幼より和歌を好み、宍戸千建・穂積重樹に学び、藩校に国学及漢学を修め、広島外語に学んでのち明治十二年上京、独学にて国文学を専攻、東京大学古典科講師に擧げられ、男・女高師に教授たり。のち辞して歌人、双葉高女の講師となる。帝國唱歌・鉄道唱歌の作者として名高く、古文讀本、日本大辞典、新体詩学、謡曲通解ほどの著述・編著あり。

大樂源太郎

弘毅、号西山。幕末の志士。

織仁親王 68才
（宝暦四八―文政二・二 1754 1819）

有栖川宮職仁親王の子。宝暦十二年十二月 桃園帝の猶子となり、十三年親王宣下。十四年三品に叙し兵部卿に任ぜらる。明和三年六月 二品に、八年十二月 一品に進み、その間七年十二月中務卿となる。九年二月隠居、落飾して法名を龍淵と稱す。和歌入木の蘊奥を得、光格帝はじめ公卿大夫の従ひて傳を受くるもの多し。

大江丸 88才
（享保三―文化十・三・二八 1718 1805）

大坂の俳人。飛脚問屋島屋左衛門の主人。舊國と稱す。雪中庵蓼太の門人。俳とんぢ。俳諧伝授ふどう家書あり。

カ

海保漁村 69才
（寛政二―慶応二・九・八 1798 1866）

元備前郷老。南總の人。屢〻江戸に遊び幕府医官直舎の儒学とふり、処士の教授を命ぜらる。

河合寸翁 75才
（明和四―天保十三・六・一） 1767 1842

隼之助、道臣。家代〻姫路藩国老たり、弱冠にして職を辞し、同僚と合はず、且つは病弱の為、門を杜して居る。のち江戸藩邸より招かれ紊乱せる財政を整理す。天保六年老を以て致仕。

海江田信義 75才
（天保二―明治三九・一〇・二七） 1832 1906

鹿児島藩士。武次。藤田東湖に師事し勤王の大義を唱へ、大久保・西郷と同じ所あり。僧月照を鹿児島に護送す。明治元年東海道先鋒總督参謀として功あり。のち奈良県令ふ〻を経て十年元老院議官。十七年子爵。廿年改米巡遊、墨国のスタインに就き政治を研究。帰朝後、廿三年貴院議員、錦鶏間祗候、廿四年枢密顧問官となる。

香川景樹 76才
（明和五―天保一四・三・二七） 1768 1843

桂園。東塢亭。鳥取に生れ（本姓林氏）、清水貞国に学び、儒を堀南湖に受く。十八才にして上京、香川景柄の養子となり、後徳大寺実祖の知遇を得て家臣となり長門介と改称。多く京都に住して歌学を教へ、万余の門弟を有するに至る。歌道は意を古風に採り、詞を古今後選に採るといふ。近世の名人たり。天保十三年仙洞の特旨を以て従五位下に叙せられ肥後守に任ず。新学異見、中空日記、桂園一枝、活言考ふ〻の著あり。

景樹の男。初名景周。和歌を佳くし書にもたくみ。父につぎ徳大寺家に仕ふ。

香川敬三 77才
（天保一〇―大正四・三・一八） 1839 1915

水藩士香川孝定の子。藤田東湖に学ぶ。斉昭に下りし攘夷内勅を幕府返上を強ふるや、同志と共にこれを把みしるす。其徒三十七人と出奔、江戸薩摩邸に拠り素志を達せんとし、幕府の禁錮に遭ふ。数年後朝命にて赦され、岩倉具視の識見に服し、共に事を謀る。維新東北平定後、軍務官に任じ、明治三年宮内省に出仕。のち皇后宮大夫となり伯爵を授けらる。

鹿島唐

春日潛庵 67才
（文化九―明治一一・三・廿三） 1812 1878

仲襄。母の京都春日坊に住し、久我家の諸大夫を勤む。主家の財政を掌り、のち勤王に盡瘁して三条実萬の親任を受け往々密議に列す。佐藤一斎・藤田東湖・梁川星巌・西郷南洲等と交り、安政五年の大獄に星巌との文書の往復により嫌疑を受け、十二月揚屋入、翌年二月江戸に送致、永押込と決し洛北の別邸に幽居す。文久三年八月赦され再び久我家に仕ふ。維新後諸官を経て奈良県知事に任ず。潛庵遺稿、讀易抄、傳習録評點ふ〻の著あり。

勝取素彦 84才
（文政十二―大正元・八・一四） 1829 1912

勤王家。志毅。号耕宅。山口藩士。江戸に出で安積艮斎の門に入る。元治元年十二月藩論沸騰の際陥れられて禁錮（小田村素太郎と相対）、副使として談判事破れて再び下獄、赦されて維新の際藩主の先発として上京、のち元老院議官・宮中顧問官・貴院議員に歴任。貞愛内親王養育主任となり、廿年男爵、のち錦鶏間祗候となる。和歌を嗜む。

荷田春満 69才
（寛文八―元文元・七・二）
1668 1736

通称斎宮、東麻呂、姓羽倉、京都稲荷山の祠官、夙に祠務を弟信名に譲り、国学を唱（復古を以て自ら任ず）、国史・律令・格式に精しく、また中世以降の歌風の淫靡に流れしを矯正し、一家の見を樹つ、将軍吉宗江戸に召さんとせしも老を以て辞し、国学校を京都に建てんとし、経営に至らずして病歿、萬葉集童蒙抄、伊勢物語童子問、出雲風土記考、春葉集などの著あり。

カツサン・蕎三 57才
（享保十三―文政元・六・十三）
1762 1818

信州の俳人、氏は倉田、三世春秋庵と号す、松代侯に仕へ、のち致仕剃髪す、寛政六年春秋庵をつぎ、翌年相州鴫立庵に入る、のち秋暮亭と称す。

勝野台山 51才
（文化七―慶応元・一〇・一九）
1810 1860

正通、豊作、勤王家、江戸の人、水藩士藤田彪・安島帯刀・高橋多一郎・大野諫介等と交り、安政五年安島と共に京師に潜入、鵜飼吉左衛門父子等と協議し、水戸（攘夷内勅を下さん事を密奏、安政大獄に尚り逃走、大野の家に匿れ、翌年病死、幕府その妻を投獄、長子を三宅島に流す。

勝間田稔 65才
（天保十三―明治三九・一・三〇）
1842 1906

旧山口藩士、明治元年十二月戊辰の役に越後新発田本営の軍監たり、のち内務省に出仕、愛知・愛媛・宮城・新潟諸県知事に歴任す。

勝海舟
（文政六・一・三〇―明治三二・一・一九）
1823 1899

義邦、麟太郎、安房守、安芳、幕府小普請組の家に生る、夙に蘭学を修め家塾を開いて教授、安政三年蕃書反譯勤務を命ぜらる、つゞ海軍の事に勤務数年、慶喜の大政奉還に際し陸軍総裁たり、西郷隆盛と折衝して江戸を兵火の難より救ふ、維新後明治六年十月参議兼海軍卿に任ず、辞してのち廿年五月伯爵を賜ふ、廿一年四月枢密顧問官に任ず、著書及編纂に吹塵録、海軍歴史、陸軍歴史、南国起源、外交余勇、海舟秘録などあり。

桂川甫周 59才
（享保九―文化六・六・廿二）
1751 1809

蘭医、国瑞、号月池、世々医を以て幕府に仕ふ、明和九年廿二才幕命により和蘭貢使と応接、安永六年侍医、つゞで法眼に叙す、老中田沼意次の為黜けられしも、家斉の代に至り再び侍医たり、寛政年間漂民幸太夫等の露人に送致せられて至るや、江戸に召して見聞をきく、北槎聞略を著はし、且つ蘭人に頼り魯西亜記を述作す、享和二年顕微鏡用方を説く、医学館新設に当り教授に任ず。

桂川甫賢
（安永元・十二・六）
1844

甫筑（甫周の養子）の子、国寧、大槻・宇田川・坪井等の諸名士と蘭学を講究、父の歿する及び幕府の医に擢用せらる、天保二年法眼に叙せられ、外科教諭を兼ね、漢洋折衷を旨とす。

桂太郎 67才

（弘化四十二・六―大正二・一〇・一二）
1847 1913

旧長州萩藩士。貧人鳥羽の役及び奥州征討に従軍。明治三年独逸留学。帰朝後七年一月陸軍大尉に任官。八年より十年迄独公使館付武官。十九年少将にして陸軍次官。廿三年中将。日清戦役出征。凱旋後子爵。廿九年台湾總督。卅年伊藤内閣に陸相。大将に進む。卅四年内閣組織。卅五年伯爵。日露役後三十九年一月南満に就き、大勲位に叙し、四年侯爵を授けらる。四十一年再び組閣。蔵相を兼ね。四十四年公爵に陞り。下野の後元老の待遇を賜はる。大正改元後侍従長兼内大臣。大正二年一月三たび首相となり一ヶ月半にして辞職。新党組織準備中病に罹る。

桂山彩巖 72才

（延宝六―寛延二・三・廿一）
1678 1749

義樹。三郎左衛門（のち三郎兵衛）。江戸の儒者。業を林程宇の門に受けて性理学を精研し、詩章に長じ律詩に精し。鳩巣・観瀾等より門戸を張ることをすすめられしも応ぜず。幕府に奉仕して講官となり、のち書物奉行に進む。

加藤枝直 94才

（元禄五―寛政五・八・一〇）
1692 1793

国学者。又左衛門。号芳宜園。真淵の江戸に出づるや交り厚く、つひに其宅を従して己れの邸内に居らしむ。著書に東詠（自選歌集）。古を好をほこるをにくむ説。子に与ふる文。改正観世流謡曲。などの著あり。町奉行大岡越前守に仕（江戸の與力となり、八丁堀に住す。

加藤千陰 94才

（享保二〇―文化五・九・二）
1735 1808

枝直の子。父に学びて歌を能くし、また真淵に師事して古学にいそしみ、書法は松花堂の風を学び、画は建部綾足に学ぶ。父の職をつぎ、傍ら千沢草庵・清水浜臣・清原雄風・賀茂季鷹等と親交あり、宣長とも交際を結ぶ。著書に万葉集略解、宇治の露花、行加能婦里、大歌所御歌記などあり。就中略解は畢生の事業にして、官に上納し銀若干を賜はる。

加藤千浪 68才

（文化七―明治一〇・一一・一八）
1810 1877

国学者。彌三郎。号萩園。奥州白河に生れ、東京薬研堀に住す。岸本由豆流の門人にして和歌及び書を能くす。

加藤弘之 81才

（天保七―大正五・一・九）
1836 1916

但馬出石藩士の子。藩校弘道館に学び、十七才江戸に出で佐久間象山に西洋兵学を受く。廿五才蕃書取調所助教を命ぜられ、進んで独逸語を修む。明治初年政体律令取調御用を命ぜられ、八年元老院議官となる。十年南成校（東京学總理）。廿三年貴院議員。ついで文博・法博。共年商を以て總長を辞し、宮中顧問官となる。独逸文化学会紹介の先駆者にして、著書に道徳法律進化の理、加藤弘之講演全集その他あり。政治家。愛知県の人。東大法科を卒へ、明治廿年外務省に入る。一時大蔵省に轉じ再び戻り日清役当時駐英公使。廿三年伊藤内閣の外相。廿五年以後衆院議員。三十九年西園寺内閣の外相。ついで駐英大使たり。四十四年男爵。大正元年末第三次桂内閣の外相。下野後桂の歿後憲政会總裁となる。大正三年大隈内閣に外相。貴院議員に勅選さる。日独戦争の功にて子爵。十三年六月三派聯立内閣の首相となり翌年薨ず。伯爵。大勲位を授けらる。

加藤高明 67才

（万延元・一・三―大正一五・一・二八）
1860 1926

金子教孝 58才
（文化元―文久元・七・二八）
1804 1861

孫次郎。水戸侯に仕へて郡奉行たり。奉勅攘夷の急先鋒にして、櫛田義擧の首領。事変後鳥羽に捕へられ、翌年斬に処せらる。

金子堅太郎

加納諸平 52才
（文化二―安政四・六・二四）
1806 1857

国学者。遠江の人。夏目甕麿の息。和歌山に至り本居大平の門人となり、医師加納伊竹の養子となる。天保四年以後国学を以て藩に奉仕。直稱を兵部と改む。紀伊風土記及紀州名所図絵を藩命により新撰。著書に枕草子註釈、栄花物語校本、萬葉名所集などあり。

狩野亨吉

樺島石梁 74才
（宝暦四―文政一〇・十二）
1754 1827

勇七。公禮。久留米侯の儒官。少壮江戸に出で細井平洲に学ぶ。のち世子の侍講となり江戸藩邸の子弟に教授。寛政八年藩黌明善堂の創立せらるゝや其造営の事を司る。屢〻江戸に抵役し、また米沢・長府・西条・徳山などの諸侯に賓師たり。石梁遊草――文集。久留米志などの著あり。

貝原益軒 85才
（寛永七―正徳四・八・二七）
1630 1714

篤信。子誠。福岡藩医寛斎の次男。明暦年間藩命にて上京、木下順庵・松永尺五・山崎闇斎等に学ぶ。年十九医術に志し柔軒と改め久兵衛と稱す。すでにして朱学に帰し世道人心の補導につとめ、また物産学を修めて農芸諸書を著す。藩主三世に歴事四十年。元禄年間致仕京都に住す。節倹摂養を重んじ言行模範とするに足る。

亀井昭陽 64才
（宝永二―天保七）
1773 1836

（道載）昱。昱太郎。南溟の長子。筑前の儒医。経史百家に通じ古文辞を能くす。尚書考、古序翼の著あり。

岸岱 65才
（ガンタイ）
（寛政七―安政六・一一・四）
1795 1859

画家。姓は佐伯。岸氏。字は君鎮。卓堂又は同功館と号し、筑前介と稱す。京師の人岸駒の子。父の画風を学ぶ。

賀茂真淵 73才
（元禄一〇―明和六・一〇・一四）
1697 1769

遠州岡部の人。享保十八年世七才、上京、荷田春満に入門。三年後、春満の死に遇ひ帰郷、間もなく元文三年四十二才、江戸に出で村田春道の宅に寓居。延享三、五十才にして荷田在満の推薦により田安家に仕ふ。明和元年六十八才、浜松町に移り、閑居と号す。本邦古典の原典に忠実なる研究により、劃期的なる業績を示し、文意考、冠辞考、萬葉考、国意考、祝詞考、語意考など著述多く、また萬葉風の作歌を国学者。号雲錦亭。京都賀茂の祠官たり。はじめ有栖川職仁親王の門に入り詠歌を修め、のち江戸に来り千蔭に交はり学大いに進む。萬葉集類聚、伊勢物語傍註、雁の行かた、みあれの百くさ、などの著あり。

賀茂季鷹 91才
（享保二―天保十三・九・一八）
1752 1842

鹿児島藩士。戊辰の役、越後、羽後、函館に戰ふ。明治四年四月上京、陸軍中尉となる。十七年十月大佐を以て大山陸軍卿に従て渡欧。翌年帰朝、少将となり参謀本部次長に補す。廿三年二月中将、廿七年六月征清の役、大本営陸軍参謀たり、廿八年二月台湾事務局総裁となる。八月、子爵を授けらる。廿一年一月参謀総長に補し、九月、大将に任ず。

川上操六 53才
（弘化四―明治廿二・五・一二）
1847 1899

河田景興（カゲトモ） 70才
（寛政十一―明治三〇・一〇・一二）
1828 1897

勤王家。鳥取藩の世臣。夙に尊攘説を唱へて諸藩の志士と画策。文久三年石清水行幸に當っては藩命によってこれを警衛。その後蛤御門の変に坐して幽せらる。のち大赦にあひ、明治戊辰の役に藩主の参謀として転戰功あり、福岡県大参事、鳥取県令等に歷任、十一年元老院議官に任じ、廿年子爵を授けらる。

河田迪斎（テキサイ） 54才
（文化三―寛政六・五・一七）
1806 1859

儒者。興八之助。讃岐の人。十五才、伊豫の近藤篤山に学び、文政八年江戸に出で尾藤二洲の門に入り昌平黌に学び、のち佐藤一斎の女婿となり、江戸に教授す。安政元年米使再来に方り、條約文を草し、鎖国を守るべきに非ざることを論ず。南紀日記、書経捷解、易学啓蒙図考、文詩稿などの著あり。

川田剛
（天保九・六―明治二九・三・一）
1830 1896

儒者。号雍見江。備中松山藩士。山田方谷に就きて儒学を修め、ついで東遊して昌平黌に入り、また藤森天山に学ぶ。帰りて藩の重職に擢んでられ、戊辰、伏見鳥羽の役、藩主の徳川氏と親近なるを以て官軍に攻められ、単身入京して陳情、つひに藩主をして賜免を免れしむ。維新後召されて太学博士に任じ、牛込に塾を開いて門弟に教授。のち宮内省諸陵頭、東宮御用掛を歷て貴族勅選議員、文学博士、学士会院に員となる。漢文学の大家。国学者。江戸の人。平田篤胤に師事して古学を修め、春の紅葉、霊の小柱、猿楽沿革考、後言（しりごと）などの著をなす。

川崎重業 35才
（寛政一〇―天保三・七・廿三）
1798 1832

川瀬七郎右衛門 62才
（寛永八―天保九・五・二）
1797 1838

千雷 教徳 水戸藩士 田丸直方の次子にして、川瀬教雄の女婿。藩政弛緩の中にあって硬論を吐き、七年の禁錮に遭ひ、赦されて後、斉昭の下に勘定奉行となる。公務のため九州に滞留中、天保九年歿。

河竹默阿弥 78才
（文化五―明治三六・一・廿三）
1816 1893

号 其水。江戸に生れ、天保六年三月、五世鶴屋南北の門人となり、市村座の狂言作者見習たり。維新後、団菊・左のために多くの脚本を作る。三人吉三廓初買、勧善懲悪覗機関、相生源氏高砂松、月鉄血逸路宵闇 その他あり。

川路利良
（明治十二・一〇・十三）
1839

旧鹿児島藩士。戊辰の役、隆盛に随って東征。明治五年警保助として渡欧、各国警察の事例を研究して帰朝、建言して警視廳を東京におき、警察事務を司法省より内務省の管下にうつし、ついで警視廳長官たり。十年西南役に陸軍少将として征討旅団司令長官たり。十二年再び警察事例講究のため渡欧、途中病を獲て帰朝後歿す。

川路聖謨 72才
（寛政九―明治元・三・一五）
1791 1868

弥吉。三左衛門尉。幕末の外交家。嘉永五年勘定奉行に任じ、翌年筒井政憲と長崎に赴き、露使と折衝し、三港碇泊を許す。安政五年老中堀田正睦に従って西上、開港勅許を得んとせしも効果を得ず。安政末党人の獄に坐して職を免ぜられ、屏居。明治元・三・一五 江戸城授受の事了れるを聞き、自殺す。

川村雨谷 65才
（天保九・八―明治三九・十二・二九）
1838 1906

應心。南画の大家。慶応初年長崎奉行支配定役を命ぜられ、木下逸雲・僧鉄雲などに画を学び、のち明治年間大審院判事に進み、職務の余暇終生南画を作る。書及び篆刻をも能くす。

川村竹坡 79才
（寛政九―明治八・九・二九）
1797 1875

伊勢の儒者。尚迪、貞蔵。猪飼敬所の門人。津藩の督学。明治三年致仕す。

狩谷棭斎 61才
（安永四―天保六・閏七・四）
1775 1835

望之。三州刈谷の出。江戸に生る。少時律令学に志し、六典唐律、大平御覽、通典などを研鑽、終身漢学を奉じ、考証を事とす。和名類聚鈔箋註、本邦度量衡考、聖徳法王帝説証注、日本靈異記、考書扶桑略記、校譌古京遺文、その他考証の成果多く、世に稱せられ、蔵書に富み、古泉貨を愛し、松崎慊堂、清水浜臣等と風流の交をむすび、晩年浅草に卜居す。

河田貫堂 66才
（天保六―明治廿三）
1835 1900

熙。貫之助。迪斎の男。父につぐで幕府儒官たり。文久三年目付となり、南蛮延期の談判に副使として渡欧、帰朝後の建言に容れられて免職、のち開成所頭取となる。明治元年春再び目付となり、大目付にすすむ。維新後家達公の家扶となり、十年より十五年まで公の英国留学に随ふ。帰朝後同家の教育に盡す。

香川景嗣 74才
（寛政四―慶応元・十二・廿三）
1792 1865

歌人 本姓伏田 香川景柄（黄中）（景樹の養父）の門人 景樹の別に家を立つるに及び黄中の嗣となり 梅月堂五世と稱し 京都に住す また画を浦上春琴に学ぶ

金子馬治
（明治三・一・一〇―）

早大教授

亀谷省軒 76才
（天保九―大正三・一・廿二）
1838 1913

行 子省 漢学者 対馬藩士 年廿四病と稱して致仕 大阪に出で広瀬旭荘に学び 幕末勤王の事に関し捕へられしことあり 維新後山陵奉視の信任をうけ 東京に出で 子弟に教授 安井息軒を師とし 著述また少からず

延宝五年
（寛文元―宝暦元・九・八）
1677 1751

祇園南海 75才

紀藩の儒者 正卿 瑜 字 白玉 年十四 江戸に出で木下順庵に学び 雨森芳洲 新井白石等と詩会に一座して才を記はる のち事に坐して海上に謫せらること数年 正徳元年召還され 朝鮮聘使と江戸に会見 乃ち禄を増して儒職に復す 松永禎卿と共に木門の二妙と稱せらる 詩学逢原 明詩俚評 一夜百集ふど著述多く また書画を能くす

菊池教中 35才
（文政十一―文久二・八・八）
1828 1862

通稱佐野屋孝兵衛 号澹如 宇都宮の豪商 安政文久の間荒蕪地を開墾し菊池村をつくり宇都宮侯に賞せらる 姉壻大橋訥庵と共に国事に奔走 坂下門事件の里幕として共に捕へられ（文久二年春）下獄 七月藩邸内に移されしも八月八日病死 年三十五 詩書画を能くす

菊池五山 84才
（安永元―安政二・六・一七）
1772 1857

相孫 左大夫 高松の人 江戸に出で市川寛斎の門に学ぶ のち舎塾を開いて教授 文政中高松侯に擢んでられて儒官となる 特に詩をよくし 詩話の著あり

菊池袖子 54才
（天明五―天保九・九・五）
1785 1838

周秀歌人 号菊園 伊豆君津郡熊坂村の人 十四才加藤千蔭の門に入りまた享保（？和） 五年四月風早大納言実秋卿に従ふ 同六年正月芝山中納言に歌を奉りて賞を受く 天保九年三月 江戸大奥より歌を上るべき由を伝へらる 菊園集 続菊園集あり

菊池南洲
文化五・七・廿二

重固 造酒蔵 江戸の儒者 南汀の子

菊池大麓 62才
（安政三―大正六・八・一九）
1856 1917

理学者 津山藩士 箕作秋坪の二男 少年英蘭語学を修め 十二才幕府の選により渡英 理化学研究 一旦帰朝後明治三年剣橋大学に留学を命ぜられ 帰朝後東大理学部教授となり 理科大学長に任ず 廿一年理博 廿三年貴族院議員 廿一年帝大総長 廿四年文部大臣 のち男爵 枢密顧問官 帝国学士院長

岸本大隅 58才
（寛政元―弘化三・五・一七）
1789 1846

ユゲル 弓弦 江戸の歌人 号在園 幕府の弓弦師 岸本讃岐の家を嗣ぎ 博学にして古書を考証し 著述多し

北慎言 83才
（明和三―嘉永元・三・二九）
1766 1848

静廬 通稱屋根屋三右衛門 江戸の学者 續古事談註 五雜組訓纂 水滸傳新譯 ほどの著あり

北垣國道
（天保七・八―大正五・一）
1836 1916

晋太郎 もと鳥取藩士 夙に尊皇を唱へ 平野次郎等の生野義挙に加はる 明治後地方長官を拝命して治績多く 晩年枢密顧問官たり 廿九年男爵を授けらる

喜多村筠居 73才
（天明四―安政三・六・一三）
1784　1856

江戸の国学者。名は節信、字は信節、通稱彦助、彦兵衛。嬉遊笑覽の著者として知られる。

北畠治房 88才
（天保五―大正一〇・五・二）
1834　1921

勤王家。法隆寺に生る。一名平岡鳩平。文久三年藤本鉄石等の擧兵に伴林光平と共に勅定旁として參戰、また天狗党筑波義擧に加はる。極端なる攘夷論者なりしも大隈の説得により維新後横浜南港場裁判官となり、諸藩に歷任して後、廿四年大阪控訴院長。廿九年男爵。のち下野して大隈の改進党創立に參加せしことあり。久助。号拾穗軒。はじめ医を業とし、のち京都新玉津島神社祠官となる。安政末、松永貞德に歌俳を學び、国典の研鑽多年、一家をなす。元祿二年幕府の徴に應じ医師格に列す。四年法眼に叙し、累進して知行五百石を賜はり再昌院法印に叙す。歌學所また国學博士となり湖月亭と号す。正確なる典據によりて古書を註釈し、源氏物語湖月抄、枕草紙春曙抄、百人一首拾穗抄などをはじめ、多くの書を遺せり。

北村季吟 82才
（寛永元―寛永二・六・一五）
1624　1705

北村筠所 72才
（天保四―文久元・七・十一）
1747　1871

伊兵衛。可昌。京師の儒者。學を伊藤仁斎に受け京師に住す。靈元上皇の御召しにより儒服儒巾を賜ひ、書を仙洞に講ず。

木戸孝允 45才
（天保四―明治一〇・五・二六）
1833　1877

号松菊。初名桂小五郎。山口藩士。吉田松陰に兄事し、長じて江戸に遊び斎藤善道に就き刀法を學ぶ。安政中藩主敬親の下に有備館に勤め、傍ら勝安房、江川英龍に就き泰西兵術を練る。広く天下の俊傑と交はり、文久元治の間京都に在りて奔走、ついで西郷、大久保等と討幕を策し、慶応三年王政恢復の大業を成就す。明治元年乙丑月総裁局顧問となる。三年待詔院學士、參議に任ぜらる。三年版籍奉還を敬親に説いて斷行せしむ。岩倉使に副使として欧米巡視。帰朝後立憲の基礎を定め、台湾清国の処置に関與、八年地方官会議を開くに當り議長となる。九年疾に罹り内閣顧問に轉じ、宮内省出仕に補せらる。十年西南の役車駕に扈して京都に至り、軍國事務に携はる中、病を得て薨ず。

木下逸雲

画家。また書を能くす。代々長崎にありて乙名（官名）たり。慶応年間江戸に下り、その帰路海上に難破して死す。年六十八。兼ねて篆刻に工み、詩及び和歌を嗜む。

木下犀潭 63才
（文化二―慶応三・五・　）
1805　1867

業廣、宇本郎。熊本の儒者。天保六年伴讀に擢でられ中小姓となり、轉じて世子の伴讀となり江戸及京都に在勤。嘉永元年帰国、府學の訓導を兼ね物頭に進ず。のちの京大總長廣次はその男。

木下長嘯子 73才
（天正四―慶安元・六・一五）
1576　1648

勝俊。播州の太守たり。のち洛東靈山に薙髮閑居。風流を愛し和歌を好んで研究。また和文精巧。藤原惺窩、石川丈山等と交りあり。のち洛西小塩山に閑居。

木下順庵 75才
（元和七―宝永二・十二・廿三）
1621 1698

貞幹、平之允、京都に生る。夙に神童の稱あり、僧天海より法嗣に望まれしかど応ぜず、十三才太平頌を賦し後光明天皇の叡感に入り、採用せらるべき人として崩御に遇い果さず、のち松永昌三に従い性理の学を修め、東山に門弟を教ふること二十余年、公卿諸侯争ひて賓師とす、のち前田侯に聘せられ、江戸金沢間を往来してその藩学に貢献、天和二年将軍綱吉に召され、学職に補し屢々経筵に侍す、錦里文集、班荊集の著あり、門下より白石、鳩巣、芳洲、南海、観瀾等の俊才輩出す。

木村芥舟
（天保元・二・五―明治三四・二・九）
1830 1901

毅、摂津守と稱す、徳川氏旗本の子、安政二年抜擢されて本丸御目付となり、ついで長崎表御取締御用となり海軍傳習の監督、万延元年正月咸臨丸に乗組み米国に渡る、帰朝後海軍奉行となり海軍振興を建議、三年六月軍艦奉行に進み、新たに英国海軍に学ぶの方針を樹つ、維新後致仕、朝に出でず、書画を能くし詩に長じ、物産の学に精し。

木村哭斎 67才
（元文元―寛政二・八・二）
1736 1802

弘蔡、世肅、通稱壺井屋太吉、又吉衛門、浪華の人、博学多芸、

木村正辭 87才
（文政一〇・四―大正二・四・一〇）
1827 1913

下總の人、国学者、幼にして国学を伊能穎則に、漢籍を岡東保孝に学び、幕末和学所頭取に擢げらる、明治の初大学助教授となり、廿三年東京学士会員、のち文科大学教授、高師教授、廿六年退官、以後著述に従事、萬葉集

註解に業績多し、大学博士を授けらる。

清川八郎 34才
（文政一〇・一―文久三・二・三）
1830 1863

勤皇家、出羽清川村の人、乙明（本姓斎藤）十八才にして江戸へ出奔、京條文藏の塾に入る、廿三才安積艮斎に入門、のち更に聖堂に学び、安政元年廿五才塾を開いて教授、尊攘の説を唱へて幕吏に追跡せられ、文久元年以後各地に潜行して策動、文久三年三月江戸にて浪士の手による攘夷実行を劃策中、四月十三日上ノ山藩士金子与三郎を藩邸に訪ぬる途上、幕士数名に襲はれ殺る、清川八郎遺著あり。

清原雄風 64才
（建暦四―文化七・八・二〇）
1747 1810

歌人、豊後岡の人、父の業をついで医となり玄達と云、傍ら詩文を好み岡侯学館の司業となる、致仕後諸国を廻り、寛政年江戸より下總香取に徙る、加藤千蔭、村田春海と親し、怜野集、古人贈答歌抄、雄風家集などの著あり。

狂歌堂真顔 77才
（宝暦三―文政十二・六・六）
1753 1829

江戸の狂歌師、はじめ鹿川春町に従って鹿川好町と号し、のち蜀山に学び、寛政八年狂歌堂真顔と改む、後年俳諧歌の中興を志し文政十一年五月二条家より宗匠の免許を受け四方歌壇真顔と稱す。

玉澗

京都の詩僧、釈大典に学んで博学碩徳の聞あり、のち徳島興源寺の住、斎藤拙堂、古賀精里、篠崎小竹、斎藤竹堂等と交友あり。

桐野利秋 40才

（天保九―明治一〇・九・二四）
1838 1877

初め中村半次郎　薩州吉野村の人。武芸に達し、文久二年久光に随ひ入京。つゞいて西郷隆盛の意をうけ国事に奔走。戊辰の役軍監として若松城を陥れ、明治二年本藩常備隊大隊長たり、四年東京の後陸軍少将に任じ、熊本鎮台司令長官。つゞいて陸軍裁判所長に進む。征韓論破裂に反ひ帰国、青年子弟を養成、十年西南役に軍務を指揮、転戦の果て岩崎谷に戰死す。

其一 63才

（寛政八―安政五・九・一〇）
1796 1858

画家。元長、為三郎。父は近江の人（江戸に出で紫染を創始）。酒井抱一の家扶を勤め、抱一より画法を学ぶ。人物花鳥を能くす。

衣笠豪谷 48才

（嘉永三・七月―明治三・四・二六）
1850 1897

画家。續侯、備中の人。詩画を石川晃山に、書を本城梅屋に学ぶ。のち森田節斎及び坂谷朗廬に従って経史を学ぶ。つゞいて江戸に至り、書を市川萬庵に、詩を大沼枕山に学ぶ。のち又京都に画を中西寛石に問ぶ。明治六年清国に航し、帰朝後勧農局に奉職。艪舵を研究す。のち農商務省に仕官。致仕後書画を以て娯しむ。著書に讀課餘録、西遊帰録、清国式艪舵図解、農事有効作ふどあり。

木下幸文 43才

（寛永八―文政四・十一・二）
1799 1821

歌人。号亮々舎（サヤ〳〵シャ）。備中の人。香川景樹に学ぶ。能（合直好）と共に桂門の双璧と稱せらる。晩年大坂に住し名声高し。亮々草紙、日遺稿、百人一首、土佐日記、萬葉集註釈など の著あり。

ク

久坂玄瑞 26才
（天保一〇―元治元・七・一九）
1839 1864

義助、通武、山口藩、吉田松陰に学び、風に泰西の事情を究め、諸州を漫遊し尊攘の大義を唱ず。文久三年八月、妹に従って江戸に赴き、輔弼の任を尽す。三年二月、寺島、尊と連署して攘夷決行を建言、馬関に抵り外艦砲撃の列に加はる。八月朝議一変、藩主の譴責を蒙るや雪冤に奔走、京都に潜み画策、元治元年六月、真木和泉等と七卿及藩主父子の放免を上書してきかれず、七月十九日、鷹司邸に依り、閤下に伏奏せんとする際、藩兵大挙迫りて会薩の兵と戰端を開き、銃丸に中りて歩行する能はず、入江九一に後事を託して自刃。

日下部九皐 45才
（文化十一―寛政五・十二・一七）
1814 1858

伊三次、翼、号実稼、鹿児島藩の世臣。父の後を承けて水戸太田学館に幹事たること数年。弘化初め斉昭の幕譴を受くるや江戸に出で（深谷信夫また宮崎後太郎と変名）雪冤に尽力。旧主島津斉彬に知られ、寛政二年冬、江戸邸校合所詰となる。国事多難に際し、東西に奔走して朝権恢復を周旋、安政五年八月、鵜飼幸吉と共に変装して密勅を水戸藩邸に達す。大獄に際して子信政と共に捕はれ、江戸傳馬町の獄に病没す。

草場佩川 81才
（天明七―慶応三・八・二九）
1787 1867

瑳助、肥前多久の人。廿三才江戸に出で古賀精里に学び、帰後、佐賀藩の儒官となる。安政二年幕府に徴されしも老を以て辭し、依て銀及び褒詞を賜はる。傍ら書をよくす。

九條道孝 68才
（天保一〇・五・一〇―明治三九・一・四）
1839 1906

准三宮従一位尚忠の長男。元治元年右大臣兼右近衛大將。慶応三年末、王政革新に當り参朝を差止められしも、明治元年閏月再び出仕、奥羽鎮撫総督として平定に功あり。四年廢帝間議候。十二年明宮祗候（七年まで）。十七年七月公爵、宮内省出仕。

九條武子 42才
（明治一〇・一二―昭和三・二）
1887 1928

大谷光尊の女にして、九條良致（道孝五男）の夫人。閨秀歌人として南朋佐々木信綱氏の竹柏園同人。歌集「金鈴」「薫染」また随筆集に無憂華あり。

国木田独歩 36才
（明治四・七・一五―四一・六・二三）
1871 1908

常陸長を兼ぬ。廿三年貴院議員。廿三年大勲位菊花大綬章、皇太后の父君。下總に生る。十七才上京、神田の私立法律学校に入学。つぐで東京専門学校英語政治科に軸じ、校長排斥運動にて退学。帰郷後、英語、数学の私塾を開き、村の子弟に教ふ。廿二年再び上京、友人等と雑誌「青年文学」を発行。つぐで日清戰役に国民新聞記者として従軍。のち国民の友の編輯に従ふ。「源氏ぢ」を発表、文壇に第一歩を踏む。窮乏裡に妻子を生家に託し、神田西園寺邸に寄宿し、牛肉と馬鈴薯、運命論者など の諸作を発表。廿八年独歩集を出して文名一時に昂る。のち病みて、日本新聞に掲載中の「暴風」を絶筆として、茅ヶ崎南湖院に永眠す。

国友與五郎 62才
（享和元―文久二・二・二九）
1801 1862

多カツ（号善庵）尚克、水戸藩の学職。はじめ弘道館の右筆訓導。のち寺社役となり社寺の弊風を一新。斉昭の致仕するや譴を蒙り禁錮数年。嘉永中赦され弘道館助教、藩主の侍讀たりしも、保守派の嫌疑にふれて免職。著書に朋党論廣義、閑道録などあり

久保天隨
明治八七—

文学博士。台北帝大漢文科教授たり。

久保木竹窓
（宝暦十二—文政十二、八、二八）1762 1829 68才

儒者。清渕太郎右衛門。下總香取の人。子弟を教へ、小笠原安房守より士爵に列せられ、また水戸藩の郷校に講義す。

熊谷直好
（天明二—文久元、八、八）1782 1862 81才

国学者。八十八、助左衛門。周防に生れ大坂に住す。香川景樹の門人。著書に法書至要抄注解、梁塵後抄、浦の志保貝ふどあり。

熊坂盤石

秀、宇右衛門。陸奥の人にして儒者。継志遊、南著補載録、西遊紀行ふどの著あり。

熊沢蕃山
（元和五—元禄四、八、一七）1619 1691 73才

助右衛門、伯継。京都に生る。歳十六、岡山藩主池田光政に仕ふ。廿才致仕、此頃中江藤樹に陽明学を学び、経世の要義に通暁。寛永十七年再び岡山に召され、光政の側役となり在職十八年、藩政の改革に尽瘁するところ多し。慶安三年、蕃山村に退隠、蕃山と介

久米幹文（モトブミ）
（文政十二—明治二七、十、一〇）1829 1895 67才

国学者。号水屋、翠園。水戸の人。平田篤胤に学び、烈公の知遇を受けて小石川藩邸に国事に尽瘁。明治五年教部省に出仕、出でて伊勢神宮に仕へ、以後神職として諸社官司に歴任。明治十五年東京大学古典科講師、つゐで第一高等中学教授となる。明治十九年には本居豊穎等と大八洲学会を設立、国文国語の振興をはかる。遺稿、水屋集あり。

雲井龍雄
（弘化元—明治三、一二、二六）1844 1870 27才

慷慨家。米澤の人。江戸に遊学して安井息軒に入門。明治戊辰春、徴士として京師にあり、鳥羽、伏見の戦後、上書して徳川氏の寃を訴へしも允されず、帰郷して奥羽列藩を説き官軍に抗せしも敵せず降服。三年再び挙兵を策して捕へられ十二月小塚原に梟せらる。年二十七。

倉富勇三郎
嘉六七—

久留米藩士の家に生る。夙に司法省に出仕して大審院、控訴院、韓国統監府等に歴任。また朝鮮總督府に入りて司法部長官に任じ、のち法制局長官、帝室会計審査局長官、枢密顧問官に挙げられ、枢密院副議長を経て議長となり、昭和九年五月辞任。

倉成龍渚 65才
（寛延元―文化九・十二・一〇）
1748　1812

亞、宇佐の人、年廿三京都に遊び伊藤氏の塾に学ぶ、帰りて中津藩儒員となり、侯より龍渚の号を賜はる、のち江戸に出で安子の侍読たり、寛政八年侯に従ひ帰国、府学進脩館の成るや、その学制を定め、のち教授となる、周易国考、儀礼考、周易守翼などの著あり、

栗田土満 75才
（元文二―文化八・七・八）
1737　1811

国学者、号岡ノ屋、遠州平尾村八幡の祠官、従五位下に叙し、壱岐守に任ず、眞淵を師として古学を学び、詠歌に名あり、神代巻葉末抄、園廼屋家集などの著あり、

栗原信充

号柳庵、江戸の人、幕府の家人、漢学を柴野栗山に、国学を屋代弘賢に、故実を伊勢貞丈の子某に学び、古器図編、刀剣図工、楽器図説、續武将感状記など著書多し、

栗本鋤雲 76才
（文政五―明治三〇・三・六）
1822　1897

幕府医官喜多村槐園の第三子にして、のち栗本氏をつぎ瑞見また瀬兵衛といひ、安芸守に移る、文久慶応年間外国奉行として開港問題に尽力、明治三四年の頃仏国に赴き、帰朝後報知新聞に記者たり、

来原良蔵 34才
（文政十二―文久二・八・二九）
1829　1862

盛功、長州藩の勤王家、国学、厂史、槍術を能くし、長藩兵制改革を首唱す、練兵塾に教授、また江戸に出ては有備館の教授たり、文久二年春

島津久光の上京と前後して入京、尊攘に暗躍、幕府の因循を憤り横浜の夷館を焼かんとして刺せられ自害す、吉田松陰、宮部鼎蔵等と交り篤し、

吳又兵衛

大坂の人、号肥前屋、

黒岩慈菴

壽、東峰、土佐の儒者、闇斎に学び高知藩に仕ふ、

鉄復堂 67才
（安永六―天保一四・十一・七）
1777　1843

儒者、煥、子文、徳島の人、江戸に行き古賀侗庵に学ぶこと数年、加賀侯の聘を辞して帰国、舎塾を設けて教授、文政十三年黄字帶刀を允され賦役を免ぜらる、天保年間姫路侯の徴に応じ講義月餘、儒官たらしめんとするを辞して帰国、終身仕へず、

黒河春村 68才
（寛政十一―慶応三・十二・二六）
1799　1866

次郎左衛門、主水、江戸浅草の人、はじめ浅草庵守舎といひ狂歌を専らにし、のち国学和歌に轉ず、狩谷棭斎に古学を問ひ、清水浜臣、村田春門、北静廬等と交る、著書に墨水抄、音韻考証、碩鼠漫筆、歌集、文集あり、

黒田清隆 61才

（天保十一―明治四三・九・二三）
1840 1900

鹿児島藩士。英船来襲の防戰に功あり。戊辰役、奥羽北越、函館の征討に從ひ、榎本武揚への寛典を朝廷に乞ふ。維新後、欧洲及び支那に使し、七年陸軍中將となり、參議開拓長官を兼ぬ。八年木江事件に特命全權辯理大臣として渡鮮。十年西南役征討に功あり。十三年伯爵。廿年農商務大臣。廿二年四月内閣總理大臣となる。廿二年十月辭して樞密顧問官。廿五年伊藤内閣の遞相。廿八年樞府議長に轉じてなほ内閣に列し、爾後總理大臣代理たること四たび。卅一年六月枢府議長專任となる。

黒田清綱 88才

（天保九―大正六・三・二三）
1830 1917

鹿児島藩士。教道を八田知紀に學び、瀧園歌集、厂代歌選などの著をなす。また政治上功績多く、元老院議官、貴院議員を經て樞密顧問官となる。大正二年八十四才、宮内省御用掛として御製御歌拜見を仰付らる。

ケ

契沖 62才
（寛永一七―元禄一四・正・二五）
1640 1701

尼崎に生る。十一才にして出家。長谷・高野等に巡学。延宝七年四十才にして妙法寺住職となる。ひろく国典を讀み、水戸義公の嘱によって萬葉代匠記を撰し、その他古今餘材抄、厚顔抄、勢語憶断、百人一首改観抄、和字正濫抄など広範なる語学的知識に基く註釈書を多く出し、近世国学勃興の先駆者となる。元禄三年以後妙法寺を閉門に譲り圓珠庵に隱棲す。

月性 42才
（文化四―安政五・五・二）
1817 1858

周防の奇僧。外冠を憂へ、梅田雲濱等の志士と交通す。海防僧と呼ばる。

月照 46才
（文化一〇―安政五・二・一一）
1813 1858

勤王僧。忍向。薩摩清水寺成就院の住僧。嘉永七年職を弟に譲り諸国を遊歴、公卿の間に倒幕攘夷を説き、朝廷の命により天下泰平を祈る。安政大獄、幕吏の追跡に遭ひ西郷隆盛と共に薩摩潟に投身。隆盛は蘇生せし、月照は終に絶命す。

元明 85才
（延宝元―宝暦七・正・二七）
1673 1757

宇治万福寺十七代の主。三河の人。

コ

小池道子

閨秀歌人

小出粲（ツバラ） 78才

（天保二―明治四十・四・一五 1831―1908）

歌人、明治時代を通じて宮内省文学御用掛、御歌所主事たり、旅花、及び小出粲翁家集の遺著あり、

高孟彪 63才

（享保七―天明四・四・二四 1722―1784）

通稱大島遜記、また近藤斎宮、号芙蓉、甲斐の人、京師に遊学し汎く時流に交る、また篆刻、有職故実に通暁、晩年江戸に来り、急に傷寒を病みて歿す、

公慶 58才

（慶安元十二・五―宝永二・七・十二 1648―1705）

東大寺龍松院の僧、丹後宮津の人、萬治三年十三才にして東大寺に入り、大佛の露坐するを見て夙に大佛殿再興の志を抱く、貞享元年、三十才、江戸に至り幕府に訴へて大勧進の許可を受く、元禄年間、多年の苦辛を経て、宝永二年10月十日、上棟式を行ふ、六月伊勢太廟を経て江戸に入り将軍に謝し、間もなく病を得て歿す、（桜井孝秀・乱（天和八・元禄十年 安久ヶ乱））著作に重興大佛殿誌須集あり、

幸田露伴

（慶応三・七・二八―）

成行、

河野敏鎌 52才

（弘化元・10・20―明治二六・四・三四 1844―1893）

土佐の人、年十六、江戸に遊び大に時事に感じ、安井息軒の門に学ぶ、二年後帰藩、藩内の勤王派として佐幕派に対抗、文久三年佐幕派の勢力を得て武市半太郎自殺を命ぜらるゝや、獄に投ぜらる、禁錮六年、維新の年赦に遇ひ、後藤象次郎の斡旋にて待詔院に出仕、のち、文部、農商務、司法の諸大臣に歴任、廿六年十月子爵を授けらる、

河野広中 75才

（嘉永二・七―大正十二・二・九 1849―1923）

政治家、福島県三春の人、夙に勤王を唱へ、板垣退助と通じ維新の際藩を賊名より救ふ、維新後地方政治に尽力、十二年国会期成同盟会の会長に推さる、十六年福島事件にて入獄、廿二年特赦出獄、廿三年衆院議員となり、第九議会に議長、その間廿七年には陸奥宗光を説きて日清戦争を起さしめ、廿八年ポーツマス条約に憤慨して日比谷焼打事件となり入獄、翌年出獄、大正三年大隈内閣に農商務大臣、辞職後は憲政会の重鎮、

河野鉄兜 43才
（文政八・十二・七―慶応三・二・六）
1825 1867

嘉永四年林田藩敬業館の儒学教授となる。安政二年より教務の傍ら家塾を開く。文久二年三月上京して二条城守護の藩主に時勢に関し意見を具陳、著に近奏賞、小日本史、鉄兜遺稿などあり。少時医師たりしことあり

古賀精里 68才
（寛延三―文化四・五・三）
1750 1817

佐賀藩の世臣、藩命により京都遊学、帰藩後弘道館に教授となり、兼ねて民政に貢献する所多し、寛政三年藩主の東覲に従い幕命により昌平黌に書を講ず、八年幕府儒員に挙げられ、ついで教授に進み学政を綜理す、文化七年より連年対馬に韓使を応接、列侯の教をたのむ者数十人、その学程朱を尊信して崎門の学を嫌う、四書集釈、大学纂釈、近思録集説、精里文集などあり

古賀穀堂 59才
（安永七―天保七）
1778 1836

精里の長男、熹、敬一（修里）、藤馬、佐賀藩の儒者、江戸に学び帰藩後文化元年進物役兼教授、ついで檣隊長に陞る、十四年世子傅に転じ江戸邸に住す、母子立つに及んで年穀相談役となる。

古賀侗庵 60才
（天明八―弘化四）
1788 1847

精里の三男、煜、小太郎、寛政八年父の東遊に従い、文化六年擢んでられて幕府儒官となり、父と並び学政に携はる。

五岳 70才
（享保五―寛政十二・十一・七）
1720 1799

画家、福原五岳、尾道の人、大坂に住す、大雅堂に学び、また詩書を能くす。

吳山
文化六

越中富山の俳人、賀晋堂と稱す。

児島強助 26才
（天保七―文久元・六・二五）
1836 1861

志士、宇都宮の人、矯、号葦原処士、江戸に出で平田鉄胤、芳野世自に、又水戸にて藤田東湖、常陸寒緑に学ぶ、のち坂下門の変の主謀者、越智通植に財政的援助をなす、捕られて獄中に死す、年廿六、母及び妻も勤王の志篤し。

杉天外
（慶応元・九―）

為蔵

関三英 53才
（寛政四―天保一五・五・二三）
1792 1844

出羽荘内の人、シーボルトに学び、蘭学西史に精通、山岸和田藩主岡部侯に聘せられて侍医となり、のち司天台に召されて和解万国地誌を訳し、金若干を賜はる。高野長英、渡辺華山と親交あり、両人の縛につくや屠腹して死す。

五代友厚 52才
（天保五―明治二八・九・二五）
1834 1895

旧鹿児島藩士。生麦事件後、薩英戦に寺島宗則と共に突入、捕らえられて江戸に護送さる。維新後、外国官判事、のち会計官として大隈を助く。致仕後、寺島と渡欧し、帰朝後商業に従い、鉱山開鑿・製塩に従事。大阪の商法会議所を設け、その議長に推さる。

児玉源太郎 55才
（嘉永五閏二・三―明治三九・七・二四）
1852 1906

旧徳山藩士。戊辰の役東征に加はり、明治四年陸軍少尉となる。佐賀の乱、神風連の乱、西南役の鎮定に功あり。廿年陸軍大学校長となる。廿四年より五年にかけて欧洲諸国視察。帰朝後陸軍次官。廿八年征清役の功により男爵。廿九年陸軍中将。卅一年三月台湾総督。ついで子爵を授けらる。卅三年末、伊藤内閣に陸相。ついで桂内閣に留任。内相・文相の兼摂を経て参謀次長に補せられ、卅七年二月大将に進み、満洲軍総参謀長として大功を樹つ。凱旋後三ヶ月参謀総長に任ぜられ、ついで満鉄創立委員長として計画中急病に仆る。

後藤象二郎 60才
（天保九・三―明治三〇・八・四）
1838 1897

土佐の人。江戸に遊び大鳥圭介に英学を修め、慶応三年藩家老として大政奉還及びその善後策に藩主容堂を輔けて奔走、功あり。維新の大号令発せらるゝや参与に任ぜられ、ついで總裁局顧問・外国事務局判事として新政府の枢機に参ず。大阪府知事を経て三年七月廟堂間秘候。六年四月参議。十月左院事務總裁。征韓の議破れて下野。板垣・江藤等と民選議員設立の建白をなす。八年元老院副議長。九年二月辞し、十五年二月板垣と外遊。翌年帰朝。廿年伯爵を授けらる。廿三年三月黒田内閣の逓相となり、山県・松方の数内閣を経て伊藤内閣の農商務大臣たり。廿七年一月辞し、征清の役起るや朝鮮に赴き顧問として尽さんとして病のため果さず。

後藤松陰 68才
（寛政九―元治元・一〇・一九）
1797 1864

機。俊藏。美濃の人。頼山陽の高弟にして條崎小竹の女婿。著書に春草詩鈔。好文字ふとあり。

小中村清矩 74才
（文政五―明治二八・一〇・一一）
1822 1895

国学者。号陽春廬（ヤスヒロ）。三河の人。亀田鶯谷に漢文を、伊能穎則に国史律令を、また本居内遠に国典を学ぶ。安政四年紀伊藩教授、ついで幕府に召され和学所講師たり。王政復古に及び明治二年太政官に召されて制度取調に当り、神祇・教務・内務の各省に仕、修史館御用掛を経て十五年大学教授となり、ついで文学博士を授けられ、廿三年貴院勅選議員となる。令義解註疏・公廨備考・歌舞音樂畧史・陽春廬雑攷・日本官制沿革史などの著あり。

近衛家熙 90才
（寛文七・六・四―元文元・一〇・三）
1667 1736

基凞の子。母は常子内親王。貞享三年三月内大臣。元禄六年右大臣。十七年左大臣。宝永四年関白。六年摂政。七年十二月太政大臣に任ず。辞してのち享保十年十二月三宮に准ず。ついで剃髪。豫樂院入道。前摂政と稱し、法名眞覚と号す。詩文書画をよくし茶道に達す。

近衛忠熙 91才
（文化五・七―明治三一・三・一八）
1808 1898

左大臣基前の子。文政七年内大臣。弘化四年（四十才）右大臣。のち左大臣となり尊攘党の推戴する所となる。関白九条尚忠の辞職に及び内覧たりしが、僧月照の件に関聊して六年辞官剃髪。文久二年公武合体論起り関白となる。大和行幸の議起るや、その軽挙を憂ひ延期せしむ。征長役・戊辰奥羽役ふたたび朝幕の間に立て苦心。維新後は身を閑地に置き、絶えて世事に関せず。

近衛篤麿 42才
（文久三―明治三七・一・二）
1863　1904
（近衛家十四）
忠熙―忠房―篤麿―文麿

従一位忠房の長男。明治十七年七月公爵を授けられ、翌年より独逸留学。廿三年帰朝、貴院議員として三条公、鳥津伯と共に院内に三曜会を組織、雑誌「精神」を発行して対外硬の主張をなす。廿八年三月学習院長。廿九年九月貴院議長。卅一年東亜同文会誕生、その会長となり、日清親善に努める。卅三年義和団事変後、雑誌「東洋」を発行してロシヤを警戒す（きを説く）。卅六年末貴院議長の任期満ちて枢密顧問官に親任される。　号霞山

小林松亭

小堀遠州 69才
（天正七―正保四・二・六）
1579　1647

政一。秀吉に仕へ（のち家康に仕へて遠江に一万石を賜ひ遠江守と稱す。禁裏・柳宮の作事奉行を勤め、元和九年伏見奉行に補せらる。遠州流茶式の祖として茶道・生花造園などに達す。また春屋国師に参禪し、剃髪して宗甫大有居士と稱す。

小松帶刀
（明治三・六・二七）
1870

勤王家。鹿児島藩士。諸要職を歴て軍役掛となり、元治元年七月蛤御門の変に薩兵を率ゐて長兵を討つ。のち岩倉具視等と討幕の議を唱へ、奔走す。維新に及び京師に徵されて参與となり、總裁局顧問に任せらる。明治元年外国事務局判事、二年会計頭に任ぜらる。

小南五郎 71才
（文化九―明治一五・二・二二）
1812　1882

五郎右衛門。高知藩士。尊王攘夷の大義を唱へ（諸藩の志士と交り大に国事に奔走。文久元年武市半平太の事件に坐して罪せらる。のち赦され明治十五年歿

小宮山楓軒 77才
（明和元―天保十一・三・一）
1764　1840

昌秀。次郎右衛門。水戸藩士。立原翠軒に就いて学び、藩主治保の侍讀たり、後四年に厂仕。紅葉郷に郡宰たること廿三年。大いに治績をあげ、のち町奉行に任じ側用人となる。天保十一年病あるを、藩主斉昭親しく見舞ふ。著述大紀その他の著あり。

小山霞外 80才
（天明五―天保元・一〇・四）
1785　1864

書家。朝鶴。月徵。下野古河の人。立原翠軒に学び、また米庵・菱湖に師事す。夙に尊攘の大義を説き、斉昭の眷顧を受け、藤田東湖・大橋訥菴等と往来す。傍ら詩歌・茶儀・謡曲をよくす。

小山春山 65才
（文政一〇―明治三四）
1827　1891

朝弘。士遠。儒者。下野の人。会沢正志に学ぶ。

近藤芳樹 80才
（享和元―明治十三・二・二九）
1801　1880

国学者。周防の人。国学を本居大平、山田以文、村田春門に学び和歌を能くす。毛利敬親卿に召され明倫館教官たり。のち上京、明治八年九月宮内省文学御用掛となる。著書に大阪執中坊、標註令義解校本、陸路廻記（東回、北陸行幸供奉記）などあり。

近藤芳介 77才
（文政五―明治廿一・十二・二九）
1822　1898

歌人。周防山口の人。佐甲但馬守久棟と称す。足代弘訓に従って国学和歌を学び、のち毛利公の媒にて近藤芳樹の養子となる。明治初年宣教少博士となり、松尾大宮司より稲荷宮司となる。

近藤篤山 81才
（明和三―弘化三・二・二六）
1766　1846

新九郎。駿甫。伊豫の人。天保八年大坂に遊学、尾藤二洲の門に入り、のち二洲の幕府に召さるゝやこれを追い江戸に至りその塾に入る。寛政九年業成り帰郷して教授、享和三年小松侯の聘を受け、天保十三年まで教育の事に携はる。

紅蘭女史 76才
（文化元―明治十二・三）
1804　1879

梁川星巌の妻にして閨秀画家。画法を竹洞に学びて山水花卉を能くし、また詩に長じ、兼ねて花を能くす。安政大獄の際、星巌の歿せしため身代りとして一時投獄せられしことあり。

古筆了仲 81才
（明暦二―元文元・八・三〇）
1656　1736

守直。務兵衛。鑑定家。古筆別家第三世。浮世絵師にして戯作者。俗称倉橋寄平。駿州小島藩主松平丹後守の家臣。狂名を酒上不埒春町坊（小石川春日町に住せしためという）という。金銀先生栄華夢、高慢斎脚行日記。

幸堂得知 71才
（天保四―大正二・三・廿二）
1843　1913

詩句市定などの作あり。利平。江戸に生れ、はじめ三井両替店に務め、のち転じて中外電報社員となり、ついで東京朝日新聞の客員となり、専ら劇評俳諧に筆を執る。著書に黄表紙百種、大通世界、幸堂滑稽などあり。饗庭篁村等と併称せる。

サ

西園寺公望（嘉永二・一〇―）

西郷隆盛 57才（文政一〇・一二―明治一〇・九・二四）1827―1877

吉之助、号南洲（変名菊地源吾、大島三右衛門）鹿児島に生る。藩主斉彬の抜擢により安政元年春随って江戸に出で、天下の俊豪と交り幕政の革新を期す。水戸に賜勅以来幕府の嫌忌加はり、近衛家の内嘱により僧忍向（月照）を伴ひて西下、斉彬薨じ藩議鹿児島に留まるを許さず、日向に移り、月照と共に入水せしも独り蘇生して大島に流さる。文久二年藩命により召還、久光の命により村田新八を伴ひ形勢視察に出発、命を奉たず大坂に至り、京摂の志士と会し、久光の上坂に及んで四月帰国を命ぜられ、重譴を蒙り沖永良部島に流さる。元治元年二月赦され、三月上京、久光の許に禁闕守護、七月長人を退け、つづで征長の議にあづかる。長藩（の寛典に尽力、薩長連合の実をあげ復古の

大業を協立、戊辰役江戸城を収め、明治五年七月元帥兼近衛都督、六年陸軍大将となる。征韓論に関し官を辞し帰郷、九年十月子弟に擁せられて挙兵、翌年八ヶ月城山に戦死す。隆盛の弟、維新の戦に功あり、明治二年山県に随って欧州巡遊、帰りて兵制を定むる。七年陸軍中将として台湾征討の事に参ず。十年後文部卿、陸軍卿、農商務卿に歴任、十八年伊藤内閣の海相兼農商相、廿年山県内閣、つづで松方内閣に内相、露太子遭難に引責、枢密顧問官となり、辞して廿五年六月品川と共に国民協会を起し保守政党を鼓吹、つづで海相・内相に厚任、廿三年山県内閣更解後、元帥に任じ軍政に参ず、大勲位に叙せらる。

税所敦子 76才（文政八―明治三三・六・四）1825―1900

薩藩士税所篤之の妻、廿八才夫に死別、藩主斉彬に招かれ世子の傅となる。明治八年宮中出仕、権掌侍となり、爾後皇后・皇太后両陛下御詠の御筆の栄を擔ふ。和歌をよくし、家集『御垣の下草』あり。仏法の修行深く慈喜を好む。

斎藤竹堂 38才（文化十二―嘉永五）1815―1852

馨、順治、儒者、仙台の人、江戸に出で増島蘭園に学び、つづで昌平黌に入る。のち西国を巡遊、江戸に帰り下谷に住して教授す、擢んでられて藩の儒員たらんとする際病没す。藩祖実録・盡忠録・竹堂文集などの著あり。

斎藤監物 39才（文政五―万延元・三・九）1822―1860

慷慨家、一徳、号文里、文郷、常陸那珂郡静神社の祠官、天保末斉昭の譴せらるゝや江戸に出で老中阿部伊勢守に上書して大に君寃を辯じ捕へられて水戸に禁錮、のち赦され四方の名士と交り、万延元年櫻田要撃の挙に加はり、六日にして傷のために死す、時に三十九才。

斎藤拙堂 69才
（寛政九―慶応元・七・一五）
1797 1865

正謙、德藏、津藩士、昌平黌に入り古賀精里に就き、古文の大家となる。文政三年世子藩黌有造館に擢んでられ、ついで講官となる。藤堂高猷の嗣ぐに及び、上士に進み侍讀を兼ね、左右に侍すること十余年。江戸に扈從し、名士と交り聲名愈高し。のち藩黌如見堂となり、資治通鑑を寫、また俊秀を選び洋學兵法砲術を學ばしめ、率先して種痘館を設く。安政二年六月家定に謁見を命ぜられ、幕府擢んで、儒官たらしめんとせしも辞す。六年致仕、拙堂と号す。著書多し。

斎藤鑾江 64才
（天明五―嘉永元）
1785 1848

象、儒者、阿波の人。

斎藤實（マコト）
（安政五・一〇―昭和一・二・二六）
1858 1936

酒井抱一 68才
（宝暦一一―文政一一・一一・二九）
1761 1828

忠因、酒井雅楽頭宗雅の弟。天資多病、出家して西本願寺文如上人の養子となり文詮暉真と名ゝ乗り、等覚院権大僧都に任ぜらる。のち東都根岸に隠居、営村と号す。画を好み、はじめ永徳に、のち土京後土佐光貞に學び、また圓山應瑞の門に入り応擧風を學ぶ。京都に帰りてのち更に一軒して光琳風を能くし、文晁と併稱さる。書体は董堂敬義及び其角の風を傳ふ。

坂井虎山 53才
（寛政一〇―嘉永三）
1798 1850

華、百太郎、安芸の人。賴春水に學び、のち廣島藩の儒官となる。

嵯峨實愛（サネナル） 94才
（文化一二―明治四二・一〇・二〇）
1816 1909

正親町三条実義の子。嘉永元年參議中將に任じ、安政二年权大納言、維新の際王政復古に力を盡し、明治二年刑部卿に任じ、三年大納言となる。十六年滋宮御用掛十八年明宮御用掛を命ぜらる。菊花大綬章を賜はる。

榊原月堂 61才
（寛政一〇―安政五・九・二九）
1798 1858

書家。家代々駿州久能に居り祭祀を掌る。書を能くし、殊に草法に妙。

佐久間象山 54才
（文化八―元治元・七・十一）
1811 1864

啓、大星、子明、修理、信州松代に生れ藩主真田幸貫に仕へ近侍となる。幼にして学を好み佐藤一斎に就き、天保十年江戸に出り、外警の事起るや主として泰西の学芸を研究、兵制造艦、銃砲の術を講ず、藩主の幕閣に列し海防を説くやこれを輔翼、のち子弟を教授、傍ら天下志士と往復す、安政元年門人吉田松陰の米艦潜入の罪に連坐、獄に繋がる、幽居中ふたゝび門生を訓戒す、文久三年赦され、翌元治元年三月京都に至り、将軍家茂に召されて幕議に参し、中川宮、山階二親王の顧問に與り、また松平容保、島津久光のために時務を画策、攘夷実行の防遏につとめ、一日山階宮よりの帰途、木屋町を過ぐる時、刺客に襲はれ斃る。

櫻眞金 48才
（文化九―安政六・七・六）
1812 1859

勤王家、常陸真壁の人、本姓―松崎任蔵、藤田彪に従学し最も経済に長じ、また皇室の式微を憂ひ、水藩の内争に乗じて京師に入り大いに策を施せしも、浪華に至って病歿、江戸に在りし時尾藤水竹、森大雅、関藤々陰等と交を結び相会して親交あり、

櫻東雄 50才
（文化八―萬延元・六・二七）
1811 1860

鞍負、儒者、常陸新治郡の人、幼時佛門に入り（法名良哉）年廿五にして真鶴村善応寺の住職となる、勤王の志深く藤田東湖等の志士と往復あり、天保十三年佛門を去り潔斎して鹿島神社に王政復古を祈り、のち京師に至り神祇伯資訓王に皇典を講読し神祇道学師を拝命、また妙法院宮に侍読す、櫻田の変後、高橋多一郎父子の大坂に来りしを庇護し、捕られて江戸の獄に移され、絶食して死す、

坂谷朗廬 60才
（寛政五―明治一四・一・一五）
1822 1881

備中の人、文政年間父に従って大坂に寓し、興野十山、大塩中斎に学び、のち江戸に出て侗庵に学ぶ、帰郷して興譲館に主となり門弟に教授、明治八辰秋広島侯の賓師となる、のち朝廷より徴されて東京に至り諸省に仕ふ、老病の故に致仕し、春崖学舎を築き、その成るに前後して死す、

佐々宗淳 59才
（寛永八―元禄十二・四・三）
1644 1699

助三郎、号十竹、水戸藩の儒者、弱冠にして妙心寺の僧たりしも、のち佛門を辞して江戸に来り、水戸義公の史館を開き文学の士を招くに遇ひ、その近侍となる、全国に古記を渉猟、元禄元年七月彰考館編輯の總裁となる、南行雑録、西行雑録、遁軒小録、十竹斎文集詩稿、などの著あり、

佐々友房 53才
（安政元―明治三九・九・二八）
1854 1906

旧熊本藩士、西南役に賊軍の中隊長たり、十年懲役の重刑を受く、赦されて後、第一回議会以後常に保守派議員として活躍、熊本済々黌の設立者、

佐々政一 46才
（明治五・五・二―大正六・十・二五）
1872 1917

醒雪、京都の人、明治廿九年東大国文科卒業、二高、山口高教授を歴て上京後高師、東大に教鞭を取る、四五年文博、俳諧、小唄、浄瑠璃に通じ、教育界にも功労多し、醒雪遺稿、その他著書多し、

佐々木中沢 弘化三・四・一―
（　　）

知芳、仲蘭、号蘭渦、陸中の人、医学を一関藩侍医建部清菴に学び、のち大槻磐水に従って蘭医学を受け、擢でられて一関藩医員となる、つゞで本藩仙台医学校に助教たり、解体存真図版、増譯八剌精要の著あり、兼ねて経史に通じ詩文書を能くす、

佐々木高行 81才
（天保元・十二・十二―明治四三・三・二）
1830 1910

三四郎、土佐の人、勤王を唱へ、将軍慶喜への大政奉還の建議を坂本竜馬・小松帯刀等と共に遂げ、明治四年司法大輔に任じ岩倉大使に随行して欧米巡遊、十年西南の役、土佐不平の徒の鎮定に功あり、十七年伯爵、廿二年枢密顧問官、明宮・常宮・周宮養育主任を命ぜられ、廿九年菊花大綬章を、四十二年侯爵を授けらる。

佐々木信綱
（明治五・六・三―）

篠本竹堂（サヽモト） 67才
（寛保三―文化六・九・五）
1743 1809

廉、久兵衛、江戸の儒者、家代々幕府に奉仕、井上金峨に学び文章を能くし、また書法に通ず、東遊紀述、天明間記ふどの著あり。

佐藤一斎 88才
（宝暦元―嘉永九・二四）
1772 1859

坦、捨蔵、美濃岩村藩主の世臣、江戸藩邸に生れ、年十九側務となり、程朱学を講究につとめ、大坂に中井父子を訪ひ、帰りて林述斎昌平黌を督するに及び、入りて塾長となる、天保十二年挙げられて幕府儒員となる、門弟三千余人といふ、著書に周易欄外書、大学摘說、白鹿洞掲示示問、愛日楼文詩ふど数十百巻あり。

佐藤六石
（―昭和二四）

明治時代の詩人、臨鴎吟社の主事たり。

佐藤民之助

国学舎、方定、号神符磨、岩代飯坂の人にして本居春庭の門人、皇国医道を以て水戸藩に仕ふ、奇魂八葉新論の著あり。

佐野竹之介 22才
（天保一―慶応元・三・
1839 1860）

光明、水戸藩士、櫻田刺客の一人、一擊後同志三名と共に老中脇坂氏の邸に詣り自首、蹶起の趣意を上書す、のち斬に処せらる。

澤近嶺 50才
（寛政元―天保九・八・三）
1789 1838

歌人、号月舎、梧桐庵、下総の人、二十才、村田春海の門に入りて歌文を学び、小山田與清・清水浜臣と切磋して三傑と稱せらる、雜記、梧桐庵歌集ふどの著あり。

澤宣嘉 39才
（天保六―明治六・九・二七）
1835 1873

主水正、姉小路公遂の三子にして沢氏を嗣ぐ、幼より三条実美と親しく、尊攘を唱ひ、文久三年八月朝議一変、参朝を停められ、六卿と共に三田尻に走る、十月脱して平野国臣等三十余人と但馬生野に挙兵せんとして成らず、遁れて長州に還る、慶応二年赦されて帰京、明治元年参與に任じ、奥羽出征に功あり、二年九月より四年七月まで外務卿、六年二月駐露公使に任ぜられ赴かざるに病没す。

澤田東江 65才
（享保一七―寛政八・六・一五）
1732 1796

書家。文藏。江戸人。林鳳岡の門に程朱の学を修め、性理の説を研究。のち又漢魏の古法を攻究。書の外に画及び篆刻を能くす。

山東京傳 56才
（宝暦十二・八―文化十二・九・七）
1761 1816

戯作者。岩瀬氏。傳藏。政演。赤本・黄表紙を著はし、寛政年間幕禁を犯して罪せらるゝ。以後勸善懲悪本に勝ず。馬琴と並稱せられ、実語教・雅講釈・近世奇跡考・鬼園情史などをはじめ著書多し。

山東京山 90才
（明和六―安政五・九・二四）
1769 1858

京傳の弟。百樹。号鉄筆堂。戯作者。稗史を著し又狂歌をよくす。はじめ筑前侯に仕（のち辞して兄の業を嗣ぐ。蜘蛛の糸巻、その他戯作の著あり。のち剃髪して涼仙と号す。

三条西季知
（明治廿三・八・二四）
1890

正親町三条実継の子。国学に通じ和歌を能くす。幕末三条実美等と尊攘を唱（幕府の忌む所となり参朝を停められ、難を避けて西に走り（七卿落）太宰府に居ること五年。慶応末京師に帰り、歌道を以て天皇に侍し、寵遇を厚うし廟堂間祗候となる。

三条実美 55才
（天保八・二・八―明治四・二・九）
1837 1891

実萬の子。夙に攘夷を唱（文久三年朝議の一変に遇って六卿と西走。慶応三年十月赦されて京都に帰り、議定となり、明治元年正月副總裁・議定職。五月右大臣に任ぜらる。三年七月太政大臣に陞り、賞勲局及修史館總裁を兼ね。十五年四月大勲位。十七年七月公爵。十八年内大臣。廿二年十月假に總理大臣を兼ぬ。薨ずるや国葬を以て遇せらる。

三条実萬 58才
（寛和二・二・五―安政六・一〇・六）
1802 1859

実美の父。中宮大夫公修の子。光格・仁孝・孝明の三朝に仕して内大臣に至る。晩年幕府の譴を受け、洛南に閑居。安政六年五月落飾して潛堂と号し洛東一乗寺に移る。薨後文久二年七月右大臣を贈られ、明治二年十二月忠成公と追諡。十八年十月別格官幣社に列せられ梨本神社と号す。

三遊亭圓朝 62才
（天保一〇―明治三三・八・二一）
1839 1900

落語家。通称出淵次郎吉。桐家円太郎の子。七才にして小圓太と稱して高座に上り、のち芝居噺を経て、自作の落語（牡丹燈籠・累ケ淵など）に当る。書画歌俳に通ず。明治廿五年病気隠退。

佐々木文山 77才
（萬治二―享保二〇・五・七）
1659 1735

書家。臥龍。百助。高松侯に仕（のち兄玄龍と同じく台命を蒙り朝鮮国の答書を作る。書体一家をなして名声高し。

榊原鍵吉 65才
（天保元十一―明治二十九・十）
1830 1894

剣客 徳川氏の世臣 十三才男谷信友の門に入り直心影流の剣法を学ぶ 安政年間幕府の講武所を開くや師範役を命ぜらる 維新後 日本固有の剣法の衰頽を慮り 六年擊剣会を設け 爾後大いに剣術を奨励す

シ

士朗 71才
（寛保二―文化九・五・一六）
1742 1812

井上士朗 尾張の医 産科を主とし また俳諧を嗜み 龍門暁臺の門に入りてその蘊奥に達し 枇杷園また 梦羽と稱す また 範古を師として墨竹を能くす

塩谷貞敏

塩谷宕陰 59才
（文化八―慶応三・八・二八）
1809 1867

安弘 甲蔵 儒者 江戸に生る 十六才にして昌平黌に入り 廿一にして関西に厂遊 後帷を下して教授 母を養う 松崎慊堂 その窮困を憐み 老中浜松侯に説き擢でゝ文学に任ず 乃ち藩命により本朝事蹟を編輯し 丙丁烱戒録といふ さほ家譜の重修に任じ つゝで幕府の儒官となりて烈祖成績の記述に従ふ 徳川家光の代に及び病に罹りて歿す

穴戸璣
（文政十二・三―明治三十・一〇）
1829 1901

山口藩士 幕府の長州再征前後 藩命を帯びて諸藩に使す 明治十年 元老院議官 十二年清國駐劄公使 十七年 子爵 のち貴院勅選議員 錦鶏間祗候となる

重野安繹（ヤスツグ） 84才
（文政一〇・一〇―明治四三・一二・一六）1827 1910

厚之丞、号成斎。旧薩摩藩士。藩学造士館に学び、更に江戸昌平黌に遊びて帰藩後造士館教授となる。文久三年六月来薩の英艦との談判（生麦事件の後始末）に功あり。維新後文部省に出仕。十年修史館編修官となり古文書採訪をはじむ。廿六年四月辞し、のち元老院議官を以て文科大学教授を兼ね、国史科を大学に置き、史学会を設けてその会長たり。これより先き廿三年文学博士を授けられ、廿三年貴院議員たり。

志筑忠次郎
品川彌二郎 58才
（天保四閏九―明廿三・二・二八）1843 1900

忠雄、号柳圃（はじめ中野氏）。壱岐長崎の和蘭通詞。夙に出島蘭館の外人及び本木蘭皐に従ひ洋学を修め、更にニュートンの天文学を攻究し、動学物理学に力を潜む。寛政十年暦象新書を編述、これ本邦動学物理を解し星系説を唱道せし嚆矢なり。その他蘭語文法の釈明に貢献多し。

長州萩の人。松下村塾に学び、松陰の寃を訴へて幽閉に遇ひ、松陰の刑せらるゝや十八才にして江戸に上り、久坂高杉等と共に尊攘の大義を高唱し、のち薩長聯合に奔走す。戊辰の役

篠崎小竹 71才
（天明元―嘉永四・五・八）1781 1851

東北に転戦。三年普仏戦争視察のため渡欧。帰朝後農商務大輔、十八年駐独公使。廿四年松方内閣の内相、選挙干渉の非難に遇ひ翌年辞職。枢密顧問官に転ず。民党に対抗して国民協会を立て、その首領たり。傍ら青年教育・地方文化の進展に資する所少からず。

篠崎竹陰
宝政五・八 1858

弼、長左衛門。儒者。豊後に生れ、父吉翁の医を以て大坂に寓するに従遊。つひに篠崎三島の養子となる。（本姓加藤）初め家学を修め、長して東西に遍遊、古賀精里に学びて帰り、養父に代りて教授を業とす。一生仕を求めず、諸侯大夫の遇るもつ礼を厚くして師とす。

信夫粲 76才
（天保六―明治四三・十二・十二）1835 1910

巽、長平。江戸の人。本姓加藤。はじめ古賀侗菴に学び、のち篠崎小竹に従ひ、つひにその養子となる。

恕軒。儒者。鳥取藩士。江戸藩邸に生れ、海保漁村・芳野金陵・大槻磐溪に就き経史を講究す。明治初年本所に塾を開いて教授、大学に徴されて教諭となる。数年にして辞して三重県中学に転じ、のち和歌山に聘せられ、三年にして東京に帰る。恕軒文鈔、同詩鈔、赤穂誠忠録などの著あり。

柴四朗 71才
（嘉永五十二―大正十一・九・二五）
1852 1922

会津の人。大学南校に英学を修め渡米してフィラデルフィア大学に経済学を専攻して帰朝。明治四年以後衆院議員。その間世一年農商務次官に任ず。佳人の奇遇、埃及史などの著あり。陸軍大将柴五郎の兄。

柴秋村 42才
（天保元―明治四）
1830 1871

六郎。徳島の人。大沼枕山、羽倉簡堂に学び更に大坂に赴き廣瀬旭荘に学ぶ。播州に洋書を学び、又九州に遊び文久元年徳島侯の儒員に抜擢さる。明治元年侯に陪して東京に来る。のち淡路州本の藩内殺傷事件に連坐禁錮せられ遂に病を得て歿す。

柴野栗山 74才
（享保九―文化四十二・一）
1734 1807

寛政三博士の一人。邦彦、彦輔。高松の人。幼時後藤芝山に従い長じて東遊し林門に学ぶ。業成り徳島藩蜂須賀侯に仕へ、京都に住し宋学を唱導。天明八年五十三才幕府に召され昌平黌教官となる。林祭酒、岡田寒泉と共に学政一新を図り、程朱の学以外を異学として禁じ、学者の反対に遇ひしも屈せず。のち布衣班に進み将軍世子の侍讃となり、老中松平定信の信任厚し。著書に國鑑、聖賢図像考、資治概言、栗山文集などあり。

柴原順治 和
（天保三―明治三六・十二・二九）
1832 1905

旧龍野藩士。弱冠江戸に出で磐溪、息軒に学び、又京坂に遊び梁川星巌、落合雙石、後藤松陰等に師事して経史文章を学ぶ。尊攘の志を抱き志士と結んで王事に勤労。明治二年召されて侍詔院に出仕。以後轉々として縣令。のちには知事たり。廿七年以降貴族院議員並に錦鶏間祗候となる。

島田蕃根 80才
（文政十一・十一・八―明治四四・九・三）
1828 1907

漢学者。旧徳山藩士。夙く修験道に入り、のち江州三井寺に往き仏教を学び、のち儒及び神道を修め、勤王の説を唱へて王事に盡瘁。王政復古後藩の大参事に任ぜられ、廢藩後東京に出で教部省に出仕。十三年辞官。神道及び文学界のために盡し、日本一切経の縮刷宋元明麗の藏経の対校に従ふ。のち子弟の養成を専らにす。

島田重禮 61才
（天保九―明治廿一・八・二七）
1838 1898

筆邦。武蔵の人。はじめ海保漁村、安積艮斎に学び、のち昌平黌に入り塩谷宕陰の指導を受け、助教となる。下谷に雙桂精舎を開き門弟多し。明治十四年東京大学教授となり、廿一年文学博士を授けられ、廿五年東京学士会院会員に選ばる。

島田三郎 72才
（嘉永五・十―大正十二・一・四）

政治家。静岡の人。昌平黌に漢学を修め、のち大学南校に英学を学ぶ。明治七年横浜毎日新聞に主筆となり、田口卯吉等と嚶鳴社を興して時事を痛論。一時元老院及び文部省に書記会たりしも辞し、大隈の改進党創立に参與。廿三年以後衆院議員、大正四年議長となる。晩年普選法の通過に盡瘁し、傍ら早大に明治政史を講ず。著書に南回始末、政教概論、社会主義概評、日本改造論などあり。基督教界及び労働運動にも貢献少からず。高潔の雄弁家として知らる。

清水濱臣　49才
（宝永五―文政七・八・一七）
1776　1824

江戸の國学者。云長。号泊泊舎。月斎。医を業とし、村田春海に従って古学を学び、のち一家をなす。関宿侯はじめ権門貴族の従ふ者衆し。普ねく縣居門の遺稿を索め、校正して縣門遺稿と題し公刊す。杉田日記。後撰和歌集補註。菅根集。泊泊筆話などの著あり。

清水謙光

栄太郎。幕臣にして海野幸典門下の歌人。

清水光房

江戸の人。通稱眞八。清水浜臣の子にして和学に名あり。

清水清太郎　22才
（天保四―元治元・十二・二五）
1843　1864

長州藩世臣。親知。号葭堂。弱冠藩主に扈従して江戸邸に駐り、大橋訥庵の塾に学ぶ。文久三年藩主毛利元徳に従ひ京師に住り、学習院に出入し、尊攘の議に與り、諸藩有志と交はる。元治元年六月藩人大挙国冤を訴ふるの時、周布政之助と俱に間に処して鎖さる能はず、引責、禁固立野に屏居罪を待つ。党議により職を褫ひ、萩に移され、十二月廿五日に至り自裁を命ぜらる。

下田歌子　81才
（安政二―昭和十一・一〇）
1856　1936

諸葛琴臺　63才
（寛延元―文化七）
1748　1810

義。次郎太夫。下野の人。儒者。大典顕常。禅僧。近江の人。京師相国寺に住す。博く佛乗に渉り、兼ねて儒を宇野明霞に学んで経史に精通。詩文を能くす。小雲樓論語鈔說。四書越俎。皇朝事苑。人丸事跡考。など著書多し。

蕉中　83才
（享和元・三・八）
1719　1801

勤王僧。月照の弟。京都清水寺住職。はじめ高野山に学び、安政五年兄の辞職後をうけて成就院に入る。五年戊午尊攘の議起るや、攘夷を祈り、ために幕吏に捕へられ、江戸の獄に送られ、翌年獄中に病死す。

信海　39才
（文政四―安政六・三・一八）
1821　1859

太田南畝。号四方赤良。又四方山人。杏花園。幕府の士にして狂歌をよくす。著作に明詩擅材。一話一言。萬載狂歌集などあり。

蜀山人　95才
（寛延二―文政六・四・六）
1749　1823

島地默雷 74才
（天保九・二・五―明治四四・六・三）
1838 1911

周防国和田村専照寺住職の子として生る。号益溪。雷田、維新の際、大洲鉄然と共に本願寺改革を企て、明治三年東京に来り、廃仏毀釈の運に抗して、寺寮院及び教部省の設置を建白、政府の容る、所となる。明治五年より六年にかけて外遊、帰朝後仏教の蔑視を黙止しがたく、当局に抗議して仏教の独立を全うす。爾後宗教界、女子教育界に活躍、危篤に陥るや本願寺より准連枝を以て遇せらる。

篠原國幹 42才
（天保七―明治一〇・三・四）
1836 1877

冬二郎、鹿児島の人、造士館に国漢を学び、戊辰の役、伏見、鳥羽、奥羽各地に転戰して功あり、明治三年鹿児島常備隊大隊長となり、ついで一大隊を率ゐて東上、陸軍大佐に任し参謀局近衛局出仕を歴て少将に進む。六年征韓論の破綻により、西郷に従って帰国、桐野、村田の同志と私学校を監督し、青年子弟の養成に任ずるの傍ら、南望植林の事業を策す。十年の役、一番大隊長として肥後に向ひ、転じて高瀬に戰ひ、東軍を苦しめしも、彈に中りて斃る。

島村鉈月 48才
（明治四―大正七・一・五）
1871 1918

島義勇 53才
（文政五―明治七・四・一三）
1822 1874

園右衛門、佐賀の士臣、江戸に出で佐藤一斎の門に入り、つゞいで水戸に至り藤田東湖に学ぶ。安政年間堀織部正に従って蝦夷樺太を探検、戊辰の役東北出征に功あり、維新後会計官に出仕、三年秋田県令となる。五年六月致仕、帰国後憂国党に推され、七年江藤新平と共に挙兵、敗れて斬に処せらる。

ス

周布政之助 42才
（文政六―元治元・九・二六）
1823 1864

兼翼、山口藩士、年廿六、出で、国政に参与す。安政五年九月禁中に召され、正親町三条実愛より時務の諮詢を受く。文久二年世子に従ひ江戸に留る。山内容堂を誹謗せし果議のため職を褫はれ、麻田公輔と改名して京坂間に寓す。間もなく藩に復し朝日貫徹の議に與る。藩論一致に盡瘁中、俗論党のために阻まれ、元治元年秋征長の師の迫るや罪を一身に負ひ国難に代らんとし、数日食を絶ち一通の文を遺して自刃す。

末廣重恭 49才
（嘉永元―明治二九・二・五）
1848 1896

ジャーナリスト、明治初年曙新聞、朝野新聞に活躍、東京公論を起せしことあり、議会創設以後衆議院議員たり。

菅茶山 80才
（寛延元―文政一〇・八・十三）
1748 1827

晋帥、禮卿、太仲、備後の人、少時備中の西山拙斎と共に京師に入り那波魯堂に学ぶ。帰郷して教授、享和元年福山侯の儒員となる。安芸の頼春水及び最も親しく、山陽し来り学ぶ。最も詩に長じ、著書に黄葉夕陽村舍詩、遊芸日記、福山風俗、その他あり。

菅井梅関 61才
（天明四―天保五・正・一三）
1784 1834

岳輔、号東斎、仙台の人、画人、はじめ根本常南の指導を受け、のち江戸に出で文晁に学びしも、去りて長崎に清人江稼圃を訪ねて師事、長崎に住ること十余年、還りて浪華に寓す。山水及び梅の画を能くす。

菅政友

国学者。常陸の人。亀川三中に学ぶ。

菅沼斐雄 49才
（天明六―天保五・八・三五）
1786 1834

賴母。号蘆渚。桔梗園。香川景樹門下の歌人。備中吉浜に生れ、江戸下谷に住す。袖くらべ（日記）、斐雄家集、ほどの著あり。

杉孫七郎 86才
（天保六・正―大正九・五・三）
1835 1920

萩藩士の子。文久三年幕府の公使竹下正野守、松平石見守等に随ひ米佛露蘭英諸国を巡回、三年帰朝。元治元年藩の参謀として幕府征長軍と戦ふ。明治元年島羽伏見の役にまた参謀たり。のち諸官を経て皇太后宮大夫に任じ内蔵頭を兼ぬ。廿年子爵。のち辞官。更に東宮職御用掛、図書頭、卅九年枢密顧問官兼議定官。詩書に長ず。（号聽雨）

杉田玄白 85才
（享保六―文化四・四・一七）
1733 1817

元伯。号鶴斎。蘭医。甫仙（江戸在勤小浜藩医員）の子。幼時幕府医官西玄哲に学び、傍ら経籍を研究す。晩年外科を専攻し、刻苦して蘭語を修め、前野良沢等と協力して解体新書、瘍科大成ほどの医書を訳し、幕府、列藩、或は公卿、有志に贈りて普及を図る。内弟数百に達し、前掲の外、和蘭医事問答、形影夜話ほど有益の著述多し。

杉田玄端 72才
（文政元・五―明治廿二・一〇・一〇）
1818 1889

江戸に生れ、十七才にして杉田立卿（玄白の庶子）に入門、蘭学医術を修め、天保九年その猶子となる。安政五年蕃所調所教授手伝を命ぜられ、文久三年開成所教授職、慶応元年翻訳御用頭取、維新後駿府陸軍学校教授方、沼津に病院を開き、つゐで八年東京に出張所を設け、更に十年十月共立病院を有楽町にはじむ。十三年学士会院会員となる。

杉本順

杉山千太郎 45才
（享和元―弘化二）
1801 1845

忠亮。子元。号復堂。致遠斎。水戸の儒者。はじめ古賀精里、のち藤田幽谷に師事。文政四年彰考館員に挙げられ修史に従ふ。天保十一年弘道館助教となり、又安子（慶喜）の保傅たり。十四年彰考館總裁を兼ぬ。著生居平伝、国語稿ほどの著あり。

鱸松塘 76才
（文政六・十二―明治廿一・十二・三〇）
1823 1898

（本姓鈴木）元邦。号東洋。漢詩人。安房の人。天保十年十七才にして梁川星巌の門弟となり、大沼枕山、小野湖山と共に門下の三高足たり。明治元年以後、浅草に七曲吟社を開いて教授、門弟数百人に及ぶ。松塘小稿、松塘詩抄、超海集、芳雲游草ほどの著あり。

鈴木重嶺

明治三・十一・二八

大之進　伊賀の人　徳川氏の臣　村山素行に就て和歌を学び　のち伊庭秀賢に従ひ　勘定吟味役並旗本奉行等を経て佐藤奉行となり　従五位下兵庫頭に任ず　明治初年浜松県参事より　六年相川県権知事となる

鈴木力

天眼　新聞記者　二本松の人

末松謙澄

安政二―大正九・一〇・六　66才　1855　1920

福岡の人　村上佛山に漢学及び詩を学び　明治四年上京して近藤真琴の塾に入り英学を修む　剣橋大学に留学　帰朝後文部省・内務省に出仕　廿一年文博　伊藤内閣の農商務大臣となる　廿三年衆院議員　廿六年法制局長官　廿八年男爵　世年遞相　世四年宮内省御用掛となり韓国皇儲の傅たり　日露戦中英国駐在官　卅九年子爵　枢密顧問官　大正七年法博となる　著書　四維馬法典解説その他あり　詩をよくし青萍と号す

セ

是眞

85才　文化四・三・七―明治三〇・七・一三　1807　1891

柴田是眞　江戸の人　画家にして蒔絵工　坂内寛哉に蒔絵を　鈴木南嶺に四條派の画を学ぶ　文政十二年京都に赴き　岡本豊彦　穂井田忠友に入門　また景樹を訪ひ　山陽の門に寓す　江戸に帰りて後画業大いに進み　名声を博す　また俳道を嗜む

成拙

関源内 69才
（元禄一〇―明和二・十二・二九 1697―1765）

思案、号鳳岡、江戸の書家、学を太宰春台に受け、書を細井広澤に学び、最も草書に巧みにして草聖と稱せらる、門人五千余人、土浦侯に仕ふ。

関義臣 80才
（天保一〇―大正七・三・三一 1839―1918）

司法官、明治元年大阪府権判事となり、以来宮城控訴院検事長、大審院検事に任ず、徳島・山形両県知事を経て貴院勅選議員となる、廿三年男爵を授けられ錦鶏間祗候仰付けらる。

関根正直 73才
（万延元・三・二―昭七・五・二六 1860―1932）

東京の人、大学に国学・考証故実を学び、華族女学校助教、学習院教授を歴て女高師教授たり、明治四十二年文博、大正三年十月より宮内省御用掛、昭和三年帝国学士院会員となる、平安文学及び近松に関する著述多し。

雪生

雪中庵

関藤藤陰 70才
（文政一―明治九・十二・二九 1809―1876）

成章、備後福山侯の儒官、頼山陽に学び、幕末藩主阿部正弘を輔けて功あり、のち執政に任ず、廢藩後、東京に出づ。

千家尊福 74才
（弘化六―大正七・一・一 1845―1918）

出雲大社第八十五世国造、国造廃止後、明治五年正月改めて大宮司に任じ、十五年一月辞任後、大教正に補し神道大社教管長となる、のち男爵、元老院議官、廿三年貴院議員、埼玉・静岡・東京の知事に歴任し後、四十二年西園寺内閣に後相たり、国学・和歌をよくす。

川柳（五世） 74才
（天明五・正―安政五・八・二六 1785―1858）

水谷緑亭、狂句師、江戸日本橋に生る、文化の初め柄井川柳第五世に入門、のち四世川柳人見氏に学び、五十才にして川柳第五世を継承す、狂句百味箪笥、遊仙窟春雨草紙などの著あり、また歌道に通じ井上文雄・加藤千浪等と交はり、歌書小傳を特百歌仙などを著はす。

ソ

宗珀

曽我祐準（ケイジュン）
天保十四―十二

元柳河藩士。夙に兵学を修め、明治二年函館鎮撫に功あり。ついで陸軍に入り、十五年中将に進む。東宮大夫、宮中顧問官等に歴任。十七年子爵を授けらる。大正十三年一月隠居。

宗演 69才
（寛政―大正八・十一・二）
1859 1919

禅僧。円覚寺管長。若狭の人。妙心の越溪、円覚の洪川、相国の独園、天龍の滴水などにつき、のち福沢諭吉に西洋哲理を学ぶ。廿五六の若冠にして管長に選ばる。のち退いて米国の萬国宗教会議に赴く。朝鮮・支那を巡錫、帰朝後再び管長となる。自適して浩歌という。

巣兆
（文化一〇・十一・十七）

建部巣兆。俳人。号菜翁。武州千住の人。（父は書家）はじめ文晁に学び、のち一変して蕪村風の俳画を能くし、毎画に必ず自作の発句を題せり。

蒼虬（キウ） 83才
（宝暦一〇―天保十三・三・十三）
1760 1842

俳人。加賀の人。通称成田時二。藩の上士たり。蘭更に従って俳諧を能くし、芭蕉の本旨を中興す。致仕後洛中に在り、天保五年内人抱儀に招かれ江戸に下る。京都にて歿す。

副島種臣 78才
（文政十・九・九―明治三八・一・三）
1828 1905

旧佐賀藩士。長じて藩校教授となり、長崎致遠館の監督となりて元ペッキに洋学を学ぶ。明治元年徴士参与職。三年十月岩倉大使渡米の後をうけ外務卿となる。六年征韓論起るや西郷・板垣と共に辞職。十七年七月伯爵。十九年二月宮中顧問官。廿一年四月枢密顧問官。廿四年四月同副議長となる。廿五年四月松方内閣に内務大臣たり。傍ら東邦協会を起して会頭となり、また詩書をよくす。

タ

熾仁親王 61才
（天保六・二・九―明治二八・一・二四）
1835 1895

有栖川宮。熾仁親王の長子。幕末幕府の忌む所となりしも、召されて朝政に参し、慶応三年国事掛となり総裁職に補せられ、二品に叙す。明治元年征東大都督として功あり。のち議長兼議定官となる。十年西南役に征討総督、十月陸軍大将に進む。十三年二月左大臣。十五年露帝即位式に参列。廿二年参謀総長。廿四年十二月東神宮祭主。日清の役広島大本営の帷幕に参する折柄、疾に罹り薨せらる。

威仁親王 52才
（文久三・五・十三―大正二・七・一〇）
1862 1913

有栖川宮。一品熾仁親王の第二子。明治七年十三才海軍兵学寮に入る。十一年兄熾仁親王の嗣子となり三品に叙す。十三年より四年間英国留学。廿一年欧洲軍事視察。廿七年戦役には大本営に参じまた艦長として功あり。三十年英皇帝即位六十年祝典。二十八年独皇太子婚儀に行啓。勅命により渡欧参列。海軍大将に進み元帥府に列せらる。

多田海庵 39才
（文政九―元治元・一・二八）
1826 1864

彌太郎。但馬出石藩士。壮時大坂に留学。藤沢東隠の門に入り塾長となる。のち江戸昌平黌に学び帰りて学寮長となる。つぐで長崎に砲術を学ぶ。文久三年秋姉小路三条西の諸卿に召され信頼を受く。七卿落に沢宣嘉に従ひ三田尻に奔る。のち生野の挙に与り敗軍潜伏中捕へられ本国送還の途中惨殺せらる。

太宰春臺 68才
（延宝八―延享四・五・晦）
1680 1747

純。彌左衛門。信州飯田の人。江戸に出で荻生徂徠に学び、その説を敷衍す。のち出石村侯世子の聘に応ず。古文孝経、経済録のほか論語古訓、周易反正、聖学問答など著述甚だ多し。

田代清秋

薩摩の人。香川景恒の学統を継ぎ、国学・和歌を能くす。明治初年歿。

田中河内介
（文政二・五・二―）

士徳。但馬の人。文久二・四・二三の寺田屋事件後薩州に護送され、その途中護衛の士に殺さる。年四十余。

田中不二麿 65才
（弘化二―明治四二・二・一）
1845 1909

旧尾州藩士。幕末勤王を唱へて国事に盡瘁。明治元年乙月徴士となり、四年十月文部大丞、つぐで大輔に至る。十三年司法卿。十七年特命全権公使として伊国駐劄。廿年五月子爵。六月伊国公使に転ず。廿三年六月枢密顧問官。廿四年司法大臣。廿九年十一月條約実施準備副委員長を仰付せらる。

田中光顯（ミツアキ）

（天保一四・閏九―）

田中頼庸 62才

（天保七―明治三〇・四・一〇）1836 1897

国学者。藤八、号雪岫。明治四年以来神祇省に出仕。十五年に至って神宮々司を辞し、神道神宮教管長に補せらる。校訂日本紀、賢所祭神考証、神宮祭神提要ほかの著あり。

田邊太一 85才

（天保二―大正四・九・一六）1831 1915

幕府旗本の士にして（号蓬舟）儒者。昌平黌にて中村敬宇と共に才名を記はれ、外国方として元治元年池田筑後守に随ひ英仏に赴く。維新後外務少丞となり、四年岩倉大使の外遊に随行、のち北京代理公使、帰朝後元老院議官、錦鶏間祗候。晩年維新史料編纂委員たり。

田能村竹田 59才

（安永五―天保五・八・二六）1776 1834

豊後の人。はじめ藩の儒員たり。東都に至り画家、行藏、君彝。学芸を修め傍ら文晁に画法を学ぶ。晩病患三十八にして致仕。爾後風流を愛しみ明清人の画風を研究、山水、人物、花鳥を通じて第一人者となる。屢〻京師に往来、山陽、小竹、篁園、雲華上人等と親交あり。

大含

画僧。号雲華。豊後の人。東本願寺の講師。好んで蘭竹を描く。

鷹司政熙 81才

（宝暦十二・四―天保十二・一・七）1761 1841

関白輔平の男。寛政元年五月内大臣、三年十月左大臣。七年十月関白に補し随身兵仗を賜ひ牛車を聴さる。文化十一年致仕、三宮に准ず。文政六年七月落飾、文華院入道と号す。

高崎五六

勤王家。猪太郎、博愛。鹿児島藩士。夙に勤王に奔走し四方の志士と交る。櫻田の変前関鉄之助と謀り直弼を討たんとせしことあり。藩命により帰京のち大久保利通に用ひられ東京府知事ほかをつとむ。

高崎正風

（天保七・七―明治四五・二）1836 1912

元鹿児島藩士。維新前藩主久光を佐けて国事に尽瘁し、戊辰役官軍参謀として功労少からず。明治後宮中に奉仕し枢密顧問官兼御歌所長たり。廿年に至り男爵を授けらる。

高島秋帆 69才
（寛政〇―慶応二・正・四）
1798 1866

四郎太夫、幸之長崎の町老、夙に泰西の文物技術を習練し、私財を抛ち洋船を造り西洋火技を演ず。諸藩よりの入門者多し。天保十三年十月、鳥居耀蔵の外国研究家弾圧に坐して入獄。嘉永六年米艦渡来に際し、赦されて江戸に至り防海の事務の諮問をうく。江川英龍等と軍事を規画し、防海の急務と兵備の拡張、通商事業の策を幕府に建言す。西洋火技の先駆者として諸侯士大夫の間に最も重んぜられ、講武所師範役より武具奉行に轉ず。

高島鞆之助 73才
（弘化元・十一―大正五・一・一〇）
1844 1916

旧薩摩藩士。文久二年藩主久光に従って入京、禁裡を守護す。戊辰の役に功あり、明治三年侍従に任ず。十年西南の役に従い陸軍少将に進み、十八年中将、四師団長、子爵を授けらる。廿四年陸軍大臣、のち枢密顧問官、台湾總督、拓殖務大臣を経て、再び陸軍大臣、枢密顧問官となる。

高杉晋作 29才
（天保〇―慶応三・四・一四）
1839 1867

東行。山口藩士。松下塾の逸材として知られ、文久三年廿三才召されて世子近侍となり江戸藩邸に参勤。昌平黌に入り大橋訥庵に就いて修学。帰国後長崎、上海に形勢視察のため派遣さる。のち藩命によって外艦を馬関に撃ち、奇兵隊を組織し總督たり。元治元年春藩議一変に方りさきの亡命の罪を問はれ野山獄に投ぜらる。十二月博多に遁れ月形等の尽力により望東尼の山荘に潜伏。馬関に還り遊撃隊を引率して俗論党と戦い、ついで征長幕軍と戦って功あり、二年六月幕軍再征に際しては戦線四十余里を統轄す。偶〻国喪により休戦中、陣中に病歿す。

高田早苗
（万延元・二―）

高野長英 47才
（文化元―嘉永三・一〇・一五）
1804 1850

讓、号瑞皐。陸前水沢の人。江戸に出で吉田長叔に学び、蘭書を讀み長崎に遊びてシーボルトに就き洋医を研究。また翻譯に従事す。渡辺崋山、小関三英と親交あり共に国民の警醒を期す。天保初年英艦渡来の説傳られ人心動揺の際、夢物語を著はして外国の事情を叙述す。外国研究家の弾圧起り、崋山先づ囚はれ、ついで三英自刃するや、幕吏に自首。在囚五年、火事にて放赦三日にあい、帰郷して母を省て罪を謝し、獄に還らず。伊藤隨渓と稱す。密に宇和島侯伊達宗城の知る所となり、聘せられて洋書兵学を講ず。のち江戸に帰り沢三伯と変稱し、青山に潜居中、捕吏の囲を受け捕手数人を殺傷の後自刃す。

高橋泥舟 69才
（天保六―明治三六・二・十三）
1835 1903

旧幕臣。精一。槍法を以て世に知られ、廿五才にして講武所師範役となり、従五位下朝散大夫伊勢守に任ぜらる。幕府の諸浪士を徴集して新徴組を組織するや、その長となり、大に將軍家茂の信任を得。維新の際は專ら恭順につとめ、遊撃、精鋭両隊を率ひて慶喜を護衛す。勝海舟、山岡鉄舟と共に三舟と稱せらる。

高橋太華
文久三―

明治時代の文士。二本松の人。東京に出で岡麓門、重野安繹に学ぶ。東洋散士（柴四朗）に知られ明治廿年雑誌「少年園」の編輯主任となり、少年子弟の啓蒙教育につくす。宮村露伴等と交り、根岸派の一人として目さる。三十年頃、友人石井研堂を助けて「小国民」編輯。世四五年より隠退。

高橋廣道
（文化三―明治元 1806―1868）63才

弥太郎。号狗々山人。貂鼠翁。尾州の人。戯作を業とし、柳亭種彦に戯作を学び、里川春村、鈴木朗に国学を学ぶ。

高橋多一郎
（文化十一―万延元・三・二三 1814―1860）47才

愛諸。敬卿。水戸藩士。安政元年八月、幕府有昭を水戸に移し、勅書返納を命ずるや、同志を糾合して対策を練る。萬延元年三月、家人に老親を託し、磯部三郎兵衛と変名し、本曽路を経て上京。三月櫻田門の変後、その里、幕として追跡を受け、大坂天王寺に自刃。年四十七。

高久隆古
（文化七―安政五・八・二六 1810―1858）49才

画家。奥州白河の人。はじめ佐田竹谷に画を学び、中年上京して渡辺清、谷田一蕙等に学び、鳥羽僧正の画風を慕ひ一風を成す。本姓川勝氏。高久靄崖の家を嗣ぎしも、のち故あって去り高氏を稱す。

高森有造
（弘化元―大正六・一〇・二五 1844―1917）71才

文人画家。敏。号碎巖。上總の人。服部蘭谷に漢学を学び、明治初年根岸に漢学塾を開き、三十才頃、山本琴谷について南画を学ぶ。

高山樗牛
（明治四・一〇―明治三五・十二・二四 1871―1902）32才

林次郎。山形県鶴岡の人。明治廿九年東大文科を卒し、帝国文学を発行、ついで教授となる。ニイチェ研究より日蓮を中心とする日本主義唱道にいたる。文明批評、美学既成などに論作多し。三十五年一月文学博士となる。

寶田通文
（文化四―明治三九・三・一 1807―1906）80才

京都の人。天保七年江戸に赴り輪王寺一品公紹親王の聘に応じ皇漢学及び和歌を講じ、傍ら生徒に教授。米艦来朝後、志士と交り奔走。教部省に徴されて、のち大教正となる。言語及び音韻の学に長じ、世の所謂国学者と見を異にし一家をなす。

瀧鶴臺
（寛永六―寛永二〇・正・二四 1629―1713）65才

長愷。彌八。長門の人。はじめ山縣周南に従って徂徠の説を受け、のち江戸に出で南部の門に入る。周南の歿後、藩の明倫館の祭酒に挙げらる。傍ら医事を好み山脇東洋、吉益東洞等と交り古医方を学ぶ。また汎く佛説に通じ、書を能くす。三乃逞、癸申問槍、鶴台遺稿などの著あり。

瀧澤馬琴 82才
（明和六―嘉永元・十一・六）
1767 1848

解、篁民、著作堂、江戸の人、はじめ医官山本宗英に医を学び宗伯と号し、また亀田鵬斎に儒を学びしも、何れも年途にして廃し、山東京伝に従ってつひに戯作者となる、前後廿八年（文化十年より天保十年まで）を費せし大作八犬伝の外、椿說弓張月、近世說美少年録、盡用而二分狂言、傾城水滸伝、近古物之本江戸作者部類など、讀本、黄表紙、合巻、隨筆など数百種あり、

澤庵 93才
（天正元―正保二・十二・十一）
1573 1645

宗彭、禪僧、はじめ浄土門に入り、のち大徳寺希先西堂に従って禪門に入る、世五才にして大徳寺第一座となる、寛永十五年幕府品川に東海寺を創するに迎へられて第一世となる、傍ら書画俳諧に名あり、茶道を小堀遠州に学ぶ、

武田耕雲斎 63才
（寛政三―慶応元・二・四）
1803 1865

正生、彦九郎、水戸藩士、元治元年伊賀守に任ず、弘化元年斉昭の雪冤に奔走せしため五年間幽閉、赦されて文久二年藩主慶篤に随ひ京、縉紳有志と結び尊攘の策を講ず、東下後元治元年藩内擾乱に際し、藩主目代松平頼徳の鎮撫に赴くに従ひ市川党及び幕兵と戰ひ、八月十日より七旬に亘る、闕下に狀を訴へんと西上の途上敦賀に拘せられ翌年二月斬に遇ふ、三月廿五日水戸に於て梟首、

武田彦右衛門 44才
（文政五―慶応元・二・四）
1822 1865

正勝、号子環、耕雲斎の長子、父に従ひ尊王攘夷を唱へて奔走、筑波山の義挙に加はり、西上の途金沢藩兵に捕へられ、慶応元年二月越前敦賀に斬らる、年四十四、

竹村茂雄
（明和六・二・六―弘化元・十二・十五）
1769 1844

平右衛門、寡穂同屋、伊豆の国学者、寛政七年鉛屋に入門、帰郷後駿河また江戸にゆき村田春海に歌文を学び、清水浜臣、狩谷棭斎、小山田與清等と親交あり、詞之園圃、詞の枝、そのふのぬきほ、など著あり、門人に江川英龍あり、

立原翠軒 80才
（延享元―文政六・三・四）
1744 1823

萬、甚五郎、水戸の儒臣、はじめ江戸に学び、二十才にして藩主治保の侍讀に擧げられ、また彰考館編輯となり、佛事志を編す、のち總裁たり、また政務に献替し、藩の警備に力を盡し、門人木村某等を蝦夷樺太探検に赴かしむ、

立原杏所 56才
（宝暦五―寛政十二・五・二〇）
1735 1840

水戸の画家、甚太郎、はじめ月僊に学び、のち文晁、応挙、また明清の遺蹟を究む、翠軒の子、

立原杜二郎 32才
（天保四―元治元 1833―1864）

瓊、勤王家、水戸藩士、元治元年水戸甲子の変に當り、一隊を率ゐて先鋒となり神勢館より出でゝ市川党の軍と戰ひ銃丸に中りて死す、年三十二

（井手）
橘曙覽 57才
（文化九―明治元・八・二八 1812―1868）

福井の歌人、少壯京都・江戸に遊び、国典を研究、宣長を慕つて万葉体を喜ぶ、弘化三年以後郷里に教授、忠君憂国の志深く、慶応元年二月藩主慶永の来訪を受く、三年藩主茂昭賓禮を以て之を禄す、著述に古今集垣間見、志濃夫舍集、囲爐裏譚などあり、

橘守部 69才
（天明元―嘉永二・三・二四 1781―1849）

国學者、北畠元輔（源助）と稱す、はじめ狂歌を詠み幸手駅に住し、のち江戸に出で深川本所に寓す、本居宣長の説を駁し造化主は産霊三神に非ずして素戔嗚尊なること、外宮の祭神は豊受姫神に非ずして国常立尊なること、などを主張す、稜威道別、稜威言別、神樂催馬楽入綾、難語考、三代集堅要など著述多し、

橘とせ子

守部の女、歌人、

橘道守

冬照（守部の養子）の子、国學に通じ和歌をよくす、

伊達千廣 75才
（文政二―明治一〇・五・一八 1803―1877）

和歌山藩士、本居大平門下の国學者、嘉永末年勤王の大義を唱へて九年間禁錮に遭ふ、その間歌文を嗜み佛典を攻究、文久三年六十才脱藩上京、王事に奔走、姉小路卿の知遇をうけ坂本竜馬等と往来、再度禁錮せらるゝも維新に際して解かれ以後東京深川に閑居す、大勢三轉考、餘身録、隨々筆などの著あり、

伊達宗城 76才
（寛政八―明治二五・十二 1818―1892）

幕末の伊豫宇和島藩主、弘化元年襲封、三年侍従に任ぜられ安政五年致仕、内勅により入京、文久三年天顔を拝し、元治元年左近衛権少將に任ぜらる、王政復古に際し議定を命ぜらる、明治二年九月民部兼大藏卿、四年四月欽差大臣として條約締結のため清国へ遣さる、十六年修史館副總裁、十九年廣沢間祗候を命ぜらる、

谷文晁 78才
（明和元―天保十二・十二・四 1764―1841）

画家、麓谷の子、果安田安家に仕へ江戸下谷に住す、はじめ加藤文麿に就きその後馬孟熙に清人の画風を学び、傍ら古土佐の妙趣、英一蝶の長所を窺ひ更に渡辺南岳よりも多くを受け、宋元の名蹟を慕ひ雪舟、探幽をも析衷す、一代の名匠たり、

谷干城 75才
（天保八・二―明治四四・五・十三）
1837 1911

旧土佐藩士。安政三年藩命にて江戸に出で安積艮斎・塩谷宕陰に学び翌年安井息軒の塾に入る。のち国事に奔走、慶応三年薩土連盟のことに尽力、戊辰役東北征討に功あり。十年西南役に鎮台司令長官として熊本城を死守して名をあげ、十二年陸軍中将、十七年学習院長、子爵を授けらる。十八年末農商務大臣、廿三年以後貴院議員。保守主義を唱へ、硬論家として知らる。

丹四郎。号塊斎。眞淵門下の国学者。

谷垣守 55才
（元禄十二―宝暦二・三・）
1698 1752

谷鉄臣 84才
（文政五―明治三八・一二・二六）
1822 1905

彦根の人。少壮江戸に到り林氏に入門。のち諸国遍歴、長州に蘭医術を学び帰郷後開業、傍ら文学を以て諸名流と交はる。幕末、藩の進退に関し勤王を固執して功あり。維新後二年九月まで彦根藩に出仕。朱子学を修め、七十才頃よりは陽明学に転じ西村茂樹の弘道会に関係す。四書今類心解・大学提綱などの著あり。

谷萬六

儒者。

玉木文之進

志士。正韞。長州の人（山口藩八組士）

チ

茅根伊豫介 36才
（文政七―安政六・八・二七）
1824 1859

勤王家。泰。号寒緑。水戸藩士。安政五年斉昭幽せらるゝに及び、これを慨し執政安島帶刀と議り、諸藩有志と協力して国事に尽瘁。六年四月幕府に召喚、鵜飼吉左衛門と共に幕府を誹謗し、また慶喜を将軍後嗣に擬して運動し、更に勅書降下に助力せし廉を以て訊問せられ、八月、斬に処せらる。（年三十六）

趙陶斎 74才
（宝暦十二―天保六・四・二〇）
1762 1835

餘録、息距備考、鞠訊筆記、詩文集などの遺著あり。

書家。名は養。字は仲頤。長崎の人。清人趙氏の胤。はじめ江戸に中頃大坂に、のち堺に寓す。号息心斎。

長三洲 63才
（天保四―明治二八・二・一三）
1833 1895

茨城。儒者また書家。はじめ広瀬淡窓の門に学び、のち旭荘の大坂の塾に塾長たり、尊攘の有志と交り、萬延元年長藩明倫館の講師となる。元治元年外艦来襲に来

る や奇兵隊に入りて奮戰、戊辰役越後奥羽の平定にかゝる。のち教部省に出仕、木戸孝允に重用せらる。孝允の薨後致仕。廿年東宮侍書に拝す。

直入 94才
（文化十一―明治四〇・一・二一）
1814 1907

画家。田能村直入。豊後の人。九才にして竹田の門に入り、つひに養子となる。廿六才にして浪華に入り、文を篠崎小竹に、武を大塩後素に学ぶ。明治初年京都に画学校を創設す。（後の京都私立美術学校）

陣夢命通高

明治の力士。初名久五郎

ツ

調所笑左衛門　幕末　薩藩の財政家

津田梅南　遵　明石の人　安政時代の人

塚田大峯（延享元―天保三・三・三）1744―1832　88才
　子門　儒者　信濃の人　父旭嶺（室鳩巣の門人）に学びて程朱の教を奉じ
のち独学　諸経の解を作る　紀尾両侯はじめ武門の子弟の来り学ぶ者多し　天明元年
尾張侯の侍讀となる　寛政年間　幕府異学の禁を厳にするや　その不可を論じて
上書する事再三　文化八年尾藩　明倫堂督学に擢んでらる

塚原渋柿園（嘉永元―大正六・七・五）1848―1917　70才
　靖　幕府の與力市之進の子　維新の際父脱走軍に従ひて下野雀宮に戦敗し駿府
に移住す　文才あり横浜毎日新聞　のち東京日々の編輯に従ひ　傍ら「史小説」を
執筆す

津坂拙脩　貫之進　伊勢の人　東陽の男　詩人（文政八年歿　78才）

綱島梁川（明治八―明治四〇・一〇・一四）1873―1907　35才
　栄一郎　岡山の人　十九才上京　坪内逍遙に寄食し早稲田専門学校に入り卒業後
雑誌「早稲田文学」日本教育月の編輯に従ひ　殆ど十年病臥　西洋倫理学史　快楽
派倫理学説　梁川文集　病間録　回光録などの著あり　晩年ルナンの耶蘇傳飜
訳に筆を染めしも　つひに果さず

椿椿山（寛政元―安政元・七・十三）1801―1854　54才
　画家　文晁と華山に学び　一世の名手たり

坪井信道（寛政七―嘉永元・十・八）1795―1848　54才
　蘭医　号　誠軒　はじめ尾張の秦滄浪及び江戸の倉成龍渚に漢籍を学び
のち江戸の宇田川玄真の塾に入り西洋医術を受け　深川に開業　貧者・文人よりは
謝金を受けず　天下に聞ゆ　長州侯の侍医となり　伊東玄朴・戸塚静海と共に
当時三大西洋家と稱せらる　精煉發蒙　醫則　萬病治準　跋氏神経熱論
遠西二十四方　詩文遺稿などの著多く　門人に緒方洪庵・杉田成卿等あり

坪内逍遥

（安政六・五―昭一〇・二・二八）
1859　1935

鶴峯戊申（シゲノブ）72才

（天明八―安政六・八・二四）
1811　1859

國学者。豊後臼杵の人。小山田與清に学び、また平田篤胤に従学す。博学にして和漢洋の学に通じ、殊に音韻、老荘、蘭学に精し。天保九年五十才水戸烈公の知遇を得、安政三年終に文学を以て藩士の列に加へらる。語学新書をはじめ神代文字考、詞鏡、蘭学捷径など著書多し。

テ

天璋院敬子 48才

（天保七・十一・一九―明治六・一・三）
1836　1883

将軍家定の夫人。島津斉彬の女。安政元年近衛忠熙の養女となり、三年家定に嫁す。五年八月将軍薨ずるや落飾して天璋院と称し、従三位に叙せらる。維新後は家達の奉養を受く。

寺内正毅 68才

（嘉永五―大正八・十一・三）
1852　1919

旧長州藩士。大村益次郎に認められて大阪兵学寮に入り、卒業後明治四年陸軍少尉となり、果敢、十五年佛国留学。諸職を経て廿五年三月第二次桂内閣を振出しに十年間陸軍大臣、廿九年大将に進ず。四十年子爵を授けられ、つゞいて朝鮮総督として日韓併合に功あり伯爵に陸る。大正五年元帥府に列せらる。十月内閣総理大臣として超然内閣を組織、七年九月辞す。尾篤に當り大勲位に叙し菊花大綬章を授けらる。

寺崎廣業 54才

（慶応二・二・二五―大正八・二・廿一）
1866　1919

日本画家。秋田の人。明治廿二年二十三才にして平福穂庵の勧めにより上京、その薫陶を受く。のち岡倉覚三・橋本雅邦と相識り切磋。二十年東京美術学校助教授。廿一年辞して日本美術院を創設経営せしも、内紛にて辞し、廿三年美校教授となる。雅邦と共に明治以降日本画壇の双璧と称さる。

寺島宗則 62才
（天保三・五―明治三六・六・六）
1832 1893

鹿児島の人。幼にして洋学をよくし、文久年間英艦の来襲に際し、藩主の命にて応接事破れと拉せられて英京に赴き攻学。帰朝後、攘夷党の排撃に遇ひ、松木弘庵と稱し幕府に仕へ蕃書取調教授手傳及開成所教授となる。維新後外国事務掛に出仕、五年英国在留特命全権公使、文部卿、法制局長、元老院議長などを経て、十五年米国公使、十七年伯爵を授けられ、十八年末宮中顧問官に任ぜらる。廿一年五月枢密院副議長となる。

寺島秋介 69才
（天保十三・一〇―明治四三・七・三九）
1842 1910

旧周防山口藩士。明治元年有栖川宮に随て親征副参謀として東下、彰義隊追討、奥羽追討に参謀として奮戰、西南役に警察隊編成に従ひ陸軍大尉に任ぜらる。のち内務省に出仕、廿三年元老院議官、のち錦鶏間祗候、廿四年貴院議員に勅選、廿九年男爵を授けらる。

寺田左右馬

土佐の人（幕末）

天章 57才
（文化十二―明治四・七・九）
1815 1871

慈英、儒僧。京師の人、はじめ江戸増上寺に学び土宗を学ぶ、のち禪門に帰し、建仁寺の慈保に参禪、傍ら詩文を摩島松南、仁科白谷に学ぶ。のち建仁寺住職となる。国事を憂へ大原重徳等と皇室の為に謀る。品川弥二郎、田中光顕等来り学ぶ。辛丑隣盟、嵐山風雅集、竺堂集、堆雲夜話などの著あり。

寺門静軒 73才
（寛政八―明治元・一・二四）
1796 1868

儒者。良、弥五左衛門。江戸の人。天保十三年江戸繁昌記を著はして奢侈に鑑れ江戸を逐はる。他に新潟繁昌記、静軒文集、静軒漫筆などあり。

ト

富樫廣陰 81才
（寛政五―明治六・八・二四）
1793 1873

和歌山の人。本居春庭門下の国学者。神典、歌書及び語学書を講究し、諸国を遊歴して教授。東名の祠官を兼ね、維新後は大垣藩の神社改訂掛となる。言霊幽顕論、神国音韵考、五十音今生順次図、萬葉集類聚解などの著あり。

戸川蓮仙

幕末の旗本。

戸田蓬軒 52才
（文化元―寛政二・一〇・ 1804 1855）

タダヨシ 忠敬 銀次郎（のち忠太夫） 水戸藩士 斉昭擁立に盡力し、弘化元年斉昭の幕譴を蒙るやこれに坐して禁錮数年。（ペルリ来朝後斉昭再び幕謀に参与するや、江戸に召されてこれを輔く。安政元年藩執政に復す。藤田東湖と共に二田と稱さる。安政二年十月地震にて圧死。

戸塚亮斎

戸塚静海の兄とい、文政七年医を長崎に学ぶ。

東條琴臺 84才
（寛政七・六・七―明治二十・九・二七） 1795 1878

耕子臧、江戸の人、亀田鵬斎を慕ひ著述を業とす。曾て高田藩主榊原氏に聘せらる。維新後東京に出で、五年八月亀戸神社の祠官となる。先哲叢談・續篇・儒林小志・経籍通志・閑散餘筆などの著あり。

藤堂高文 65才
（享保五―天明四） 1720 1784

子模、出雲、伊勢津藩の国老、漢学をよくす。

徳川光圀 73才
（寛永五―元禄十三・十二・六） 1628 1700

中納言頼房の第三子、寛文元年封を襲ひ水戸藩主となる。仁政を施し、尊王の正義を倡へ、史館を設けて廣く学者を聘し、つひに大日本史を祖述して名分を明かにし、以て後世尊皇尊覇の大義を示す。また礼儀類典、釈萬葉集を編述し風教の維持につとめ、屢〻勅に応じて詩歌を上り宸筆を賜ふ。元禄三年十月致仕、権中納言に任ぜられ、西山の里に退隠し、西山隠士と稱し餘生を送る。明治六年祠を水戸に建て常磐神社の社号を賜はる。義公と謚す。

号景山、水戸藩主治紀の第三子、文政十二年封を襲ぐ。藩祖光圀を慕ひ尊王敬神を政教の本旨とし、攘夷の急先鋒として硬論を吐き、ために幕閣の嫌厭を招き、弘化元年致仕退隠を命ぜらる。嘉永六年米艦来航に及び幕閣に列して貢献、ついで将軍継嗣問題その他より安政五年退任蟄居、攘夷の密勅水藩に降るや、幕府のために水戸に禁錮せられ病没す。烈公と謚す。光圀と同じく常磐神社に祀らる。

徳川斉昭 61才
（寛政三―萬延元・八・一五） 1800 1860

斉昭の七男、幼時会沢・青山に文学を学び兼ねて武術を修む。弘化四年九月一橋慶昌の嗣となる。安政五年儲君論に坐して蟄居、文久三年赦されて将軍後見職となる。慶応二年家茂の薨後、八月朔才十五代将軍となる。三年二月内大臣、十月十四日大政奉還、廿四日将軍を辞す。鳥羽伏見の戦後大阪より海路江戸に帰り、四年二月十一日江戸城を出で寛永寺に蟄居恭順の意を表す。明治二年九月蟄居を許され、三十三年薨、香雨雲候、三十五年六月公爵に叙せらる。

同夫人

徳川慶喜 77才
（天保八・九・二九―大正二・一・二二） 1837 1913

徳川慶勝 59才
（文政八―明治二六・八） 1825 1883

尾州名古屋藩主。嘉永二年六月支藩美濃高須より入りて第十四代藩主となる。ペリーの来るや水戸斉昭等と鎖国攘夷を唱へ、安政五年七月井伊直弼のために幽閉さる。赦されてのち公武合体を策し幹旋、維新の戰には朝命を奉じて北陸東北に出兵す。廢藩後侯爵を授けらる。

徳大寺實則 81才
（天保一〇・十二―大正八・六） 1839 1919

公純の長子（西園寺公望の実兄）明治元年参与職、議定官などに任じ、廚香間祗候を経て十七年侯爵。久しく侍従長、内大臣の重職にあり、大勲位にすゝみ公爵に陞る。明治天皇山陵御参拜後、辞して閑地に就く。

徳冨蘇峯
（文久三・正・二五―）

徳冨蘆花 60才
（明治元・一〇・二五―昭和二九・一・八） 1868 1927

徳冨愛

蘆花の夫人。

富井政章 78才
（安政五・九―昭一〇） 1858 1935

元京都聖護院宮近侍富井政恒の長男。夙に佛国に留学し、帰朝後東大法科教授、貴族院議員となり在職多年。其間法典調査会、帝室制度審議会臨時法制審議会等に参与し、就中我国民法の起草者として功績少からず。大正十五年十月男爵を授けられ、のち枢密顧問官たり。

富岡鉄斎 89才
（天保七―大正十二・十二・三） 1836 1924

画家。京都の人。南画の大家にして、大正八年以後帝国美術院会員たり。

豊田天功 60才
（文化二―元治元・正・廿一） 1805 1864

亮、彦次郎。水戸の儒者。烈公に用ひられ江戸に来り幽谷の門にて東湖と切磋。のち彰考館編修兼学職となり佛事志、氏族志を撰ず。烈公、東湖の罪を獲るに及び江戸に出て寃を辯じ五年の禁錮に処せらる。ついで食貨志、兵志、刑法志を撰す。靖海全書、明夷録、論語時習録などの著あり。

鳥尾小彌太 59才
（弘化四―明治三八・四・一三）
1847 1905

旧長州藩士 中村敬義の長男 勤富されて鳥尾氏を稱す 勤王の大義を唱(て東西に奔走 戊辰の役に壮丁二十を集め鳥尾隊と号して伏見に奮戰す 紀州藩の改革に與り のち明治四年陸軍少將となり 爾後軍務に精勵 廿一年以後枢密顧問官となる

獨圓 77才
（文政二六―明治二八・八・十三）
1819 1895

承珠 退耕庵 岡山の人 少時帆足万里の門に漢学を学び のち禪に帰す 維新の際 排佛の機運に抗して奮鬪 のち洛北相國寺の管長となる 居士休を寺内に設け 居士の参禪する者多し 退耕錄 近世禪林僧寶傳などの著あり

伴林光平 52才
（トモバヤシ 文化一〇―元治元・二・一五）
1813 1864

六郎 河内南河内郡林 浄土眞宗尊光寺に生る 夙に憂国の志を懷き 法衣を脱ず のち加納諸平 伴信友に從ひ国典を学ぶ 當時変名して並木春藏といふ 文久三年大和中宮寺の家士となり 山陵修復を企画 三年八月中山忠光の義兵を大和に擧ぐるや その参謀となり各所に奮戰中 脚疾のため行歩意の如くならず 奈良奉行の手に捕はる 翌年京都六角の獄に刑死 文筆に長ず

桃秋

俳人

泊斗豊作

水戸の人（幕末）

ナ

那波辰之助

儒者

那波魯堂 63才
（享保二一―寛政元・九・十二）
1727 1789

師曽 考卿 年十七 京都に岡白駒に学び はじめ漢魏の古学を信ぜしも のちこれを棄て 程朱の説を奉じ古学を攻撃す 晩年阿波侯に仕へて儒官となり 徳島に移る 友傳標例 学問源流などの著あり 草庵（道円の和二子）の曽孫

那波道圓 54才
（文禄四―慶安元・正・三）
1595 1648

活所 平八郎 姫路の人 年十八 京都に出で藤原惺窩に学ぶ 元和元年家康の京都に在りて名儒を召見するや その列に入る 廿九才 肥後侯 加藤忠廣に游事 寛永七年致仕 十年以後紀州侯の賴宣に儒を以て仕ふ 人君明暗図説 通俗四書註音考 活所遺稿などの著あり

奈良原繁 85才
（天保五・五 — 大正七・八・十三）
1834 — 1918

旧鹿児島藩士 維新の際 国事に奔走 明治十二年内務省に出仕 日本鉄道会社長 元老院議官 宮中顧問官 など を経て 廿五年 沖縄県知事に任ぜられ 廿九年 男爵を授けらる のち 貴院議員 錦鶏間祗候たり

内藤恥叟 77才
（文政九 — 明治三五・三・七）
1826 — 1902

正直 号碧海 史学者 水戸藩の士臣 弘道館に入り 会沢正志 藤田東湖に学ぶ 元治元年武田耕雲斎反するや幕府より召されて征討軍に加はり 湊 太田に転戦 慶応二年弘道館教授となりしも 藩老鈴木石見守と意見合はず 獄に囚はる 明治十九年文科大学教授となる 安政紀事 江戸文学志 徳川十五代史 など の著あり

仲田顕忠

江戸の人 海野幸典に学びて和歌に長ず 天保頃の人

仲村陽斎 74才
（寛永六 — 元禄一五・七・二六）
1629 — 1702

仲次郎 七左衛門 之欽 京都の儒者 晩年岡山藩主 池田光政の知遇を受け屢々其経筵に陪す 程朱の学を重んじ 室鳩巣等と一致して陽明及び古学派の排斥につとむ 四書釣説 近思録釣説 以下 著書多し

中井竹山 75才
（享保一五 — 文化元・二・二）
1730 — 1804

贅庵の長子 積善 善太 宋学を五井蘭洲に受く 松平定信 大坂巡視の時 特に礼を設けて経義を講ぜしめ 且事務の要を諮詢せらる のち父について懐徳書院に教授たり 薩肥両侯 重禄以て聘すれども応ぜず 逸史 草茅危言 非論語微 洛陽志 竹山文鈔 など の著あり

中井履軒 86才
（享保一〇 — 文化一四・二・一五）
1732 — 1817

贅庵の二子 積徳 徳二 兄と共に五井蘭洲に学ぶ 兄の死後 懐徳書院に教授たり 七経雕題略 七経逢原 の著あり 兼ねて書を能くし 篆隷に巧みなり

中井贅庵 66才
（元禄六 — 宝暦八・六・一七）
1693 — 1758

誠之 大坂の儒者 宋学を三宅石庵に修め 業成りて教授を業とす 享保十五年 石庵に代りて懐徳書院に教授となる 不問語 贅庵雑記 贅庵先生遺集 など の著あり

中井蕉園 37才
（天和二 — 享和三・八・四）
1682 — 1718

竹山の長子 曹弘 遠蔵 詩文に長ず 一夜十賦 仙坡遺稿 の著あり

中井弘
明治二七・一〇・一〇

鹿児島の憂國者。後藤象次郎に倚り、その力にて英國留学。帰朝後宇和島藩主伊達宗城の招きに応じ、同藩周旋方として京都に遊ぶ。維新に際し明治元年七月外國事務各國公使應接掛として活躍。のち廿二年元老院議官。貴院勅選議員となる。

中江藤樹 41才
（慶長十一―慶安元・八・二五）
1608 1648

厚、與右衛門。近江高島郡小川に生る。祖父吉長に隨ひ大洲藩主加藤泰興に仕ふ。聖学を勧興して世道人心を維持するの念を発す。廿七才、母を養はんため致仕をこひて聽されず、遁れて帰郷。書を講ず。学程朱を本とし陽明学に移り、專ら知行同一の說を採り、深く孝経の愛敬を主義とす。人に誨ゆるに躬行を文詞のさきにし、德化普ねく、近江聖人と呼ばる。池田光政、招聘をきして召せども応ぜず。学庸論孟の諸解をはじめとし、谷羽向答、孝経啓蒙、医方規矩など著書多し。

中岡慎太郎 30才
（天保九―慶応三・十一・一五）
1838 1867

道正。土佐の人。文久年間、京摂の間に往来、石川清之助と変名して四方の有志と結び尊攘の義を唱へ、西方諸藩に遊說す。坂本龍馬と共に幕府の政権奉還を画策。慶応三年十一月十五日夜、坂本と共に三条にて暗殺せらる。年三十

中澤雪城
―慶応二・三・一

行藏。俊卿。越後の人にして書家。長岡侯に仕へ、菱湖の門人たり。

中島信行 54才
（弘化三・八―明治三・三・二八）
1846 1899

作太郎。元高知藩士。夙に王事に勤め、坂本龍馬に従ひ海援隊の参謀たり。明治初年諸官に厂任し、のち板垣退助等と共に自由党を組織、帝国議会の開設せらるゝや衆議院議長となる。廿九年男爵を授けられ、のち貴族院議員たり。

中島椋隱 77才
（寛永九―寛政三・六・二八）
1780 1856

儒者。德規、文吉。号道軍庵。京都に居り、詩文に長じ、また和歌筆跡を能くす。

中島錫胤 77才
（文政二―明治三八・一〇・四）
1819 1905

椋隱の養子。永吉、直人（本姓三木）。旧阿波德島藩士。少壮、篠崎小竹、古賀謹堂の門及び昌平黌に学ぶ。幕末勤王の志士と交はり、屢〻幕吏のために捕へられ幽せらる。慶応四年正月赦されて藩邸より上京、地方官、司法官に厂任。十七年二月元老院議官。廿七年錦鶏間祗候。廿九年男爵を授けられ、廿七年七月貴院議員となる。

中島作太郎

中根雪江 71才
（文化四―明治一〇・一〇・三）
1807 1878

師賀、勢負、越前家の臣、壮年江戸に出で平田篤胤に学ぶ、ペルリ来朝の際、利害得失を説き、それより世に顕はる、慶応末年幕府還政の議起るや参与職となり、明治元年徴士となり、ついで歴遷、租税等の事務を管す、

中西深斎 80才
（文政九―昭和三・三・二二）
1824 1903

医家、惟忠、京の人、少時江戸に遊び鵜殿丘一・荘田允益等と交り、相共に文辞を学ぶ、数歳にして西帰せし時、吉益東洞の古医方を唱ふるを見、軽んじて醫となり、東洞に師事す、時に三十八才、爾後三十有余年殆ど著述にも念、傷寒名数解、傷寒論辨正、刪訂傷寒論及び文集などを出す、

中林竹洞 78才
（寛永五―寛永六・三・二〇）
1776 1853

画家、成昌、尾州に生れ京都に住す、はじめ宮崎筠圃に学び墨竹を描き、のち元人の画法を研究して山水の大家となる、晩年に至り自用の絵絹を西陣にて特に織らしむ、後世これを竹洞絹といふ、

中御門経之
（明二四・八）

大納言勧修寺顕彰の男、維新の際、皇運恢宏に盡力し、中興翼賛の偉功を樹つ、はじめ伯爵を授けられ、明治廿一年侯爵に陞る、

中村佛庵 80才
（宝暦五―天保五・正・七）
1755 1834

蓮、景連、幕府畳師の棟梁にして書家、

中村栗園 76才
（文化三―明治一四・十二・二〇）
1806 1881

和子藏、豊前中津の人、京都に遊学、小竹・秋堂・留蒲の諸儒に就き、弘化初年小竹の推薦により水口藩に儒員となる、嘉永年間藩政に参與、内弊を刷新す、諸方の志士陸續来りて尊攘の事を謀る、戊辰の初藩主に従って京師に入るや率先王師東征の議を主張す、大参事に任ぜられて藩治に功あり、明治三年老齢隠退す、孝経翼、日本智囊、寤眠録、栗園詩文鈔などあり、

中村確堂
（明治三〇・三・四）

栗園の養子、（本姓山縣）鼎五、近江水口藩士、嘉永元年儒学見習として生徒に教授し、また諸方に遊学、帰藩後督学となる、夙に皇権復興に志し、戊辰正月藩主を促して禁闕を守護す、六年徴されて修史局に出仕、ついで中学・師範学校に教鞭をとる、

中村荘助

中村敬太郎 60才
（敬宇）
（天保三・五・二六 — 明治三四・二・七）
1832 1891

儒者。江戸の人。聖堂に漢学を学ぶ。桂川甫周に蘭学を学ぶ。安政二年学問所教授方となる。慶応二年九月命により英国留学。帰朝後明治八年女高師嘱託。十年八月東京大学文学科教授。十九年二月元老院議官。廿一年六月文学博士。廿三年女高師校長。同年九月貴院議員となる。明八社の一員にして、西国立志編、自由之理、などの著あり。

中山孝磨 68才
（嘉永四 — 大正八・十一・三四）
1851 1919

忠愛の二男。明治初年東宮侍従長となり十七年侯爵を授けらる。廿八年東宮大夫に任じ、廿五年宮中顧問官となる。廿六年帝室会計審査局長となり、四十年再び宮中顧問官に任ず。

中山忠能 80才
（文化八 — 明治廿一・六・十二）
1809 1888

明治天皇の外祖。権大納言忠頼の二子。諸官に歴任、弘化四年権大納言に任ず。明治元年二月輔弼を命ぜられ、つゐで議定に進り、従一位、大臣に推せらる。二年、神祇官に任ぜられしも、四年、老年につき諸官を免され、廟堂間祗候を命ぜらる。十七年侯爵、廿一年五月大勲位に叙せらる。

永井玄蕃頭

尚志（ムネ）。幕臣。安政元年幕府海軍創立に当り蘭人の下に技術を学ぶ。五年七月外国奉行、六年軍艦奉行に任ず。

永坂石埭

明治時代の書家

永島華隠

紀州、伊勢の儒者。

永田忠貞 55才
（天文三 — 寛政四）
1538 1792

俊平。号東皐。京師の人。服部蘇門、江村北海に学び、書、詩を能くす。

永田徳本 118才
（永正一〇 — 寛永七・二・二四）
1513 1630

医家。号知足斎。甲斐往本の人。医方を月湖（明の帰化人）の門人玉鼎より受く。大永、享禄の間甲斐に来り武田信虎の客たりしが、天文中去って信州に赴き、天正末武田氏の滅亡に際しまた甲斐に帰り医療をこととす。将軍秀忠を治療せしことあり。甲州に葡萄栽培をすゝめ、梅花無盡蔵、知足斎徳本秘方などの著あり。

長岡監物 48才
（文化九―安政六・八・十一）
1812 1859

是容、壹岐、幸之熊本藩の国老。風に皇室を尊崇し、各藩有志と尊攘の匡正を策す。嘉永六年外艦浦賀に来るに際し藩兵三百を率ゐ、洋式の兵制を用ひて房總邊海の警備に赴く。安政初年象山、松陰の罪に罹るや有司に迫りて百方寛典を乞ふ。のち西郷等の諸士と皇権恢復を議し、一時物議を避けて家邑立野に閑居中病歿。

長久保赤水 85才
（享和元―享和元・七・二五）
1801 1717

源五兵衛、玄時、常陸の人。苦学力行、天文地理に精しく詩文に長ず。安永六年藩主徳川治保父子に召され修史の諮問を受け江戸邸に侍講し近習番となり、支藩松平頼救の侍講を兼ぬ。水藩儒者の先進として尊敬を集む。

長澤伴雄

紀州の国学者。本居大平の門人にして柿園と号す。拙夷本論、咏史歌集、類題鴨川集などの著あり。

長野豊山 55才
（天明三―天保八・八・廿二）
1783 1837

確、江戸の儒者。著書に武東、松陰快談、三名士傳、嘉聲軒詩約などあり。

長與專齋 65才
（天保九―明三五・九・八）
1838 1902

肥前大村藩侍医俊達の子。十七才大坂に出で緒方洪庵に学び帰りて藩侯の侍医となる。明治四年東上、文部省に出仕、六年欧米巡回より帰朝して医務局長、のち東京大学医学部の綜理心得、十九年元老院議官兼内務衛生会長、議会開設後貴院議員、廿五年一月宮中顧問官となる。

梨木祐之
（享保八―正・二九）

国学者。号桂斎。京都下鴨の祠官。詠歌をよくし国史に通じ、山崎闇斎に神道を学ぶ。社の衰微を歎き、朝廷に請ひ元禄七年より葵祭を再興す。日本逸史、大洲記、神代和解、祭事記などの著あり。

夏目漱石 50才
（慶応三・一・五―大正五・十二・九）
1867 1916

夏目成美 68.
（寛延二―文化十二・十・一九）
1749 1816

俳人。江戸の札差の家に生れ、寛政・文化時代の江戸俳壇の中心勢力をなす。道彦・巣兆・一茶等と交はり、著に魁春帖・歳旦帖・成美歌集・成美発句集その他あり。

成瀬十助

成島龍洲 文化五・五・四

和鼎・忠八郎。江戸の儒者。

成島衡山 68才
（寛延元―文化十二・七・六）
1748 1815

仙藏・勝雄。龍洲の養子。同じく江戸の儒者。

成島道筑 72才
（元禄二―宝暦一〇・九・一九）
1689 1760

錦江・鳳卿。幕府に仕へて坊主たり。祖徠の説を悦び、享保の間礼記・明律を侍講し、寵遇厚し。飛鳥山碑文・詩歌題苑・絶句解比肩・みそのつゆ等の著あり。

成島柳北 48才
（天保八―明治一七・一一・二〇）
1837 1884

江戸の文人。家定及び家茂二公の侍講に蔭補し、奥儒者に叙せられ、幕命を以て東照宮実記五百卷（成島司直の著）後鑑三七五卷（父、竹山の著）の訂正を總裁、風に洋学を修め、幕政陵夷の諷刺戲詩を作って罪を獲て免職。慶応元年幕府兵制の改革に騎兵頭に抜擢せれ、のち外国奉行・大隅守に厂任。明治元年意見の相違にて辞し帰農、のち朝野新聞などに活躍す。明治新撰泉譜・柳橋新誌・柳北詩鈔などの著あり。

南部彦助

南摩綱紀 87才
（文政六・一一―明治四三・四・一三）
1823 1909

士張。号羽峰。教育家。会津藩の世臣。藩学日新館に学び、廿五才江戸昌平黌に学び、更に杉果戚卿等に洋学を受く。文久二年藩命により樺太を戍り、ついで蝦夷島に代官として留まること六年、土人を教化す。慶応三年藩邸の学職。明治元年会津城陥るに及び高田に錮せらる。のち太政官・文部省を厂て東京大学教授に任じ、廿一年高師教諭に転じ、のち男女高師に教授たり。内国史略・追遠録・環碧樓遺稿などの著あり。詩文に長じ兼ねて書をよくす。

南山和尚 80才
（寛政一―天保一〇・一一・八）
1760 1839

禪僧 号眠（テウミン） 相州の人 十一才 江戸東禪寺に赴き 洪道和尚に就き剃髪して沙弥となる 寛政五年 三十八才 仙台瑞鳳寺第十四世住職となる 詩文書画を能くし 著作に業林貫華集 禪藻 南屏燕語 南山語録などあり

南條文雄（ブンユウ）

眞宗僧侶 明治の人

二

二宮錦水 70才
（文化二―明治七・六・二五）
1805 1874

子容 周防岩国侯の世臣 はじめ亀井昭陽の門に学びのち江戸に遊びて松崎慊堂に従う 三年にして帰り藩の督学にあげらる

西川吉輔 65才
（文化十三―明治十三・五・一九）
1816 1880

善吉 近江八幡の人 大国隆正に皇学を学び 爾後皇典を講究 弘化四年 毛利氏に学ぶ 安政・文久の間 尊攘に暗躍 屢〻捕へらる 明治元年 帯刀御免 玉座の庭前に皇学を講ずべきの命あり 爾後皇学教授・神道布教に尽す 十二年九月 生国魂神社宮司に任じ 十三年一月 病を以て辞し 中教正に専補さる

西庄源三

西田直養 73才
（文久三？）

庄三郎 号篠廼舎 本居大平門下の国学者にして豊前小倉藩士 歌人として聲名あり 篤胤・忠友と親し 萬葉集長歌格 神事考 古事記集解 篠舎漫筆などの著あり 文久三年五月 長藩外国と交戰の際 小倉藩の爲ちふきを憤り絶食して死す とぶ

西山拙斎 64才

（享保五―寛政五・十二・五）
1730 1793

正、備中の儒者。大坂に出で儒を岡白駒に問ひ、那波魯堂に従って京都に徙り、秋六如等と詩鈔社を創む。また国教を紀美領及僧澄月に学ぶ。魯堂と共に復古派より宋学に移る。帰郷後子弟に教授、諸方より招かれて出でず。岡山池田侯、その長子慎を擢んで、侍医となし以てその晩年を養はしむ。間宮瑣言、芳野紀行、拙斎詩文集などあり。

新島襄 48才

（天保一四・正―明治二三・一）
1843 1890

上州安中藩士の子として江戸藩邸に生れ、十三才海軍傳習所に入り、蘭学を修め測量術を学ぶ。船長となり航海を試み、外人に就き英語を学ぶ。元治元年六月米国船に乗じボストン府に赴き、紳商ハーディーの知を受け、中学より神学校に入る。のち明治四年岩倉大使の一行に随ひ欧州諸国を視察。八年十一月山本覚馬と京都に同志社を設立、教育と傳道に生涯を捧ぐ。

又

貫名海屋 86才

（宝永七―文久三・五・六）
1778 1863

泰次郎、画家。京都に住し、儒を以て業とし、傍ら画を嗜み山水画を作る。いはゆる文人画。のち狩野家の着色画を学ぶ。

ネ

根岸友山 82才

（文化六―明治二三 1809―1890）

伊七、志士、武州大里郡吉見村の素封家、天保八年農民数千人、堤防工事の不乙を領主川越に訴ふるや、これを制止せざりし廉を以て追放さる、のち赦され、四方の志士を寄寓せしめ、薩藩邸の者と内外応じて太平山に事を挙げんとし、嫌疑を以て禁錮せらる、その子武香、爲に寃を辯じ漸く赦さる。

ノ

乃木希典 64才

（嘉永二―大正元・九・十三 1849―1912）

旧長州豊浦藩士、厳格ふる家庭に育ち、山鹿素行、吉田松陰の学を修めて実践を期せり、維新の国事多難に際し盡瘁、つゞで軍籍に入る、十年西南役に出征功あり、十三年大佐に進み、つゞで少將たり、日清戰役混成旅団を率ゐて出征、戰後功により男爵、二師団長を経て廿九年台湾總督に任ず、卅年辞し、つゞで十一師団長となる、日露戰役に第三軍司令長官として出征、旅順を陷れ、更に奉天戰に偉功を奏す、戰後伯爵を授けられ、軍事参議官に列し学習院長を兼任、明治天皇大葬の夜、夫人と共に自邸に壮烈なる殉死を遂ぐ

野口寧斎 39才

（慶応三―明治三八・五・一三 1869―1905）

太郎、肥前諫早出身の漢詩人、星社に據り、雜誌「百花欄」を発行す、毒殺さる。

野口英世 53才

（明治九―昭三・五・二一 1876―1928）

野田笛浦 61才
（寛政十一―寛政六・七・廿一）
1799 1859

遜、希一、丹後田辺藩牧野侯の儒臣、年十三江戸に遊び古賀精里に頼り昌平黌に学ぶ、文政年駿河に漂流の清船に、代官羽倉用九の需めに応じて筆談して名をあぐ、嘉永三年側用人として藩政に参與、安政五年執政となり、新に学制を布き勧善察を設け藏修寮を新築し、文学振興の道を図くす。

野津鎮雄 44才
（天保八―明治一三・七・二三）
1830 1880

旧薩州藩士、文久三年英艦鹿児島砲撃の際、また幕末維新の諸戦に功あり、明治五年九月陸軍少将に任ぜられ、七年三月佐賀の乱に歩・砲二兵の指揮長官として熊本鎮台に赴き平定、十年西南の役には第一旅団兵に将として鎮定、十一年中将となる、十三年東駕西巡に扈従せんとして出発前病み七・二二歿、日露役の野津道貫元帥はその養子。

野中兼山 49才
（元和元―寛文三十三・一五）
1615 1663

傳右衛門 主計、土佐藩の執政、はじめ禪を修め、中年儒に走り、朱書を海外に索め翻刻公刊、山崎闇斎の禪僧たりしころその才を認めて還俗せしむ、藩の内政に當ること殆ど三十年、群臣に嫉まれ（寛文三年七月）自ら退いて讀書に日を送る。

儒者、直温、幕府に仕（昌平黌の儒員となり詩名あり。

野村望東尼 62才
（文化三・九・六―慶応三・十二・十三）
1806 1867

女流勤王家、名はもと、福岡の人、五十四才にして夫に後れ、剃髪して望東尼と号す、文久三年高杉晋作その他の志士の急を屢〻救ひ、慶応元年十月姫島に流さる、二年九月浪士のために救ひ出され、爾後三田尻に病を養ふ、比賣島日記の著あり。

野村靖 68才
（天保三・八―明治四三・一・二四）
1842 1909

旧山口藩士にして吉田松陰門下、維新の際國事に奔走、四年十月岩倉大使に従って欧米各國に差遣され、六年七月帰朝、廿年子爵、廿一年枢密顧問官、廿四年以後、佛・西・葡諸國に公使たり、帰朝後内相・逓相など の要職に當る。

野呂介石 82才
（寛延四―文政十一）
1747 1828

儒者にして南宋画を能くす、和歌山の人、はじめ池大雅の門に入り、のち清人伊孚九の法を学び、特に山水画に長ず。

ハ

羽倉簡堂 93才
（寛政二―文久三・七・三）
1790 1862

用九、外記。幕府代官の子。少にして古賀精里に学ぶ。のち家を継ぎ諸州代官となり天保九年伊豆七島を巡視、忠邦の庶政改革に際し抜擢されて納戸頭に進みしも、天保十四年俄かに免職、爾後屏居読書す。不盡岳志、駿城記などの著あり。

羽田野敬雄 82才
（文政元―明治三十五・六・一）
1801 1882

常陸、栄木（サカキ）。三河羽田野の祠官。文政十年平田篤胤に入門。明治元年末皇学所御用掛を命ぜられ、ついで講官となり宜教の事に尽力。六年十月権大講義、十年十二月権少教正となる。三河国官社私考の著あり。

長谷川菅緒

国学者。京都の人。通稱三折。本居宣長の門に入り和歌及び古学を修めて名あり。生徒に教授す。寛政時代の人。

長谷川泰 71才
（天保十三・六―明治五・三・十二）
1842 1912

医学者。越後の漢法医の家に生れ、江戸に出で坪井芳洲に就いて蘭方医術を修の、ついで佐倉の佐藤尚中に学ぶ。一時大学東校の次長たり、明治九年本郷に済生学舎を起して医学生を養成、のち内務省に出仕、また衆院議員、東京市会議員たりしことあり。奇人を以て知らる。

長谷川二葉亭 46才
（元治元・六・三―明治四十・五・一〇）
1864 1909

辰之助。東京の人。明治十九年外語露語科中途退学。廿二年八月内閣官報局に出仕、英露新聞飜訳を担任、傍ら飜訳小説を発表す。三十年十二月辞官。廿年十月海軍編修書記、廿二年外語教授、三十五年五月辞して北満巡遊、北京京師警務学堂提調となる。廿七年二月大朝に入社、東京出張員たり。四十年渡露、翌年病を得て帰朝の途、ベンガル湾上に賀茂丸にあって病歿。二葉亭全集あり。

馬場佐十郎 36才
（天明七―文政五・七・二七）
1787 1822

職夫。号穀里。長崎通詞の家に生る。志筑忠雄に師事し、また露語に精通す。文化元年幕府に召され、萬国全図補訂に当り飜訳に任ず。八年五月天文台に出仕、蘭書和解用掛となる。露人北寇に当り幕命により更に露語を学ぶ。俄羅斯語小成を編ず。十年小普請組に擢でらる。

梅室 84才
（明和六―嘉永五・七・二）
1769 1852

俳人。櫻井梅室。賀金沢の人。家代々磨刀を以て加賀侯に仕へしも、病を以て致仕、俳諧を関東に学ぶ。諸州を巡る。蒼虬、鳳朗、卓池と合せて天保四老人と稱せらる。

萩原正平 54才
（天保九―明治三四・六・七）
1838 1891

伊豆の人。篤胤歿後の門人。神社調査を行ひ産土講社なるものを設け、郷土の団結、道徳養成に資す。伊豆国式社考社、増訂豆州志稿など、著あり。

橋爪助二郎

橋本香坡
元治元

通、上州沼田の人。少時浪華に在りて篠崎小竹に学ぶ。のち勤王を主張し、文久三年天皇親征の詔に応じ、中山侍従を擁して挙兵。元治元年余党捜索に遭ひて囚（とら）れ、獄中に死す。

橋本實梁
（天保五・四―明一八・九）
1834 1885

少倉輔季の男にして中納言実麗の養子。左近衛少将に任じ、尊王攘夷の大義を唱へ、父と共に国事に奔走。戊辰役に東海道鎮撫使として軍事を掌って功あり。のち地方官、元老院議官などに歴任。明治十七年七月伯爵を授けらる。

橋本左内 26才
（天保五―安政六・一〇・七）
1834 1859

綱紀、号景岳。越前福井の藩医の子。京坂に留学、漢洋の学術を修め、帰りて父の跡を承け医員に列す。安政二年藩主松平慶永の国政刷新に当り、抜擢せられて政務に参与し、兼ねて学館明道館の教職に任ず。廣く天下の志士に説き尊攘の説を唱ふ。つゞで慶永を輔けて幕府に献策し、将軍に賢長を挙げて朝旨に副はしめんとし京都に上り公卿有志の間を斡旋して画策。安政五年大獄に坐して捕へられ、江戸に送られ、六年十月傳馬町の獄にて死刑となる。

道田市五郎 29才
（天保四―文久元・七・二六）
1833 1861

勤王家。正実。斎藤監物と親交あり。つひに櫻田事変に加はる。文久元年七月斬に処せらる。年二十九。

秦滄浪 71才
（享和二―天保二・七・一）
1802 1831

鼎、子鉉。三河の儒者。父峨眉の教を受け明倫堂典籍となり教授に遷る。その学博渉、古書校正を好む。春秋左氏伝、左伝国語、文選、李善注などを校刊し、二宵話を著はす。

八田知紀 75才
（寛政十一―明治六・八・二）
1799 1873

喜左衛門、号桃岡、鹿児島藩士、和歌に長じ、文政八年京都番邸留守役として上京、香川景樹の門人となり、熊谷直好と同門の秀才として並稱さる、国事多難の際ふたゝび歌学の推弘に盡す、維新後東京に移り、宮中御歌所に奉職、兼ねて内弟淘治に晩年を送る。

服部南郭 77才
（天和三―宝暦九・六・廿）
1683 1759

元喬、小右衛門、京師の人、十四才江戸に来り十六にして柳沢吉保に仕ふ、のち物徂徠に師事、三十四才致仕、專ら古文辞詩章を修め、内弟に教授す、晩年肥後侯の聘に応ず、南郭文集、大東世語、燈下書、文筌小言、儀禮抄ふどの著あり、傍ら画をよくす。

服部仲英 54才
（元禄四―明和元・八）
1714 1769

南郭の養子、元維、字門、本姓西村氏、西宮の人、江戸に出で南郭に学び、内弟を娶して教授を業とす、南郭の長子惟良、次子惟恭、何れも夭折するに及び、その季女を娶りて養子とふる。

服部惟良 38才

南郭の長子、温卿。

花房勝之進

濱尾新
（嘉永六・四―大正一四・九）
1849 1925

元出石藩士、明治初年米国に遊学、帰朝後文部省に出仕し、廿六年帝国大学總長となる、其間欧洲に渡航して教育制度を調査し、また元老院議官を兼ね、三十年西園寺内閣の文部大臣となり、のち再び大学總長として在職多年、大正三年東宮大夫を拝命して御学問所副總裁を兼ぬ、枢密顧問官たること多年、大正十一年議長となり、十四年内大臣を兼勤、四十年男爵を授けられ、大正十一年子爵に陞る。

濱口雄幸 62才
（明治三―昭六・八・二六）
1870 1931

林鳳岡 89才
（元禄七―享保一七・六・一）
1694 1732

鵞、信篤、鵞峯（羅山の才三子）の才二子。延宝八年父の歿するや跡をつぎ、大蔵卿法印弘文院学士の号を賜はる。元禄四年湯島に聖廟を創め、髮を落して大学頭信篤と稱す。綱吉の信任厚く、のち新井白石と議合はず不遇。武徳大成記、鳳岡林学士集、四書易詩書講義などの著あり。

鳳岡の子。信充、宝永五年三月より父と共に西城侍講。享保年三月大学頭に叙任し父に代る。吉宗、家重、家治に仕。續国史、本朝世說、越中孝子傳、詩法纂測などの著あり。

林榴岡 78才
（天和元―寛政八・十一・十一）
1681 1857

林述斎 74才
（明和五―天保十二・七・一四）
1768 1841

衡、蕉軒。岩村田藩主大給恭温の三子。好学にして古今の文籍に通暁、寛政初幕府新政の際、林祭酒に嗣ぶきにより、二十六才にして挙げられて大学頭となる。白川楽翁堀田水月の賢侯と相許す。蕉軒雜録、同詠物詩、接韓録などの著あり。林家の中興と稱せらる。

林鳳谷 53才
（享保六―寛政二・十二・十二）
1721 1773

榴岡の子。信武（のち信言）。宝暦三年七月父の務に代る。本朝事物權輿考、聖堂御成記集録、東武列朝系図などの著あり。

林檉宇 54才
（寛政五―弘化元・十二・六）
1793 1844

林子平 56才
（元文三―寛政五・六・廿二）
1738 1793

林子一 82才
（文化八―明治二五・九・一三）
1811 1892

原國輔（櫻） 25才
（天保四―慶応三・十二・二五）
1849 1867

號、述斎の才三子。大郷信斎、佐藤一斎、松崎慊堂に学ぶ。天保九年父の老齢隱退に代りて大学頭となる。父編修の実記、地誌を継ぎ、また命を奉じて官家系譜を撰す。

友直、号六無斎。仙台に生る。夙に地理風土を諳んじ天下経綸の資あり。藩主に上書して学政、武備、貨殖の意見を陳述し、つゞいで富国策を献ず。辺海防備に意を用ひ、外臨の長崎に来るをきゝ親しく外人に接して海外の狀勢を知る。江戸に還り敵国備の急務を論じ、京都に至り中山愛親に頼り外警を進言し、また老中松平定信に意見を陳ず。海国兵談、三国通覽を著はして世人の覺醒に力めしも用ひられず、定信によって絕板を命ぜられ、つゞいで仙台の兄嘉膳の家に禁錮せられ、空しく終る。

勤王家。備中の人。はじめ森田節斎の倉敷に寓するや刎頸の交をなす。常に皇室の式微を慨し、鈴木重胤と共に京都に至り、藤本鉄石等と会見せしがその過激にして共に為すべからざるを知り帰郷。維新初年藩の関門出入船舶に重税を課するを見て上書してこれを撤せしむ。七年以後区長、郡長として盡力、明治十七年三月維新前後の功及び德行の聞えを賞せられ、宮内省より金百円下賜。

勤王家。武蔵入間郡の人。氏を櫻と改む。慶応末年江戸三田の薩摩藩邸に入り登用せらるゝ参謀となる。幕府の衰微に乘じ同志を事を挙げんとして幕吏に探知せられ、追はれて川越まで逃れしも免れざるを知り屠腹。年廿五。

原啓輔

原敬 66才
（安政二・二・九―大正一〇・一一・四）
1856 1921

岩手の人。少壮東京に出で苦学し、翼仮麟祥にフランス語を、司法省法律学校に法律を学ぶ。地方新聞の記者を経て、中井・井上・伊藤等に認められて官界に入り、外務省に出仕、明治廿九年致仕、大阪の社長たること三年。伊藤の政友会を創立するや、その幹事長となる。世三年伊藤内閣の逓相、三十五年以後衆院議員、世九年・四四年、第一・二次西園寺内閣の内相、大正二年山本内閣に内相、三年六月西園寺の隠退に代って政友会總裁となる。大正七年九月本邦最初の平民宰相として組閣、政党内閣の端緒を開く。十年十一月四日東京駅頭にて中岡某のために刺さる。

原道太 27才
（天保九―元治元・七・一九）
1838 1864

肥後、久留米藩の臣、文久三年国を脱し長州に薩藩志士と交ぜり、相携へて大坂邸に至り、伏見の変に会し、真木保臣等と国に逃げ帰せらる。三年五月敕免されて三条実美の親衛兵となり上京、八月七卿落に随ひ三田尻に至る。翌年七月七卿及び毛利父子雪冤歎訴のため長人大挙京に迫るや、十九日保臣と衆に先立ち鷹司邸に赴くの途、弾れに中り、自刃す。

原任蔵 38才
（天保元―慶応三・八・一四）
1830 1867

市之進、忠成、号尚不愧斎。水戸藩士。昌平黌に学び、幕末川路聖謨に随って長崎に行き、露使応接の顛末を記す。帰りて弘道館に教職となり、慶喜の将軍となるや駿察に挙げられ、維幕の枢機に與る。外交の大局に処し、幕政最後の措置の宜しきを期す。慶応三年八月、幕臣鈴木某等三人に襲はれて仆る。

原田成徳

幕末水戸の人。

原田兵介 72才
（寛政四―文久三・正・廿二）
1792 1863

久恒。水戸藩町奉行にして勤王家。弘化元年烈公の幽せらるゝや同志と共に雪冤の為に盡力し、佐幕派のために陥れられ、数年禁錮され、のち又藩主暗殺の陰謀あるに際しては、よく藩主を護り事に処す。年七十二にて歿す。

伴信友 74才
（安永二・二・二五―弘化三・一〇・一四）
1773 1846

州五郎。若狭小浜、山岸惟曾の四男。のちに藩士伴信富の養子となる。のち京都に抵住、文化十二年藩主酒井忠進の老中となるや、従って江戸邸に在り輔弼の任を喝す。文政四年四十七才病によって致仕、京都に住して専ら和漢の学を修む。殊に本居宣長の学説に服し、村田春海に頼ってその死後門人となる。子弟に訓ずるに尊王敬神の大道を本とし、老後に及びて倦まず。長柄山風、中外経緯伝、残櫻記、假字本末、比古婆衣ほどをはじめとして著書百二十部四百卷に及ぶ。

伴蒿蹊 74才
（享保八―文化三・七・二五 1723―1806）

資芳、庄右衛門、号 南田子、国学者、近江八幡の人、京都に出で国学を有賀長伯に修め、武者小路実岳の門に入る、明和五年三十六才、髪髪し優遊著作を事とす、林泉院六如上人と親交あり、妙法院宮の寵を受く、続近世畸人傳、南田耕筆その他国学に関する著あり、

坂正臣 77才
（寛政二―昭和六・八・二五 1855―1931）

歌人、番鉄胤に学び、鎌倉宮・皇太神宮に仕、また侍従・宮内属・東京女学館・華族女学校教授などに歴任、明治三十年十二月御歌所寄人、同四十年御歌所主事となり、その間皇族貴顕に歌及び書を教授す、著作に三拙集（みつたく）（歌と書と画）あり、

梅彦（うめひこ）

麥浪

磐珪永琢 72才
（元和八―元禄六・九・三 1622―1693）

禪僧、播磨龍門寺の南山、萬治十二年春勅により妙心寺に住し、元禄三年詔により佛智弘済禪師の号を賜ふ、

ヒ

日根對山 57才
（文化一〇―明治二・三・十三 1813―1869）

盛長、文人画家、堺の人、京都に居り画名高く、星巌・海屋等と親交あり

日柳燕石 52才
（クサギ）
（文化一四―明治元・八・二五 1817―1868）

勤王家、耕吉、政章、讃岐の人、郷党浮浪の徒に首領たり、性強扶弱、地方の信頼あつく、西郷・木戸・高杉等と交はる、志士を庇護して幕嫌を蒙り、高槻藩に囚（らるゝこと）七年、明治元年赦されて入京、東征の役に史官として總督宮に従ひ、柏崎にて陣中病歿、詩文を能くす、

永室長谷羽 80才
（天明四―文久三・一〇・一）
1784 1863

國学者。治兵衛。号椿園。尾張津島神社の祠官。香川景樹に歌を学び
その高足たり。芳野日記。桂花餘香。こせの山ぶみ（家集）などの著あり。

尾藤二洲 69才
（延享二―文化一〇・十二・一四）
1745 1813

良佐。伊豫の人。大坂に出で片山北海に師事。頼春水。中井竹山兄弟と親交あり
寛政年間幕府儒官に徴され、昌平黌教官に任ず。名分の混淆を悪み、和漢名稱
の當否を辨じ在来の惑をとく。素餐録・正学指掌・稱謂私言・静寄軒文集などの
著あり。柴野栗山・古賀精里と共に寛政三博士と呼ばる。

尾藤水竹 60才
（寛政七―寛政元・十二・一四）
1795 1854

二洲の長子。積高。孺庵。江戸の儒者。

（樋）松山坦斎 69才
（寛永三―春十二・九・一六）
1724 1842

鑑定家。義愼。德忠。号魁松軒。

東久世通禧（ミチトミ）
（天保四・一一―明四五・一）
1833 1912

少にして孝明天皇に近侍。安政文久の交国事に盡瘁。西国落ち七卿の一人
維新後帰洛直ちに参与となり錦旗奉行として征討將軍仁和寺宮に従ひ
つゞで外国事務總督を兼ね。のち神奈川府知事南部長官を経て侍従長となり
更に元老院・枢密院・貴族院に列して各副議長たり。明治十七年伯爵を授けらる

人見道毅 59才
（寛永五―元禄九・九・廿三）
1638 1696

又左衛門。懋斎。（本姓藤田氏）卜幽の養子。はじめ林鵞峯及び朱舜水に従
って儒を学ぶ。天和三年水戸藩史館の總裁となる。のち寺社奉行に転じ義公の
淫祠撲滅に協力す。詩文集に井々堂稿あり。

土方久元
（天保四・一〇―大正七・十一）
1833 1918

世々山内家に仕ふ。維新前尊攘の大義を唱へ、文久年間七卿に随従して奔走
最も功あり。明治後太政官に出仕し、のち農商務大臣・宮内大臣・臨時帝室編修
局總裁等に歴任。特に大臣礼遇を賜ふ。明治十七年子爵を授けられ、廿八年
伯爵に陞る。

平山省斎 76才
（寛政七―明治三）
1795 1870

幕臣。敬忠。鎌三郎。嘉永・安政の交米使来朝応接の事に参し、大獄に坐して
謫居三年。慶応二年外国奉行・図書頭。三年若年寄。外国總奉行となる。明治元年朝議
を蒙り屏居。三年正月赦され、神道大成教を起す。氷川神社宮司及び日枝神社祠官
を兼ね、大教正に進む。

平田篤胤 68才
（宝永五・八―天保四・九・一）
1776 1843

大角号気吹廼舎。秋田の人。年二十江戸に出で刻苦す。享和の年本居宣長の著書を讀み深く古学の崇高を感じ、是より之を歿後の門人となり斯学を奉ず。文化元年江戸に塾を開いて古学・神道を講説し、併せて儒佛諸道を討究す。天保元年久保田藩に復して佐竹侯に仕へ、程なく幕府旗本近進に召出さる。古史成文、古史徴、古史伝、霊能真柱、印度藏志、出定笑語など著書多く、宣長の説をつぐ復古神道を唱へ、明治初年神佛分離の原動力となる。

平田鉄胤 82才
（享和元―明治三・一〇・二五）
1801 1882

篤胤の養子。家学を継ぎ維新後京都より江戸に出で明治二年侍講に挙げられ、つゞいで大学大博士となり、十三年二月大教正となる。

平野国臣 39才
（文政九―元治元・七・一九）
1826 1864

次郎。福岡藩士。米艦渡航後皇威伸張を図り藩主に建言し禁錮に遇ふ。のち都甲楢彦と変名し、頼・梅田の諸士と京摂の間に奔走、安政大獄に追捕を逃れ、つゞいで西郷・月照の西渡を斡旋、長州に投じ真木和泉守と謀て幕権一掃を企つ。文久三年四月伏見の変に罪を獲、三年三月赦されて入京、国体辨を著はして学習院に入り、その督長として朝議に参ず。八月長州に赴き外艦砲撃を援け七卿解寃に盡力す。十月沢宣嘉を但馬に迎へ生野に義兵を挙ぐ。敗られて但馬に潜伏、竹島直記と変名して再挙を謀るの際追捕に遭ひ京獄に護送、蛤御門の変の翌日獄中に殺る。

平野玄中 45才
（元禄元―享保一七・七・廿三）
1688 1732

金華、子和。陸奥の人。江戸に出で物徂徠に学ぶ。のち常陸守山侯の記室たり。金華文集の遺著あり。

平野五岳 83才
（文化八―明治二六・三・三）
1811 1893

聞慧。眞宗の僧。豊後日田願乙寺に住す。廣瀬淡窓に学び一家をなし、詩・書・画三絶の稱あり。

廣瀬淡窓 75才
（天明三―安政三・十一・一〇）
1782 1856

豊後日田の人。廉卿、求馬、建。はじめ亀井南溟父子に従遊し帰郷後家塾を開き咸宜園と称す。其学大観を主とし、人と同異を争はず儒佛老を善ぶ。門弟三千余、幕府その教化の功を賞し特に苗字帯刀を許す。大村府内二侯亦禮聘して教を乞ふ。著書に遠思楼詩鈔、懐舊楼筆記など数多し。

廣瀬旭莊 57才
（文化四―文久三・八・一七）
1807 1863

淡窓の季弟。謙吉。長兄に就いて学び詩文に長じ、天保七年泉州堺に家塾を開き、のち大坂に移る。つねに尊皇の精神を鼓舞し、大義名分を明かにするを旨とす。吉田松陰、木戸孝允等の志士と親交あり。外交海防に於ける経綸、他日実行に資せんとし発表せしもの多し。梅墩詩鈔、日遠稿、鶏肋集などの著あり。

廣瀬青村 66才
（文政二―明治十七・三）
1819 1884

範治。淡窓の養子。家業をつぎ、のち府内藩の儒員となる。維新後漢学所を経て修史局に入り、のち華族学校教師たり。半込に塾を開き東宜園と稱す。老荘の学を好み、傍ら書を能くす。

廣瀬林外 39才
（天保七―明治七・五）
1836 1874

孝。旭荘の子。淡窓に養はれ、その歿後家塾をつぐ。史学に通じ、詩をよくす。維新後東京に来り史館に入る。

廣瀬武夫 37才
（明治元―明治三七・三・廿三）
1868 1904

豊後の人。海軍に入り、日清役後露国駐在武官たり。三十七年少佐として日露役に出征。旅順港口閉塞に赴き、壮烈なる戰死を遂ぐ。

百里

東伏見宮妃周子女王
明治九・八

依仁親王妃。岩倉具定公の長女。

廣津柳浪 68才
（文久元・六・八―昭三・一〇・一五）
1861 1928

フ

芙蓉峯資

萬庵。江戸東禪寺の僧。幼にして聰敏詩才あり。小文珠と稱せらる。荻生徂徠の門人諸子と交り、詩名一時に高し。

福岡孝悌 85才
（天保六・二 — 大正八・三・五）
1835 — 1919

旧土佐藩士。慶応三年参政に補し、藩主山内容堂の献言を捧げて後藤象二郎等と二条城に将軍慶喜に会見、大政奉還の決意を促す。のち三岡八郎と共に五箇条御誓文を起草す。元老院議官を経て明治十四年参議兼文部卿となり、十七年子爵を授けられ、のち司法卿、枢密顧問官に歴任す。詩書をよくし、号を今霊駝といふ。

福澤諭吉 68才
（天保五・十二 — 明治三四・一・三）
1834 — 1901

中津藩士の家に生る。安政元年廿一才長崎に出で蘭学を学び、翌二年大坂の緒方洪庵に入門。安政五年江戸に来り塾舎を設けて藩の子弟に教授。安政六年、文久元年、慶応三年の三度幕使に随って欧米に渡航す。帰朝後、校舎を新築ほどめて慶応義塾と稱し、独立自尊の旗幟の下に学生を教育す。明治十五年に至って時事新報を創刊し、社会啓蒙につとめ、西洋事情、学問のすゝめ、修身要領、福翁自誌、新女大学など著作甚だ多く、明治の新日本に西洋文化を紹介し、経国経世を教へし功甚大なるものあり。

福島安正 68才
（嘉永五・九 — 大正八・二・八）
1852 — 1919

長野の人。慶応元年江戸に出で講武所に和蘭兵式を学び、明治七年陸軍省出仕。廿年少佐として在独公使館付武官となり、廿五年帰朝に当り、前人未踏のシベリヤを単騎にて横断し、名をあげ、廿九年参謀本部次長、四十年男爵、四十五年関東都督となり大正三年陸軍大将に進む。

福田侠平 40才
（天保五 — 明治六・一・二四）
1834 — 1873

公明、号悠々。旧山口藩士。尊王攘夷の大義を唱へて国事に奔走。元年戊辰の役、鳥羽・伏見に幕兵と戦って功あり、ついで奥州征伐に従軍、各地に転戦して功を樹つ。

福地源一郎 66才
（天保十二・廿三 — 明治三九・一・四）
1841 — 1906

櫻痴。長崎に生れ幼にして蘭語に通じ、維新前幕使の渡欧に再度通辯官として随行、維新後また岩倉大使の外遊などに随ふ。七年末日報社々長となり東京日々新聞を主載、その間株式取引所の設立、帝政党の組織に盡し、また東京府会議長たり、廿年日報社を去り、木挽町に歌舞伎座を創立し座主となり、自ら脚本を執筆す。廿七年再び政界に出で衆院議員となる。小説・戯曲の著多し。

福原越後 50才
（文化十二 — 元治元・十一・十三）
1815 — 1864

元個。萩藩毛利侯の老臣。元治元年朝議一変後、長兵四百を率ゐて上京、藩主の罪を赦されんことを請ひしも容れられず、つひに蛤御門の変を惹起す。のち益田・国司と共に引責自裁す。文学・詩歌をよくす。

福本日南 65才
（安政四 — 大正一〇・九・二）
1857 — 1921

誠。史論家、筑前の人。経国の志あり、明治廿三年菅沼貞風と呂宋に入り、フィリッピン経略を企つ。のち日本新聞、九州日報などに拠り、衆院議員として活躍す。

藤井竹外 60才
（文化四―慶応三・七・廿二）1807 1866

啓、士開、摂津の詩人、賴山陽に学び森田節斎と交りあつし。竹外詩鈔、竹外亭百絶、竹外二十八字詩、などの著あり。

藤井藍田 50才
（文化十三―慶応元・五・十三）1816 1865

平左衛門、徳甫、儒者、夙に勤王志士と往来し、吉田寅次郎（松陰）、桂小五郎（木戸孝允）等と親交あり。のち大坂に家塾を開き算学を教授、元治元年秋、長州藩に通ずること発覚して幕吏のために捕らえられ、翌年西町奉行所の獄に病歿。

藤井九成 73才
（天保九―明治四三・七・十三）1838 1910

勤王家、慶応三年岩倉具視に用ひられて禁門を監視、四年東山道鎮撫總督に従ひ軍監となる。のち宮内省に出仕。

藤井懐斎

藏、勝と稱す、筑後の人、はじめ医を以て久留米侯に仕へしも、のち辞して京師に入り山崎闇斎に学び專らこれを業とす。國朝諫諍録、関際筆記、睡餘録、本朝孝子傳などの著あり。

藤井高尚 77才
（明治―天保十二・八・二五）1830 1907

備中吉備津神社宮司の子。少壮窟に家を脱し本居宣長を松坂に訪ひ、入門して

研鑽七年、帰郷して父の職をつぐ。松の屋、また松斎と号して門弟に国学を教ふ。最も中古体の和文に長じ、著述に大鏡後々釈、消息文例、松の落葉、松舎文集などあり。

藤岡作太郎 41才
（明治三・七・九―四三・六・三）1870 1910

国文学者、金沢の人、明治廿七年東大国文科卒業、二十年三高教授、廿三年東大助教授、廿八年文学博士。著作に日本風俗史、近世絵画史、国文学全史、平安朝篇、国文学史講話、鎌倉室町時代文学史などあり。

藤川三渓 74才
（文政元―明治三十七・）1818 1891

幸ねて西洋銃陣の法を演習し、日柳燕石、小橋安藏等の志士と往来、つひに投獄さる。維新の際出獄、官軍に従って奥羽に轉戰、のち修史局御用掛となる。晩年、水産事業に携はる。春秋大義及び維新実記の著あり。

藤澤東畡 71才
（寛政八―元治元・十二・十六）1794 1864

昌藏、讃州の人、はじめ徂徠学をうけ、のち長崎に支那語を学び、帰って浪華に住み徂徠学を継ぐ。尼崎藩に招かれ、更に嘉永五年秋、高松藩の儒官に擧げられ、さほ浪華に住し泊園書院を以て古学を提唱、尊王の大義を主として孟子の王道を駁す。元治元年藩主と共に京師に至り、二條城に在りし将軍家茂に謁を賜ふ。東畡文集の遺著あり。

藤澤南岳 79才
（天保十三―大正九・一・廿一）
1842 1920

恒、東暎の男。父の教を受け祖徠の学風を祖述し、また尊王の志厚し。維新に方り、高杉晋作等の中に敢然として大義を主張し、藩主の賊名を免れしむ。のち藩政に参與し、講道館の督学たり。のち父の浪華塾を継承し、精神教育につとむ。著書に自警、蒙求新編、林園月令、七番斉類函、文章九格、萬国通議、その他あり。

藤田幽谷 53才
（宝永三―文政九・十二・一）
1774 1826

一正、次郎左衛門。水戸の儒臣。幼時長久保赤水に従ひ江戸に出て志水元禎及び立原翠軒に学ぶ。藩主治保の選抜により彰考館生員に補し、国史編輯に任ず。文化初め治紀の襲くに及んで總裁となり、また郡奉行となりて民政に参ず。正名明義を主とし政教一致による国家経綸を目指し、志士等に影響を與へしこと少からず。

藤田東湖 50才
（文化三―安政二・一〇・二）
1806 1855

幽谷の子。誠之進、彪、虎之助。はじめ彰考館編修に従事、文政十二年斉昭の擁立に奔走、郡奉行として民政を革新し、学職にありては光圀以来の学風を弘む。海防策を講じ尊攘の大義を鼓吹し、斉昭の幕譴を蒙るに際し、倶に幽閉せられ（三年間）、嘉永六年六月斉昭の幕政に参するに至り隨て江戸に在り海防の策を講ず。志士奮起の源泉となる。安政江戸の大震に小石川藩邸にありて圧死。

藤田小四郎 24才
（天保十三―慶応元・三・四）
1842 1865

東湖の四子。信。小野贇男。文久三年春藩主慶篤に従って京師に赴り、各藩志士と謀りて尊攘の朝旨貫徹につとむ。元治元年三月帰国、同志を糾合し田丸直允を首領として義兵を大平筑波の間に起し、攘夷の先鋒たらんことを期し、四方に

檄を飛ばして、幕府の軍と戰ふ。西上京都に赴き情を一橋慶喜に訴へて目的を達せんとし中仙道を進むうち、十二月十日越前新保駅に捕へられ、翌慶応元年二月斬罪に処せられ、水戸に梟せらる。

藤田傳三郎 72才
（天保十二・六―明四十・三・三〇）
1841 1912

実業家。長門の人。夙に尊攘の説をきき、高杉晋作に隨て国事に奔走、維新後実業に従事し、藤田組を興して官廳の用弁及び土木鉱山の事業を経営す。西南の役に官軍の軍需を辦じて巨利を博す。のち藤田組を合名会社に改め社長となる。小阪銅山以下の鉱山開鑿に従ひ、廿九年頃銅價の騰貴により富を加へ、戰後の不況倶楽集に盡力、四十四年男爵となる。

藤野海南 63才
（文政九―明廿・二）
1826 1888

正啓、伯廸。史学家。昌平学校教授より修史局編修官となり、先朝事略廿余卷及び足利徳川時代編年史を編輯し、また水戸党争始末を草す。重野安繹、巖谷修等と親交あり。

藤原惺窩 59才
（弘治三―元和元・九・十二）
1559 1619

肅、斂夫。播磨の人。はじめ佛書を讀み既にして醒然儒に帰し、家学を奉ず。徳川家康京師に在りて経史の講筵を開くや、当時の儒者の皆佛徳なるを見て伍するを喜ばず洛北に韜晦して出でず。而して公卿諸侯の教を乞ふもの多し。のち門人林羅山江戸昌平黌に出仕し、將軍秀忠に惺窩を薦めて参せしめんとせしが適ま病に罹りて歿す。学徳高く、久しく衰微せし孔孟の学を発揚し、儒教の開拓者として功多し。

藤本鉄石 48才
（文化十三・九・二五 1816 — 文久三・八・一八 1863）

眞金、津之助、備前の人、夙に時事を憂へ、国典に委ねしく、殊に絵画に長ず。各地周遊の後、伏見奉行内藤正縄の聘により書を講ず。京摂の間、天下の志士に交はり尊皇攘夷の説を主張す。文久三年八月、中山忠光を擁して大和十津川に義兵を起し、その参謀たり。幕兵に囲まれ、天の川に於て、ひそかに忠光を逃し、自ら決死の士と奮戦し、終に警家口の戦に死す。

藤森大雅 64才
（寛政十一・一 1799 — 文久二・一〇・八 1862）

弘庵、天山、江戸の儒者。柴野碧海・長野豊山・古賀穀堂・同侗庵等に従て学ぶ。のち土浦侯より学政の委託をうく。弘化の初年江戸に移居、教授す。嘉永年間米艦来朝に際して海防備論二巻を著はして硬論を吐き、安政大獄に連坐、遂はれて田野に隠居。新政談、匏笛言、春雨樓詩抄、如不及齋文鈔などの著あり。

ホ

穂井田忠友 56才
（寛永七―天保四・九・一九）1778 1833

国学者。三河の人。歌を景樹に学ぶ。所謂博識家にして最く奈良朝の事物に精通す。観古雑帖、埋麝発香、勝地臆断、万葉地名考、などの著あり。

穂積陳重
（明一六・四―大正一五・四・八）1883 1926

元宇和島藩士。弱冠にして南成学校に学び、明治後英独両国に遊学帰朝後東京帝大教授たること三十年、また帝国学士院長となり学界に貢献すること顕著。のち枢密顧問官に任ぜられ、副議長を経て議長に昇る。大正五年男爵を授けらる。

保田光則 74才
（寛政九―明治三十）1797 1870

国学者。定次郎。仙台の人。和訓栞後編、雅言集覧補遺、言葉打名図考ほどの著あり。

帆足万里 75才
（寛永七―嘉永五・六・二四）1778 1852

鵬卿。里吉。号文簡。豊後日出藩執政通文の二子。脇蘭室に従って学び、経史に通じ蘭学を修む。夙に勤王の念深く東潜夫論を著はし皇室の式微を歎ず。天保末烈公用ゐんとして革命論に罹り果さず。藩の武頭格となり、家老に任ぜられ、宿弊を一洗。假字考、修辞通、窮理通、四書標注などの著あり。三浦梅園、廣瀬淡窓と共に九州三傑人と稱せらる。

帆足杏雨 75才
（文化七―明治一七・五・二六）1810 1884

画家。遠。庸平。豊後戸次の人。田能村竹田、浦上春琴に画を学び、詩史を帆足万里、廣瀬淡窓、頼山陽に学ぶ。弘化中禁廷の命により大画を作りて献ず。

暮柳（希因） 51才
（元禄十三―寛延三・七・十一）1700 1750

俳人。加賀の人。緒屋彦右衛門。暮柳舎と号す。北枝、乙由に学び、北柳の号をつぎ百鶴園と称す。

細井廣澤 78才
（寛政元―嘉永三・十二・廿三）1756 1855

知慎。次郎太夫。儒を以て江戸に出で柳沢侯に仕へ、のち兄知名の遺志をつぎ保元以降六百年間の山陵の不明ふるもの廿五ヶ所を調査、藩主吉保に建議して修築、元禄十年八月、為めに禁庭に召さる。後讒に遇って退き、爾後書法を研究、名人の域に達す。晩年幕府に召されて政事に参与。

細井平洲 74才
（享保十二―享和元・六・二九）1728 1801

徳民。甚三郎。尾張の豪農の子。夙に経史を渉猟し、十八才に及び長崎に遊び名流と交はる。のち江戸に出て教授。上杉鷹山侯の聘に應じて米沢に至り、興譲館の建設に與り、一国の師表たり。安永九年尾張侯の侍讀に任じ、親衛隊将に列せらる。天明二年江戸に新邸を賜はり、のち明倫堂督学に任じ、大いに教化の実を挙ぐ。

細井九皐（天明二・五・四）

廣澤の男。父の業を承けて書を能くす。のち夢に出して仕籍を削らる。

細谷仲育 22才（天保十二―文久二・五・一 1841―1862）

勤王家。平山兵介・鶴義 水戸藩士。文久三年正月十五日 安藤信正を坂下門外に襲ひし一人。

本田親雄 81才（嘉永二・九・六―明治四・三・二 1829―1909）

旧鹿児島藩士。文久元年京都邸に在りて寺田屋騒動の負傷者救護に盡し、また三年三月宸翰を島津久光に達する忠功少からず。維新後官に出仕、貴院議員、錦鶏間祗候を経て枢密顧問官に任ぜられ、男爵を授けらる。

本間游清 75才（安永五―嘉永三・八 1776―1850）

伊豫吉田侯の藩医にして村田春海門下の国学者。作歌数多く、また有職に通じ類聚雑抄、有職問答、織文図会、服飾図解、公武装飾考、などの著あり。

本阿彌長根 78才（明和五―弘化二・六・一〇 1768―1845）

江戸の狂歌師。本阿弥光悦六世の孫にしてその別家。校正古刀銘鑑を著はし家傳の秘訣を公刊し宗家に忌まれて職を退き、狂歌を專らにして二世宇三二、のちに芍藥亭と号す。

本因坊丈和 61才（天明七―弘化四・一〇・一〇 1787―1847）

棋家。十二世名人。九段に陞る。

穆山

細谷半育 77才（享保十二―享和三・十一・六 1729―1803）

離斗南。儒者。伊勢の人にして大坂に住し、はじめ徂徠の学を奉じ、のち考証学をもらにす。著書に周易說統、書說統、その他あり。詩・書を能くす。

マ

間崎哲馬 30才
（天保八―慶応三・六・八）
1837 1867

号滄浪。勤王家。土佐の人。十六才江戸安積艮斎に入門。十九才帰家。大酒を難ぜられ文久元年徒士を免職。尊攘の同志と江戸に至り、水藩士住谷金子等と結ぶ。のち藩論二分に際し、青蓮院宮の手書をとり、藩主豊信に人才登用を勧めしも、正論党と稱するものに排斥され、責を問はれ捕へられて本藩に護送、死を賜ぶ。

間島冬道
（明治廿三・九・三〇）
1890

実業家。また歌人。旧尾張名古屋藩士。維新の初め権弁事より湯谷県知事となり、のち十五銀行支配人。日本鑛道会社検査役となり、宮内省御歌所寄人に列す。

真木和泉守 51才
（文化十一―元治元・七・廿一）
1814 1864

保臣。夙く水戸に遊び会沢安に学びて帰る。嘉永五年時務を痛論して藩侯に呈せしため、罪を獲て幽せらる。文久元年平野国臣来るに及び倶に意見を島津久光に建言。翌年竊に脱して鹿児島に赴き久光の上京をすゝめ、のち京坂に赴き伏見寺田屋に会し義挙を企て再び久留米幽囚。のち解かれて上京、三条・中山諸卿の信任をうけ名を浜崎冬夫と改め、久坂・轟の諸士と連署、攘夷決行を朝廷に迫る。文久三年八月七卿落に三条実美に随行。元治元年五月自ら忠勇隊を率ゐ七卿復官長侯解寃の陳情書を呈し闕に迫るの際、疵を負ひ、天王山に還り自刃す。
弘。助太郎。京師の儒者。若槻幾斎に就いて学び、兼ねて書を能くす。

摩島松南 49才
（寛政三―天保一〇・五・一八）
1791 1839

萬里小路博房 61才
（文政七・六―明一七・二）
1824 1884

従一位正房の男。賀茂社、神宮に仕ふ。明治二年七月宮内卿、五年四月皇太后宮職用掌務仰付けらる。

蒔田暘斎

器。亀六。伊勢の人。能書家として名あり。

正岡子規 36才
（慶応三・九・一七―明三五・九・一九）
1867 1902

増島金之丞
（明治六―天保一〇）
1769 1839

固。号蘭園。夙く幕府に仕ふ。文化四年昌平黌出役となり、七年儒員試職。つゞで儒員となる。讀易小言、讀左筆記、学庸参辨などの著あり。

股野琢

（明治廿七年八月二十五日）
股野達軒の長子にして官吏。

町田久成 60才

（天保九―明治三〇・九・十三）
1838 1897

鑑識家また時人。号石谷道人。鹿児島の人。壮年江戸に来り林鶯渓の門に入りて漢学を修め、明治初年参議となり、のち帝国博物館長、元老院議員。晩年仏学に志し薙髪して江州三井寺光浄院の住職となる。

松浦竹四郎 71才

（文政元―明治廿一・二・一〇）
1818 1888

弘化元年より蝦夷樺太を探検、江戸に来り斉昭に謁して蝦夷拓殖防備の急を説き寵遇をうけ、東湖、天山、松陰等と交誼厚し。安政年間蝦夷探検に尽し、維新後蝦夷地開拓御用掛となる。三航蝦夷日誌、蝦夷全図、東西蝦夷日誌、などの著あり。

松浦詮 69才

（天保十一・一〇―明治四・四・十七）
1840 1908

旧肥前平戸藩主。漢学を朝川善庵に、国学・有職を橘守部、高田与清に学び、茶道生花弓術諸礼式などに通ず。安政年封を継ぎ侍従の役、秋田に出兵功あり、維新後平戸藩知事、廃藩後、廃香間詰候、御歌所賛者などに厂任。十七年伯爵を授けらる。廿一年常宮御養育主任となり、廿三年以後貴院議員、のち御歌所参候となる。石仏流、鎮信流茶道の家元として風流の道にも通達。

松岡玄達

（享保三・七・十二）

松方正義 90才

（天保六・十・三五―大正十・七・二）
1835 1924

如庵。本草家。京都の人。はじめ尚斎、仁斎に儒を学び、のち稲若水に就き本草学を修め、兼て医をもよくす。著作に櫻品・千金編樂註・本草彙言摘要、本草一家言、などあり。

旧鹿児島藩士。文久二年藩主に従って京坂の間を往来、蛤御門の変に奮戦す。明治元年大久保利通の推挽により日田県知事となり、のち大蔵省に出仕、十三年内務卿、十七年太政大臣。前後五回に及ぶ。その間横浜正金銀行の創設、金本位制の実施など功績甚大。日露役後大勲位侯爵、翌後元老たり。大正十年九月公爵に陞せられ、薨後国葬となる。

松崎観海 51才

（享保〇―寛政四・十二・廿三）
1725 1795

木蔵。丹波篠山侯の執政。幼にして父白圭に従って江戸に至り、太宰春台、服部長英に学ぶ。のち世子の傅となり侍讀を兼ぬ。六術、観海詩文集などの著あり。

松崎慊堂 74才

（明和八―弘化元・四・廿二）
1771 1844

復、退蔵。肥後の人。十才父の意により僧となりしも、のち儒として立つの志を起し、脱して江戸に遁れ、昌平黌に学ぶ。林述斎に認められ、佐藤一斎と切磋す。文政二年掛川藩主太田資愛の聘に応じ藩学教授たり。世子資順立つに及び信任更に厚し。朝鮮使節来聘に当り、林家の鷹により応対す。のち江戸市外羽沢に隠居し、居を石徑山房と称す。

松田直兄 72才
（天明三―嘉永七・二・二）
1783 1854

国学者。号藤園。賀茂の縣主。正四位下伊豫守に叙任せらる。歌文を能くし、言葉直路、藤園雜歌などの著あり。

松田重助
（元治元・六・六）

範義。肥後の勤王家。変名波多野右馬助と稱し、尊攘のため諸国に潜行。諸所に勤王の大義を説く。元治元年六月五日夜京都三条池田屋に宮部鼎藏吉田松陰と会合の際、新選組の襲撃を受け、傷を蒙り、一旦獄につながれ翌日死す。

松平定信 72才
（宝暦八・十二―文政十二・五・十三）
1758 1829

中納言田安宗武の三男。年十八奥州白河藩主松平定邦の嗣となり越中守に任じ、治政廿五年領内の弊習を刷新す。天明七年幕閣老中首座に列し、將軍家斉を補翼し、幕政諸般の改革を行ふ（寛政の改革）。其間内裏炎上に際し造営總督たり。光格天皇御生父典仁親王の尊号一件後、寛政五年退職。六年従三位に叙せられ、以来房總海防の事を掌り、陰陽二ケ所の台場を築造す。九年四月五十五にして致仕、集翁と号し閑居す。和歌に巧みにして家集三草集、隨筆花月草紙あり。

松平定常（冠山）
（文政十二・七・九）
？才

池田冠山。縫殿頭。因幡若櫻藩主。文学に造詣深く、和漢の書に通じ致仕後は著述を專らにす。

松平慶永
（文政十・九・二―明治廿二・六・三）
1828 1890

幕末の越前福井藩主。従位田安宰相の子。号春嶽。攘夷を主張して井伊直弼の違勅を責め、水戸烈公と共に安政大獄に坐す。維新後、議定職、民部卿、大藏卿を歴任。太学別當兼侍讀に任ぜらる。三年七月退職、爵香同様侯に特ず。のち廿二年一月、その勲功により嗣子茂昭に侯爵を授けらる。

松林伯圓 74才
（天保三―明治三八・二・八）
1832 1905

講釈師。下野の人。十七才にして講釈師伊藤湖花の門人となり朝林と号す。廿六才の時初代伯圓に養はれ、その後を襲ぐ。

松本才次郎
（天保五・十一・九）

愼、号愚山。儒者。京都に生れ、大坂に住す。續政蘇手簡、愚山詩文稿、周易一論語一孝経箋註などの著あり。

前田陸山 47才
（文政元―元治元・十二・一九）
1818 1864

孫右衛門。利清。勤王家。長州藩士。藩内の紛争に関し元治元年斬に処せらる。

前田正名

前田夏陰 72才

（寛政九―天保元・八・二六 1797 1838）

江戸の国学者。清水浜臣に学び、はじめ烈公の愛顧を受け、慶喜公の師たり。嘉永二年以後幕府に召出され、勘定格となり、蝦夷志料編輯の命を蒙る。業半ばに元治元年歿。萬葉集私記、稲荷神社考、鶯園叢書の著あり。篤胤・隆正・復斎・芳樹・広足等と親交あり。

前野良澤 81才

（享保八―享和三・一〇・一七 1723 1803）

蘭学の先駆者。世々医を以て中津藩奥平侯に仕ふ。吉益東洞に医術を学び、のち青木昆陽に蘭学を受く。明和七年藩主昌庶に従ひ中津に帰るの時、請ひて長崎に至り蘭学を専攻、学成りて江戸に還り杉田玄白と人身解剖を研究す。数年後解剖書を飜訳、発行。爾後益々泰西の学術・医業を弘め、蘭化先生と呼ばる。屢々松平乗邑・羽に招かれて和蘭風俗制度の諮詢に應ず。解体新書、和蘭譯筌、地学通、其他数十種の譯書を著はす。

前原一誠 42才

（天保六―明治九・十二・三 1835 1876）

彦介郎、八十郎。山口藩士。松下村塾の高足にして、のち長崎に英学を修む。文久元年江戸より帰国、練兵学校舎長となる。慶応元年奇兵隊中の俗論を掃蕩し、翌年幕軍との戦に参謀となり小倉城を陥る。三年小姓筆頭、海軍頭取、維新の初め干城隊の副總督として奥州に戦ふ。つで参議兵部大輔に累進す。南もふく鎮官藩政改革のため萩に帰る。七年佐賀の役、県下の動揺を鎮む。九年徴されて東上、南もふく朝議と合はず帰国、翌月奥平謙輔等と閣下伏奏の議起り、官兵と戰端を開くに至る。十一月二日縛につき、つで斬に処せらる。

丸山作樂 60才

（天保七・一〇―明治廿二・八・九 1836 1889）

志士。また時人。肥前島原藩士。明治三年徴士となり、神祇官に出仕、維新の改革を為ぼす。五年公卿愛宕氏を戴いて神政回復を企て終身禁錮に処せらる。十三年一月特赦出獄、山縣麾下の帝政党に参じ、明治日報を発刊。十九年宮内省図書頭となり、つで海江田信義と共に渡欧、帰朝後帝室制度取調係となり、廿三年元老院議官、のち貴院勅選議員となる。

巻菱湖 67才

（明和四―天保四・四・七 1767 1833）

書家。大任、致遠。新潟の人。年十九にして江戸に出で亀田鵬斎に学び、聲韻訓詁の学を講じ、好んで唐詩を作る。のち江戸に塾を開いて書法を教授す。

ミ

三浦梅園 67才
（享保八―寛政元・三・一四 1723―1789）
晋、安貞、儒者また経済家。天地造化の理を考へ、天地は唯是れ一気物。気外に物なく、物外に気なしとの宇宙観に到達。玄語・贅語・敢語を著す。経済学の先駆者として卓見を有し、天明四年竹渠侯 松平親賢の聘に応ず。

三島毅 90才
（天保元―大正八・五・十三 1830―1919）
号中洲。漢学者。備中の人。山田方谷、斎藤拙堂に学び、松山藩板倉侯の儒員となり、幕末藩主の朝敵の謹を蒙るに際して奔走。維新後司法省に出仕、明治十年番町に二松学舎を開き儒学教授。のち検事、大学教授となり、廿九年東宮侍講。文学博士を授けられ、大正四年宮中顧問官に任ぜらる。七経私記、中洲詩文稿の著あり。

三島自寛 ?68才
（文化九・四・二六）
景雄。吉兵衛。江戸の歌人。縣居門下にしてのち薙髪、自寛と号す。

三原秀伯
江戸町医。芝露月町に住み、のち代々谷大木戸に移る。蘭方を以て小倉藩に仕ふ。

三宅石庵 68才
（寛文三―享保一五・七・二六 1663―1730）
正名。京師の人。弟観瀾と共に江戸に出で儒学教授数年。三十二才京師に帰る。讃岐の木村氏に客たること四年。のち大坂に居て程朱の学を唱ふ。中井甃庵等相謀りて幕府に請ひ尼崎に懐徳書院を建つるや、これに長たり。また書、和歌、俳諧を能くす。

三宅春樓
正誼。石庵の男。

三輪信善
文久三
友衛門。勤王家。水戸藩士。夙に雪冤奉勅のために盡力。文久三年藩主慶篤に従って上京、公子昭訓・昭武を輔佐す。徳川慶喜の大政を返上するや朝廷を以て泉涌寺山陵を守護せんとし、俄かに病歿す。

三輪田元綱 54才
（天保九―明治三十一・一〇 1838―1898）
綱一郎。旧伊豫松山藩士。近藤芳樹、平田鉄胤等に国学を学び、尊攘を唱へて志士と交はる。文久三年二月師岡節斎と謀り、京都等持院の尊氏等の木像の首を斬りて三条河原に梟し、ために豊岡に幽せらる。明治元年大赦にあひ、官につきて外務大丞たり。元道の父。

三井八郎右衛門
（天保四・二―）

三輪執斎 76才
（寛文九―寛保四・二・二五 1669―1744）

善蔵、京都の儒者。年十九、佐藤直方の門に学び、のち王陽明の良知の説を喜び、士大夫の間に講説す。和歌を中院内大臣に学びて秘奥に直ず。著書に傳習録標註、四言教講義などあり。

箕作秋坪 62才
（文政八・十二・八―明治一九・十二・三 1825―1886）

津山藩士。江戸に来り古賀侗庵の門に入り、のち箕作氏（本姓菊池）の養子となり、大坂に赴き緒方洪庵に従って蘭学を修む。江戸に還り蕃書取調所教授手伝、外国方勤務たり。遂に幕府に徴され使節に随行して両度渡欧す。維新の際、三叉学舎を開き大いに教育に尽す。のち学士会院会員に選ばれ、東京教育博物館長兼東京図書館長に任ず。箕作奎吾、佳吉、元八、菊池大麓等の父。

箕作阮甫 66才
（寛政一〇―文久二・六・一七 1798―1863）

津山侯の侍医。美作の人。文政五年侯に従って江戸に出で、宇田川玄真の和蘭学の説に服し西洋医術を学ぶ。天保十年幕命により天文台訳員となり、嘉永六年プチチン来航に当っては川路聖謨等に随行す。安政三年蕃書取調所教授、文久二年幕臣に擢んでらる。外科必読、産科簡明、泰西名医彙講、海上砲術全書などの著あり。秋坪の養父。

箕浦専八

土佐の人。（幕末）

壬生基修 72才
（天保六・三―明治九・三・五 1835―1906）

旧公卿。三条実美、姉小路公知等と尊攘論を標榜、文久三年月国事掛寄人となる。廟議一変に遭い実美等六卿と共に西走。維新後、参与となり陸軍将校として会津征討に当る。東京府知事を経て八年元老院議官、十年一月廓奢間祗候仰付けらる。以後屢々貴院議員たり、廿四年二月伯爵を授けらる。

水野忠邦 58才
（寛政六・六・廿三―嘉永四・二・九 1794―1851）

唐津城主忠光の才二子。寺社奉行、大坂城代、京都所司代を経て文政十二年西丸老中、天保五年本丸老中となり、十二年家斉の薨後、家慶の信任厚く、政治上の大改革（天保の改革）を行ふ。峻厳に過ぎて人望を失ひ十四年九月免職。十五年再び老中に任じ閣老の首班たりしが、弘化二年二月免官、九月隠居蟄居を命ぜられ、本領を削られ出羽山形に移封、失意の裡に歿す。

皆川淇園 74才
（享保一九―文化四・五・二六 1734―1807）

恩、文蔵、号節斎。京師の儒者。字義を重んずべきを主張し、六経、語孟等の書に徴して孝悌、忠信、仁義、道徳を審択して名疇六篇をつくり、また詩易書、礼記、周礼、学、庸、語、孟の釈解を作る。弟子三千余名、公卿諸侯も多し。文化二年学堂を建て弘道館といふ。前掲の外、易原、易学問物、老子釈解などの書あり。傍ら書画を能くし、画は応挙に学ぶ。

南川維遷

士長、号金渓。伊勢の人。京師に医を業とし、傍ら詩文をよくす。富て閑散餘録数巻を著はし、江戸に来り諸家を訪問して餘録に洩れたる話説を補ふ。のち荻野侯の儒臣となる。龍草廬に学びしことあり。

湊長安
天保九・六・七

蘭医、丹波笹山藩青山侯に仕ふ。

宮田迂斎 66才
（享保三―天明三 1718―1783）

三右衛門、子亮、大和の人、太宰春台に従って学び、のち本多侯の儒官となる。

宮原節庵 80才
（文化三―明治一八・一〇・六 1806―1885）

（潜史）

諫蔵、儒者また書家、尾道の人、頼山陽に学び、のち京都に塾を開き儒学教授をふし、能筆として聞ゆ。

宮部鼎蔵 45才
（文政三―元治元・六・五 1830―1864）

増実、肥後の人、伯父増美に就きて兵学を修め、熊本藩に召出さる。嘉永末、老臣有吉氏に従って江戸に在り、吉田松陰と共に東北諸州を遊歴す。文久三年京都に出で諸藩勤王の士と交はる。三年朝廷守衛の兵士三千人を列藩に徴するや擢んでられて魁監となる。七卿西下を警護、以後回復のために斡旋し、真木保臣等と忠勇隊を組織し、元治元年密に上京、朝廷に哀訴せんとす。六月五日同志の士を池田屋に会するや、会津藩兵に襲はれ、衆寡敵せず自刃す。

ム

陸奥宗光 54才
（天保一四―明治三九・八・二四）1843―1896

元和歌山藩士。維新の際脱藩して土佐に至り坂本龍馬と交はり、また山口に遊び伊藤・井上と共に国事に奔走。明治元年外国事務局に出仕。十一年六月国事犯として入獄。翌年四月特赦出獄。泰西に遊ぶ。帰朝後特命全権公使としてワシントンに赴く。廿二年農商務大臣、衆院議員。廿五年枢密顧問官。廿六年外務大臣。廿七年日英條約改正の功により子爵。廿八年下関條約の功により伯爵に陞る。廿九年五月末病を以て退官。

向山黄村 72才
（文政九―明治三〇・八・一二）1826―1897

栄五郎。詩人。幕府旗本の士。若年寄となる。幕府の公使としてフランスに赴き、ナポレオン三世に謁せしことあり。帰朝後幕府はすでに瓦解。慶応四年三月若年寄を辞し、爾後悠々自適す。

村岡（老女） 88才
（天明六―明治廿六・八・二三）1786―1893

津崎矩子。近衛家の老女。幕末尊攘運動の同情者たり。安政・文久の両度囚はれて江戸に禁錮。維新に際し賞典禄二石を賜はり、爾後嵯峨の山荘に閑居。

村岡良弼

明治時代の地理学者。日本地理誌料の著あり。

村井椿寿 83才
（享保七―文化十二・三・十一）1732―1815

医家。号琴山。熊本の人。上京して吉益東洞につき古医方を学ぶ。東洞より関西古方の任を嘱され、帰郷して傷寒論を講ず。和方一萬方を著はすに及び

幕府の命により一部を進納。銀十枚の賞を受く。年五十余はじめて藩に仕へ、のち侍医となる。兼ねて詩文を能くし、城中の名流と往来す。著書に前記の外主方考、墓量考、琴山詩文集、診餘漫録などあり。

村上佛山 70才
（文化七―明治十三・九・二七）1810―1879

剛。彦左衛門。詩人。豊前の人。幼時筑前に遊び亀井昭陽に学び、のち京都に学びて帰郷後、内弟に教授。遺稿多し。

村雲尼公
（大正九・三・廿二）

日栄。伏見宮邦家親王の女にして、京都瑞龍寺門跡。明治初年皇族の佛門に入るを禁ぜらるゝや、平民となりて尼生活をつづく。日露役後、感ずる所あって村雲婦人会を起し、全国に五万の会員を得るに至る。

村瀬藤城

聚。平助。美濃の人。頼山陽の門弟にして史学・文章をよくす。

村田春門

国学者。号田鶴廼舎。樂前郁子園。伊勢白子の人。江戸・大坂に住む。古学・詠歌を唱へて一家をなし、門弟に教ふ。著書に独話小録、客話小録、田鶴廼舎随筆、鱧守家集などあり。

村田春野

春海の息。七郎左衛門（のち大完）　家学を継いで教授す。詠歌大概抄、多豆毛夜ふとの著あり。

村田了阿　72才

（寛永元―天保四・一二・一四）　1792　1843

高風、小兵衛、一枝堂、江戸浅草の煙管屋に生れ、佛典を研究、年三十余にして剃髪、了阿と改名、歌を清原雄風に、書を東江源鱗に学ぶ、考証千典、俚言集覽ふとの著あり。

村田清風

四郎左衛門（のち織部）　長門藩士、長州の内政に功あり、僧月性等と交はりて時事を慨し、将に為すあらんとして安政初年病歿す。

村田新八　42才

（天保七―明治一〇・九・二四）　1836　1877

經磨（のち経満）　鹿児島藩士、戊辰の役奥羽出征に功あり、明治二年常備隊砲兵隊長となる、四年宮内大丞として岩倉大使に随ひ欧米視察、七年帰朝後辞して帰国、私学校創立に盡し、砲隊学校監督となる、十年熊本の役に隆盛の参謀、九月城山に官兵を拒ぐこと三旬、廿四日岩崎谷に奮戰して死す、年四十二、

村山半牧（荷江）　44才

（文政八―明治元・六・十四）　1825　1868

秀一郎、勤王家、越後三条驛の人、京師に出で藤本鉄石・伴林光平と交り時事を慨歎す、鉄石の挙兵敗死後、善後策に奔走、明治元年、鎮撫總督の高田に至るや、これに応じんとし、長岡の士人より追究せられ、逃走してつひに自殺す。

村山覚馬（鶴助？）

土佐の人。

室鳩巣　77才

（萬治元―享保十九・八・十二）　1658　1734

新助、直清、滄浪、幕府の儒官、備中の人、年十四加賀侯に召されて禄を受く、木下順庵の門に遊び、羽黒成実に山崎派の学を学ぶ、正徳元年新井君美の薦により幕府の学職に挙げらる、三年、邸を駿河台に賜はり、駿台先生の稱起る、将軍吉宗、職を継ぐに及び、侍講となり政事の得失を諮問し、また政書の講演を命ぜらる、其間経書の衍義を著はし、章句の蘊を発明し、赤穂義人録を著はし世論の帰着を一定す、著書駿台雑話は最後の病間に成り、将軍の旨によってこれを呈す、その他文集前後三十三巻、補遺十巻あり。

モ

毛利元徳 57才

（天保十一―明治三九・十二・二五）
1840 1896

幕末の長州萩藩主。文久三年朝命を奉じ上京して輦下を鎮し、公武間周旋の功により御衣を賜ぶ。三年八月攘夷を唱へて幕府より入京を禁ぜられ、元治元年十一月官位を剝はれ、また幕府よりの姓名の使用を禁ぜらる。形勢一変、慶応三年十二月再び京師に召され、官位を復し、明治元年議定、二年参與となる。廢藩置縣に及んで山口藩知事となる。公爵を授けられ、薨後野田神社に合祀せらる。

物集高世 61才

（文政六―明治二六・一・二）
1823 1893

桙築の人。はじめ藩の儒士に漢学を受け、慶応四年旧桙築藩より命ぜられて神官教授方并国学教授となる。明治二年神祇官宣教使、三年宣教权少博士、言語学に功績多く、神道本論、口辞格考、古界轉覆論稿などの著あり。

本居宣長 72才

（享保五・六・七―享和元・九・二九）
1730 1801

健藏、中衛、号鈴屋。伊勢松坂の人。京都に留学して堀景山に儒学を、武川法眼に医術を学び、帰郷後医術開業併せて子弟に国典を教授す。留学中契沖の学風を識り、帰郷後賀茂真淵に入門、書簡の往復によりて教を受く。寛政六年六十五才紀州侯に招かれ、爾後屢〻御前講義に赴く。契沖・真淵の業績をつぎ、古事記を中心とする古典の解明につとめ、劃期的なる大著古事記伝

をはじめ、玉かつま、くづばな、玉くしげなど多くの著書をもし、本邦古代文化の宣揚に功績多大なり。

宣長の長男。健藏、健亭。父の志をつぎ古学を研究。年三十三眼疾を患ひ失明せしも、攻学怠らず松坂に在りて子弟に教授。特に語学上の貢献多く、詞八衢、詞通路及び家集後鈴屋集などの著あり。

本居大平 78才

（宝暦八―天保四・九・十二）
1758 1833

本姓稲懸氏。松坂に生れ、夙に宣長に学び、寛政二年四十四才にして、失明せし春庭に代りて宣長の養子となり、学統をつぎ、三河石衛門と称し、紀州侯に仕へ、主として和歌山に居住。古学要、玉鉾百首解、藤垣内文集、などの著あり。

本居豊穎 80才

（天保五―大正二・二・一五）
1834 1913

内遠の子。父の後をつぎ、明治初年神祇官となり、諸社官司を歴任し、大教正に進む。東京女高師教授、東宮侍講、御歌所寄人、東大講師を務め、三十九年学士院会員。四十二年文博となる。門人に萩野由之・関根正直・坂正臣等あり。

（本居家系図）

宣長―春庭

春庭―大平（養子）―内遠（大平の婿）―豊穎―長世

元田永孚 ナガフ
（文政元・一〇・一―明治廿三・一・廿二）
1818 1890

遜、号東野、熊本の人、時習館に学び、横井小楠等と共に学問に居察たり、維新後東京に出で、宣教使となり、四年五月宮内省に出仕、爾後専ら侍讀をつとめ、天皇の御信任厚し、十九年宮中顧問官、廿一年枢密顧問官となる、経筵進講録、書経講義幼学綱要などの著あり。

森有礼 アリノリ 43才
（弘化四―明治廿三・二・十二）
1847 1889

鹿児島の人、慶応元年藩より選ばれ、五代友厚に従ひ渡英、ロンドン大学に入り物理、化学を学び、三年七月米国に赴き、明治元年帰朝、西洋の制度文物輸入を建言、八年清国全権公使、十八年伊藤内閣の文部大臣となり、大に学政革新を行ふ、廿年子爵を授けらる、極端なる欧米尊重ゆゑに保守派に悪まれ、廿二年二月十一日憲法発布式（参朝の途刺客西野某に襲はれ、翌日絶命す。

森鴎外 61才
（文久三・二・一―大正一一・七・九）
1862 1922

森篤次郎 42才
（慶応三―明治四一・一・一〇）
1867 1908

鴎外の弟、明治廿四年医科大学卒業、直ちに駿台佐々木病院の助手となり、のち京橋南紺屋町に開業、三木竹二と号して劇評家として活躍す。

森槐南 47才
（文久三―明治四四・三・七）
1863 1909

詩人、大来、泰二郎、名古屋に生れ、父（春濤）及び藤津毅堂、三島中洲（清人）金子鶴穂等に就き漢学を修め、明治十四年太政官に出仕、のち文科大学講師となる、詩学に造詣深く、兼ねて字韵及び明清傳奇に精通、伊藤博文に知られ諸所に随行、四十二年パルビンの難に同じく銃創を蒙る、四十四年文学博士となる、唐詩選評釋、補春天傳奇、古詩平仄論などの著あり、また隨鴎吟社の盟首たり。

森川竹窓
（宝暦十三―天保元・十一・三）
1763 1830 68才

書家、また画及び篆刻を能くす、和州の人、十才の時江戸に出で佐竹侯に仕ふ、数年ならずして致仕、浪華に移住、集古十種編纂に際し嘱託を受け盡力す。

門田朴斎 モンデン 77才
（寛政九―明治六・一・十二）
1797 1873

尭佐、重隣、備後福山藩の儒者、少くして菅茶山の門に入り、その歿後は頼山陽に学ぶ、文政十二年藩の儒官となり江戸邸に移居、藩主阿部正弘の侍讀たり、正弘の免職に及んで帰国閑居、のちまた正方、正恒をたすく、朴斎詩抄、葉北詩抄などの遺著あり。

ヤ

屋代弘賢 84才
（宝暦八―天保十二・閏正・一八）
1758―1841

太郎、輪池、国学者、幕臣にして右筆たり、和歌は冷泉為村、唐木を師とし、成島司直、平田篤胤とも親しく、書は弘法大師、趙子昂の跡を慕ひ、近世の名人と稱せらる、博識多聞、大著古今要覽の他、道の幸、高野大師書訣註伊勢物語校異ふどあり、

矢野玄道 65才
（文政六―明治二〇）
1823―1887

愛媛の人、茂太郎、号谷蟆、篤胤の門に入り国学を修め、のち昌平黌に入り漢学を古賀侗庵に学ぶ、京都にて伴信友に接し、又縉紳及び社寺について古書講究、廬山寺にて一切経の校合をふす、維新前後、玉松操等と国事を議し、近藤勇に捕へられしことあり、明治初年神祇官に出仕、のち宮内省の御系譜編纂に従ふ、皇典翼、續日本紀私記、文徳実録私記ふどの著あり

矢野文雄 82才
（嘉永三・十二―昭和六・一八）
1850―1931

龍渓、豊後の人、慶応義塾に学ぶ、明治十年報知新聞に関係、つゞで大蔵省に仕官、傍ら「経国美談」にて文名をあぐ、廿九年駐支公使、卅二年政界を隠退、のち太毎に入りて副社長、昭和二年未逝く、浮城物語、日本文体文学新論、英米律記ふどの著あり、

安井息軒 78才
（寛政二―明治九・九・二三）
1799―1876

衡、仲平、日向の人、はじめ大坂の篠崎小竹に就き、のち江戸に至り昌平黌に入り、儒者として頭角を現はすに至る、海防私議、管子纂註、左伝輯釋、論語集說ふど著述多し、

安岡良亮
明治九、

勤王家、土佐の郷士、漢学に通じ詩文を能くし、勤王の事業に盡す、郡府付属の学校行餘館の文武導役をつとめ、のち明治元年東征の役に従軍、集議院判官、民部少丞より高崎及び度会縣参事、熊本縣令に任、明治九年熊本暴徒の変に死す、

安田躬弦
―文化十三・正・五）
号 柬本（カンボモト）、賀茂季鷹門下の国学者、醫を業とす、

安田善次郎 84才
（天保九・一〇・九―大正一〇・九・二八）
1838―1921

富山の人、二十才江戸に出で、廿七才両替店安田屋を開く、維新後、十三年安田銀行を創立、爾後銀行保険業に携はり、財界の一中枢となる、大正十年九月末、朝日某のために刺されて死す、

柳原前光（ヤナギハラ サキミツ）44才
（嘉永四―明治二七・九・三）
1851 1894

堂上華族にして幕末王事に勤労、戊辰の役東海道先鋒總督の任を帶び、進んで江戸城を請取る。維新後清国に使して条約を締結、のち露、清に公使たり、元老院議長、枢密顧問官となる。また特命を蒙り皇室典範の編纂に従事す。

梁川星巌 70才
（寛政元―安政五・九・二）
1789 1858

孟綽、新十郎、山陽の文に於けると並稱さる、詩人。古賀精里、山本北山に学ぶ。対外硬論を唱へ、安政大獄の年歿す。門下に大沼枕山、小野湖山、鰲松塘、江馬天江等あり。詩集に星巌集あり。

梁田蛻巌（ヤナダ ゼイガン）86才
（寛文十二―宝暦七・七・一七）
1672 1757

邦美、才右衛門、上野厩橋侯酒井氏の世臣。人見鶴山に学ぶ、のち間斎の著書に傾倒す。廿三才江戸に書を講ず、廿六才新井白石を識り、また鳩巣、観瀾と交はるに至る。四八才赤石侯の文学となる。程子の学を修め、禪に参じ、また神道を信じ、三者の鼎立し得るを説く。詩に長ず。蛻巌問答書、詩文集、清詩選、学範などあり。

大和國之介（ヤマトノクニノスケ）30才
（天保六―元治元・二・二九）
1835 1864

長州藩士。万延元年三月江戸藩邸の留守居となりしも、時局を慨して辞し、航海術を学ぶ。文久三年世子の奥番頭となり、高杉晋作等と横浜の洋館を火かんことを謀り果さず。元治元年京変により党議起り奸徒の束ずる所となり毛利登人等と共に野山獄に繋がれ、連累者と同じく獄中に殺る。年三十。

山岡鉄舟
（天保七・八―明廿一・七・一九）
1836 1888

鉄太郎、幕臣にして眞影流剣術、檜原流槍術の大家にして甲州流軍学に通ず。明治元年官軍の東下に際し、単身駿府に至り西郷吉之助（大総督府参謀）と会見し、慶喜の恭順を告げて、江戸を兵火より救はんことをとひ、西郷の江戸着後、更に勝海舟を交へて懇談、ついに和平解決に成功す。維新後地方官を経て侍従となり、天皇の御信任を蒙る。坐禪辯道の功を積み、また書を能くす。

山鹿素行 64才
（元和八―貞享三・九・二六）
1622 1685

甚五左衛門、高祐、山鹿流軍学の祖。吾々会津蒲生氏の臣たりしも、主家没落のため父子庵と共に江戸に移住し、林羅山の学を受け、安察使光宙に国学を学ぶ。六才にして北条氏長に就き軍学を講じ、蘊奥に達す。将軍家光その声名を聞き登用せんとせしも逝去して果さず。赤穂藩主浅野長貞、弟子の礼を執り兵学を修ぶ。列侯大夫の来る者多し。聖教要録を著はし程朱の学を排せしため、有司の忌憚に触れ、赤穂に幽せらる。屏居十年後釈されて江戸に帰り、軍学を講ず。慶安の年由比正雪の反乱に幕吏の嫌疑をうけ、落魄の間に終る。武教餘録、山鹿語類、配所残筆などあり。

山川健次郎
（安政元七―昭）

元会津藩士。明治初年米国に学び、帰朝後開成学校教授となり、ついで東大理学部教授を経て、總長たること前後二回。また京大、九大に總長たり。のち貴院議員東宮御学問所御評議員等にあげられ、枢密顧問官たり。大正12年男爵を授けらる。

山縣有朋 85才
（天保九・閏四―大正一一・二・一）
1838 1922

萩藩士。初名小介、狂介。松下村塾に学び、高杉、大村と奇兵隊を組織し幕軍を破って藩論統一に資し、また薩長聯合を謀り、戊辰の役東北征討に功あり、明治二年欧米視察後、兵権統一を計り、五年十一月徴兵令発布となる。西南役征討に功あり、十七年伯爵を授けらる。十六年内務卿、廿二年末総理大臣となる。日清戦役に司令官として出征、病にて召還されしも、廿八年功により侯爵に陞る。つゞいで伊藤内閣の法相を経て枢府議長となり、廿一年元勲の称号を賜ひ、同年末第二次組閣、日露戦役に帷幄にありて功あり、戦後大勲位功一級公爵となる。爾後枢密顧問官たり、伊藤の歿後、元老の第一人者として十有余年政界の背後にあり、薨後、国葬となる。

山縣少助（有朋） 66才
（文政四―宝暦二・八・十二）
1817 1952

孝孺。長州萩藩の文学者。年十九父良斎（長藩の儒官）に従って江戸に出で物徂徠に師事し、安藤東野と共にその高弟たり。帰国後、天保元年韓使来聘の饗応に際し応酬宜きを得て一時に名声を揚ぐ。爾後藩侯に常侍し、藩校明倫館の創立に力を致し、のちその祭酒たり。山根華陽、林東溟、瀧鶴台などの名儒、その門より輩出す。著述に為学初問、養子説、講学日記、文集、詩集などあり。

山口菅山（剛斎）
山口剛三郎

重昭、貞一郎。若狭人。上濱藩儒。

浪華の人。禪学・神道を修め、飯岡滄寧に儒学を学び、また越後流兵法の蘊奥に達す。はじめ大坂にて儒学教授、のち石見津和野藩主亀井侯の儒官となる。周易鼓缶、甲寅後抄、兵録、などの著あり。

山田常典

常介。江戸の人。村田春海門下の国学者。常中源氏物語系図、百人一首女訓抄などの著あり。

山田清安
（寛政三・十二・三）

一郎左衛門。号秋園、依樂園（サラク）。鹿児島藩士にして京都藩邸留守位役、国学を景樹に、考証学を信友に学び、設樂敦斉、徳之島紀行などの著あり。弘化四年藩に召還され、爾後藩内正義派の中心となり奸臣を除かんとせしも果さず、割腹を命ぜらる。

山田亦介 56才
（文化六―元治元・十二・一九）
1809 1864

実之（のち公章）。周防山口藩士にして勤王家。海防に意を用ひ造艦鋳砲の事を管す。元治元年八月亦間園の戦に大功あり、同年末藩内党議分裂に反んじて斬に処せらる。

山田宇右衛門
（文化四―明治四・十二・一一）
1807 1871

頼毅。号星山、また治心斎。長州藩志士。木戸孝允と力を戮せて藩政を刷新す。

山田顕義
（弘化元・九―明治三五・十一・四）
1844 1892

長州萩の人。吉田松陰の門に入り、また兵事に精通。維新の際藩侯に仕ふ。少にして藩侯を征ち、明治四年陸軍少将に任じ兵部大丞を兼ね、また全権大使岩倉具視に従ひ欧米に歴道さる。西南役に功あり中将に昇る。十三年司法大臣、十八年伯爵、のち枢密顧問官となる。

山田方谷 73才
（寛政七―明治一〇・六・二六）
1795 1877

安五郎、琳卿、備中の人、程朱の学を受け詩文をよくし（備中）松山藩主板倉侯に仕ふ。三十才江戸に佐藤一斎に学ぶ。帰国後家塾を開き、また藩の内治の改善に盡力す。藩主の老中となるや江戸に出で顧問たり。戊辰の変、隣藩朝命を奉じ来るや大義を守り哀訴につとめ主家断絶を防ぐ。三年致仕。のち備前閑谷黌の再興に聘せらる。陽明学に通ず。

山中信天翁
（明治一八・五・二五）

獻、子文、三河の人、上京して篠崎小竹、斎藤拙堂の門に儒を学び、本願寺に仕へて帯刀と稱す。嘉永年中勤王の諸子と交って功あり、維新後辞事となり石巻県知事に進む。退職後嵐山に閑居、詩人として聞ゆ。号対嵐山房

山梨稲川 56才
（明治八―文政九・七）
1771 1826

憲、玄度、儒者、駿州竜原の人、河内狭山侯の儒員陰山に学び、また大岳丈仲の僧石梁に就く。宣長の皇国古音研究より示唆を得て唐韻を研究し、秦以前の音、文の正音、古文ふることを唱へ（古聲譜考、聲微譜、說文緯、皇永経ふどを著はす）江戸に出で名儒碩学と論ぜんとし、居ること三月にして病没す。

山内容堂 46才
（文政一〇・一・九―明治五・六・廿二）
1827 1872

豊信、幕末の土佐藩主、幕府の政権奉還を斡旋して功績甚大、明治元年議定官に任ぜらる。東北鎮定に藩兵を遣はし、のち鳳輦に先んじて東京に来り、議院及び学校の創立を總裁す。問ふ久く疾を以て辞し、爵香間祗候となり、爾後詩歌を弄して自適す。

山村才助 38才
（明治七―文化四）
1790 1807

昌永、子明、常陸土浦藩士にして蘭学者、大槻磐水に洋書を学んで増訂条覽異言十三巻を編輯し、文化元年幕府に献ず。引つづき幕府の内命により露国地誌の飜訳に従ひ、業半ばに歿す。

山本権兵衛
嘉永五・一〇―昭

元鹿児島藩士、戊辰の際戰功あり、のち海軍に入り累進して大将に昇る。その間海軍々政に参画して勲績抜群。卅一年海軍大臣となり在職多年、大正二年大命を奉じて内閣を組織し、同十三年九月大震直後、再び内閣首班として国難救治の大計を樹つ。明治卅五年男爵を授けられ、四十年日露役の戰功により伯爵に陞せらる。

山地蕉窓 71才
（安永六―弘化四・八・七）
1777 1847

儒者、正誠、武一郎、亀田鵬斎に学び、天保六大詩家の一と稱せらる。

山田美妙斎 43才
（明治元・七・八―四三・一〇・二四）
1868 1910

東京の人、明治十九年大学予備門を途退学、紅葉等と硯友社を起し、小説、新体詩を発表、廿年三文一致の小説「武蔵野」を発表して文名をあぐ。のち国民新聞に関係、後年生は振はず。多くの短篇小説のほか、日本大辞書の編纂あり。

ユ

湯浅常山 67才
（正徳五―天明元・四・九）
1715 1781

元禄、新兵衛、備前岡山藩の儒者。はじめ江戸に出で服部南郭に学び帰郷後に藩に仕へ、のち又江戸へ出で太宰春台、井上蘭台、松崎観海等と交りを結ぶ。常山樓文集、文会雑記、熊沢先生行状、烈公遺事ほどの著あり。傍ら極めて武を好む。

結城蕾堂

明治時代の詩人。

由利公正 キミマサ 81才
（文政十二・一〇―明四・四・二八）
1829 1909

勤王家。初名三岡八郎。越前福井藩士。嘉永六年藩命により江戸に出で品川警備に当る。帰国後、武器改良、物産拡張に尽瘁。文久三年春嶽公の總裁職となるや江戸に出でその参謀たり。尊王を唱へて佐幕派のため一時幽囚にあひ、のち慶応三年徵士参与職を命ぜられ、明治元年五箇条御誓文を起草す。会計事務局判事として造幣局創設に関与。四年東京府知事。五年岩倉大使の渡欧に随行。十八年一月元老院議官、廿年五月子爵を授けらる。廿三年七月貴院議員。同十月廉香間祗候となる。

ヨ

與謝野寛
（明治六・二・三六―昭七）

與謝野晶子
明治十一・十二・七―

横井小楠 60才
（文化七―明治二・一・五）
1810 1869

時任、平四郎。細川氏の家臣。藩校時習館に学びてのち、天保十年藩命により江戸に遊学。藤田東湖等と知る。帰国後、弘化四年家塾を開き、末松謙澄を門下に入れ、実学派と呼ばる。西洋医術、西洋火術などの研究を門弟にすゝめ、南国の必要を痛論す。安政四年越前侯松平春嶽の聘に応ず。維新後、徵士として上京、制度局判事となり、国是六条を参与に進ず。二年三月退朝の帰途、攘夷の襲撃に遭ひて斃る。著述に海軍問答録その他あり。

横川省三 40才
（慶応元―明治三七・四・二一）
1865 1904

陸中の人。はじめ郷校の教員。のち東京に出で政客として自任。加波山事件及び三大事件建白運動に坐して入獄。のち東朝記者となり郡司大尉の北征に随ふ。日清役及び台湾役に従軍記者。日露戰前四川、蒙古を視察。ハイラルにて露人に捕へられ、ルビンの獄に在ること二旬。三十七年四月八日同志と東蒙古より敵の後方チ、ルビン付近に達し、露軍の輸送杜絶のため鉄橋破壞を企つるの際、巡邏隊に捕へられ同志沖禎介と軍法会議の下に銃殺さる。

横山由清 54才
（文政九―明治一二・一二・二）
1826 1879

国学者。東京の人。本間游清・井上文雄等に学び、太学中教授、元老院少書記官たり。皇位継承論、纂輯御系図などの著あり。

吉雄俊蔵

尚貞。号南準。長崎訳官。吉雄耕牛の次子。（寛政十二年没、七七才）蘭学を以て尾州侯に仕ふ。のち改名して常三。また常庵といふ。

吉井友實
（文政十二―明治四四・二三）
1828 1891

旧鹿児島藩士。幸輔。幕末大坂の鹿児島倉屋敷に勤仕。西郷・海江田等の勤王家と交誼深し。維新後朝廷に用ひられ、工部・民部・宮内の諸省に仕ふ。十五年より十七年まで日本鉄道会社の長。廿一年枢密顧問官に任ぜらる。

吉田令世

平太郎。号活堂。水戸藩の国学者。壮にして彰考館生員に補し、のち江戸に召され編修となる。烈公の侍読たり。のち公の弘道館を設くるや、藤田東湖（令世の妻は東湖の妹）と共に助教となり歌学局のことを掌る。学の要は国体を知るにありとなし、また歌文をよくす。東琴。聲文私言。厂代歌集勅撰考などの著あり。

吉田東洋 47才
（文化二―文久二）
1816 1862

元吉。土佐の儒者。政治経済に長じ、安政年間藩主山内豊信に抜擢せられ参政となり、士分安襲制度の改革、文武・開成二館の開設、海南政典の制定、良兵の養成に経綸の才を傾く。南国思想を抱きしため勤王党に忌まれ、文久二年春刺殺せらる。

吉田松陰 30才
（天保元―安政六・一〇・二七）
1830 1859

大次郎。寅次郎。号二十一回猛士。長州藩士。夙に国事を憂へ、嘉永六年江戸に至り將及私言、急務條議、攘夷私議などを著はし攘夷を論ず。ついで佐久間象山に教を乞ひ、その示唆により安政元年下田未航の米艦に潜入し渡米せんと企て、成らず、捕へられ禁錮さる。赦されてのち大原宰相に時勢論を上り、また老中間部詮勝を刺さんと計る。門第に大義を教へ、安政六年の大獄に坐し、江戸に刑せらる。著述に前楊の外、日記、文稿と名づくるものの数多く、その塾、松下村塾は、幕末尊王運動の一大源泉とされり。

吉益東洞 71才
（元禄六―安永二・九・二五）
1703 1773

醫家。為則。周介。安芸の人。家代々金瘡産科を業とす。古方を唱へ、元文三年以後京師に出で一世を動かす。著に類聚方、藥徵、医事古言、医事或問、方極、医方分量考などあり。

芳川顯正 80才
（天保十二・十二―大正九・一・九）
1841 1920

阿波の人。少にして長崎に医業を学び夙に天下の志士と交はる。明治四年参議伊藤博文と共に米国に遊ぶ。帰朝後諸省に仕へ、明治十七年内務大輔兼東京府知事。文相・法相・内相・逓相に任ず。貴院議員・子爵となり日露後伯爵に陞り枢府議長にして内大臣を兼ぬ。皇典講究所長・日本結核予防協会頭などとして尽す所多大。

芳野金陵 77才
（享和元・十二・二〇―明治四十一・八・五）
1802 1878

儒者。世自愿三郎（のち立蔵）。下總の人。文政六年江戸に遊学、亀田綾瀬（鵬斎の子）に就き同九年廿五才にして浅草に塾を開き教授。弘化四年田中藩本多侯の儒員となる。憂国の志深く藩の教育に盡し、文久三年十二月昌平黌の儒員に補せらる。維新後少博士に任ぜられ、中博士に進む。六年致仕。学庸の著あり。安井息軒・藤森弘庵・塩谷宕陰・藤田東湖等と親交あり。

山村通庵 80才
（寛文十二―宝暦元）
1672 1751

医家。重高・右一郎。伊勢松坂の人。後藤良山に学びて医術をよくす。嘗て温泉の効を試みんと欲して諸国巡歴、城崎・草津を天下の双璧とす。温泉変法を製して世人に施す。旁ら禪に参じまた香茶瓶花を喜ぶ。

ラ

賴春水 71才
（延享三―文化一三・二・一九）
1746 1816

芸州の人。山陽の父。はじめ詩を作り、のち尾藤二洲・古賀精里と共に程朱の学を講究。竹山・秋斎・茶山と往来して切磋。天明元年本藩儒員となる。寛政の儒風一新に力を致し、江戸に在るや幕命により昌平黌に書を講ず。所員剣志・師友志・在津紀事・在江紀事・竹原文集・春水遺稿などの著あり。春水の妻、飯岡義斎の次女にして名は静。廿才にして嫁ぎ翌年山陽を生む。淑徳あり、また教書を能くす。春水歿後梅颸と号す。

賴梅颸 84才
（宝暦一〇―天保一四・一・二九）
1760 1843

春水の弟。杏坪の兄。父亨翁の命により、其郷安芸竹原に医を業とし、兼ねて詩及び書を能くす。終身隠居して仕へず。

賴春風

賴山陽 53才
（安永九―天保三・九・二三）
1780 1832

襄、子成、久太郎。春水の子。十八才、叔父杏坪に従って東遊し尾藤二洲の塾に学ぶ。寛政十年帰郷、放蕩甚だしく廢嫡せらる。文化七年菅茶山に就く翌年三十二才京都に出で塾を開く。同十年広島に帰り、爾後京より屢〻西下して母を慰め、また名勝を探る。日本外史・日本政記・通議・春秋講義などの厚史研究及び文集・詩鈔などの著書極めて多し。梁川星巌・田能村竹田・中島棕隠等と親しく、門弟に後藤松陰・宮原節庵・藤井竹外・江木鰐水・塩谷宕陰などの俊才多し。

頼杏坪 79才
（宝暦―天保五・七・廿三 1756―1834）

惟柔、萬郎、春水・春風の弟。江戸に遊び商賀の学統をつぎ書及び詩を能くす。春水に後ること五年、三十才にして藝藩儒員となり、財政方面に貢献多く五十六才、地方の疲弊を巡視するに忍びず、学職を抛ち郡令となる。天保元年致仕す。

頼采眞

舜燾、左一郎、杏坪の男。

頼聿庵 56才
（享和元―安政二・八・朔 1801―1855）

元協、餘一、山陽の長子。祖父春水に養育され、杏坪の教督を受く。藩学の教授たりしも、執政（今中大学に遷され、嘉永三年職を遜はる。

頼支峰 67才
（文政六―明治廿二・七・八 1823―1889）

復、山陽の次子（聿庵の異母弟）。京都に生れ、明治元年東奮東幸に扈従し、同年大学二等教授に任じ、二年大学小博士に進み、従五位下に叙せられ、のち辞して京に帰り閑居す。

頼三樹三郎 35才
（文政八―安政六・一〇・七 1825―1859）

醇、鴨厓、古狂生。山陽の次三子（同石）。十七才、大坂の後藤松陰の門に入り、翌年江戸に出でし、米艦来朝後は眞剣に攘夷を策し、星巌、雪浜等と水戸への密勅降下を斡旋し、安政五年五月捕られ、翌年死刑に処せらる。

頼達堂 70才
（文化十二―明治十七・六・十 1815―1884）

鉞、春風の孫。山陽に育成せられ、若年昌平黌に学ぶ。帰京後、山陽亡き後は篠崎小竹に学び、大阪の菓舗吉野屋の堺浦支舗に主たり、書を讀み詩を作る。晩年堺師藩黌に奉職、二等助教授たり。

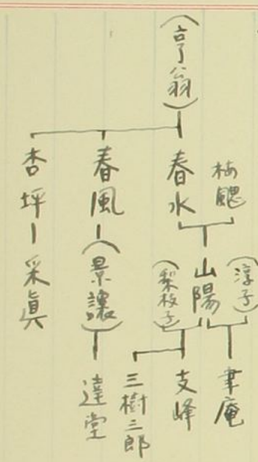
頼立斎 61才
（享和三―文久三・七・十三 1803―1863）

綱、寛郎、山陽の甥？ 京都の人。山陽の門にあって修学、詩文をよくし、兼ねて書及び篆刻に巧みなり。

頼誠軒

元啓、東三郎、聿庵の男。

（頼家系図）



禮々

リ

立綱

龍公美 79才
（正徳四―寛政四・二・二）1714 1792

大寂庵、近江の人にして江戸に住し、僧海量の門に入りて学び、頗る博学。伊勢物語眼非抄、国学正辨、さらく日記、眞宗応問録、眞宗めさまし草ほどの著あり。

京都の儒者、本姓武田氏、元亮、号草廬、徂徠春台の説を奉じて門弟に教授、また国学を好みて深く契沖の説を信ず。

龍眠 73才
（天明七―寛政元・十一・二三）1787 1789

書家、正木氏、名は瑣古、別号を玉淵堂・墨斎といふ、浅草に住し海苔を商ひ、龍沢の門に入りて書を学ぶ。

レ

蓮二 67才
（寛文五―享保一六・二・七）1665 1731

支考、俳人、はじめは禅僧、美濃の人、のち伊勢山田に住し、京兆に学びて俳道に達し、その紹介により芭蕉の直弟となる。本朝文鑑、俳諧十論、雑抄ほどの著あり。

ロ

蘆元 58才
（元禄三―延享四・五・四）
1690 1747

俳人。氏は仙石。茶話仙。黄鸝園里紅と号す。
の号をつぐ。

（前頁参照）
支考の門人にして獅子庵

ワ

若槻禮次郎

若林強斎 54才
（延宝七―享保一七・正・二〇）
1679 1732

進居。号寛斎。京都の人。浅見絅斎に儒学を、玉木葉斎に神道を学び、のち
師説を祖述す。兼ねて和歌をよくす。若林子語録及び遺稿あり。

鷲尾隆聚 71才
（天保十三―明治四五・三・四）
1842 1912

勤王家。右近衛中将隆賢の次子。夙に勤王討幕の志を抱き、文久二年侍従となる。
慶応三年十二月、密勅を奉じひそかに高野山に至り、四方志士を糾合して大阪城襲撃を
画策、別に十津川の壮士を招き紀州藩に帰順を迫る（田中光顕・香川敬三・中島信行等その麾下にあり）朝廷義挙を賞しひそかに錦旗
を賜ふ。明治元年二月奥羽征討総督。のち陸軍少将。十五年元老院議官に任ぜられ
十七年伯爵を授けらる。

綿引次郎右衛門

水戸の人。延栄。

渡忠秋 71才
（文化八―明治一四・六・五）
1811 1881

新太郎。号楊園。近江の人。京都に出で歌道を昇樹に学ぶ。のち宮内省
に出仕。讀史有感集、先人形ふとの著あり。

渡辺崋山 49才
（寛政五―天保十二・十・十二）
1793 1841

登、田原侯の家臣、画を文晁に学びて一世に鳴り、傍ら民政に力を尽し、風に蘭学を修めて西洋事情に通じ、慎機論・鴃舌小記・蕃論私記などを著して攘夷の不可を主張す。水野忠邦の蘭学禁圧に際して高野長英等と共に投獄せられ、民政上の功により死一等を減ぜられしも、藩侯に幕譴の及ぶに至り、自害す。内下に椿々山、福田半香など後年名を成せる画人あり。

渡辺小華 53才
（天保六―明治二十・十二・二九）
1835 1887

崋山の第二子、舜次、初め安井息軒に従って漢学を修め、また画を父崋山に、また父の門人椿々山に学び、画家として立つ。

渡辺国武 74才
（弘化三―大正八・五・二）
1846 1919

諏訪の人、十九才江戸に出で佛語、洋式兵学などを学ぶ。のち高知・福岡県令、大蔵省官吏を経て明治廿五年第一次伊藤内閣に蔵相、廿八年第二次伊藤内閣に逓相、ついで蔵相。日清戦役の功により子爵。のち財政整理に関して伊藤公と合はず隠退。

渡辺千秋 79才
（天保一四・五―大正一〇・八）
1843 1921

旧信州真島（諏訪）藩士、幕末維新の際東西奔走王事に勤労。明治に入って地方官、司法官、宮内官等に歴任、四十三年宮内大臣に任ぜらる。三十三年男爵を授けられ、四十年子爵、四十四年伯爵となる。

渡辺鼎

渡辺守助

BUMPODO
TOKYO
OSAKA FUKUOKA